南葵音楽文庫紀要

第2号

和歌山県立図書館

目次　CONTENTS

■論文・調査報告

・南葵音楽文庫の特徴と魅力 – 承前　―手沢本の世界―……7
美山良夫

・ミュージック・ライブラリーの夢
南葵音楽図書館の成立と展開（2）……15
林淑姫

・南葵楽堂の演奏会プログラム……25
篠田大基

・カミングス文庫とW. H. カミングスをめぐって
―W. H. カミングスとその生涯―……35
佐々木勉

・時代とともに／時代の傍らで　―スナール室内楽シリーズ―……43
近藤秀樹

■資料紹介

・トーマス・パーセル
「1678年2月8日付けジョン・ゴスリング宛書簡」と「権利委譲証書」……54
・ベートーヴェン　交響曲 第9番 ニ短調 作品125 総譜・パート譜……60
・ベートーヴェン《月光ソナタ》日本版初版　―楽譜と刊行の顛末―……66
・サン＝サーンス　チェロ協奏曲［第1番］作品33……70
・プロコフィエフ《スケルツォ》作品12-10……72
・ジル＝マルシェックス編曲
ラヴェル《ティータイムのフォックストロット》……74
・オペレッタの楽譜……78
・ネイラー　序曲《徳川頼貞》……82

■関連歴史資料

・徳川頼貞「英國だより」(1915年)……86

■収蔵資料　目録と紹介

・南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定……92
・ホルマン文庫所蔵　ジョセフ・ホルマン作品　解題と資料一覧……96

論文・調査報告

南葵音楽文庫の特徴と魅力 – 承前
―手沢本の世界―

美山良夫

4. カミングス文庫の「受容」

「この文庫の意味は、正にそれが一つの博物館であるといふ處に存します。この文庫の價値は、或る博物館の持つ價値であります。」(1)

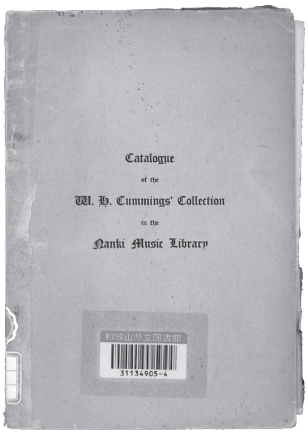
兼常清佐は、自らが整理にかかわったカミングス文庫について、このように記述している。音楽図書館の所蔵資料に博物館資料の価値を見いだすとは、どのような意味であろうか。日本に届いたカミングス文庫は、どのように受け入れられたのであろうか。

カミングス文庫の購入は 1917 年であった。戦火をさけるため発送を見合わせ、1920 年初めに南葵文庫に到着した。同年 7 月にはパイプオルガンが到着、11 月 22 日から 24 日にかけてオルガン設置記念演奏会が開催された。同時期にカミングス文庫の確認がおこなわれ、10 月から閲覧が可能になった。

その際、カミングス文庫の目録カードないしリストがどのように作成されていたのかは詳らかではない。関東大震災による南葵楽堂の損壊（1923 年 9 月）、南葵文庫所蔵資料の東京帝国大学寄贈と文庫建物の移管（1924 年 7 月）、東京帝大移管対象外となった南葵文庫の事務所を利用した南葵楽堂図書部の開設と閲覧開始（同年 10 月）が相次ぎ、翌 1925 年 5 月には徳川頼倫の逝去と葬儀が続いた。

このような震災後の変動が続いているさなかの 1925 年 2 月に、所蔵資料の整理と将来へ向けての組織等の検討が始まった。『南葵音樂事業部摘要』第 1 によれば、「大正十四年二月より兼常清佐氏 圖師尚武氏 遠藤宏氏 辻莊一氏等の援助に由り藏書の整理に着手し」とあり(2)、兼常清佐を含むチームが、おそらく未完成であった目録の作成も並行し担当したのであろう。

同年 10 月の南葵音楽事業部設立、ならびに付属機関としての南葵音楽図書館が開設につながるばかりでなく、12 月には『カミングス文庫目録』が刊行され(3)、



『カミングス文庫目録』（1925 年）
和歌山県立図書館蔵

（1）兼常清佐「音樂に關する著書及び器樂の譜について」『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』南葵音楽図書館 , 1926, p. 9-10.

（2）宮澤宗助『南葵音樂事業部摘要』第 1, 南葵音楽図書館 , 1929, p. 2.

（3）*Catalogue of the W. H. Cummings Collection in Nanki Music Library* (Nanki Music Library, 1925). 正式のタイトルと本文は英文だが、本論では便宜上『カミングス文庫目録』と記す。

翌年 1 月には冒頭に掲げた兼常清佐の一文を含む『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』が出版されている。

この 2 点の出版は、大変に意味深い。その理由は、カミングス・コレクションのうち南葵文庫にもたらされた部分、すなわちカミングス文庫を、音楽図書館資料としてどのように「受け入れる」のか、単に整理といったレベルをこえて、このような資料をいかに「受容」するのかという問題域に及んでいるからである。

『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』は、同文庫に含まれる資料について、兼常清佐が音楽書と器楽の楽譜を紹介する部分（80 ページ）と、辻荘一が声楽の楽譜を紹介する部分（83 ページ）との合本の形をとっている。紹介されている資料は、カミングス文庫の全点に及ぶものではない。執筆にあたり、参考にした音楽事典等が明示されており、参照しても立項されていなかった場合もその旨記されている。当時その種の参考文献もまた南葵音楽図書館をのぞき所蔵がないか稀で、一般には参照困難であったためであろう。

たとえば、ジョン・フルタードの通奏低音に関する著作の紹介にあたっては、「フルタードといふ名はリーマンにもグローヴにもフェティスにも載せられてゐない名であります。アイトネルにはこの本の名は擧げてありますが、著者の傳記はありません」と記される(4)。

兼常清佐はまた、音楽書類は音楽一般を学習するためものではなく、現代までの音楽が学習されてきた有様を組織的に語るものでもないとし、「それは全く蒐集といふ事のために蒐集されたものゝ様に見えます」と書いている(5)。さらに、蒐集と保存の事業は、「國家的には大博物館となります。個人的にはこのカミングス音樂文庫の様なものになります」とも書き、カミングス文庫を、稀少、貴重な資料が、日本では他に見られない資料が含まれている点でこの文庫の価値を博物館の価値になぞらえたのであった(6)。

「私共が何時この様な古い樂書を讀んで、それを研究する事が出來る様になるか、それは甚だ覺束ないものかもしれません。然しとにかくこの様な古い根本資料が日本に將來せられたといふ事は私共の非常な喜びであります。」(7)

（4）兼常 , 前掲書 , p. 24.

（5）兼常 , 前掲書 , p. 9.

（6）兼常 , 前掲書 , p. 2.

（7）兼常 , 前掲書 , p. 40.

5.「受容」における書誌と来歴

整理にあたった兼常清佐らの前には、資料とともに1917年にロンドンでおこなわれたカミングス・コレクションの競売目録があった[8]。兼常は、そこに掲載された1744点が、カミングス・コレクションのすべてであるとは到底考えられないとしつつも、全体がどのようなコレクションであったか、現在どこに保存されているのかについては何の知識もないと記している[9]。

競売目録は、南葵音楽図書館が1925年に『カミングス文庫目録』を刊行する際、資料に関する多くの情報や記載方法をここに依拠している。しかし、競売目録に記載がありながら、『カミングス文庫目録』では捨象されている事項、内容も少なくない。前節の最後の引用文のなかで、兼常清佐が「この様な古い樂書」と例にあげているのは、次の2点であった。

ボエティウス『著作集』Boethius, *Opera*. Venice, [1491-92]（オークションの競売番号319）
ザルリーノ『著作全集』*De Tvtte L'opere del R. M. Gioseffo Zarlino.* Venice, 1588-89（同1743）

319 Boetius (Anicius M. Severinus) Hec sunt Opera Boetii: que in hoc volumine continentur in Porphyrii Isagogen a Victoris translatam commentariorum, editio prima, lit. goth. *woodcut initials and diagrams, old oaken boards covered with stamped calf, double clasps,* FINE COPY
***folio. Venetiis, per Joan. et Greg. de Gregoriis fratres,* 1492**

競売目録（1917）の記載例：競売番号319

ボエティウスの『著作集』は、カミングス・コレクションに含まれて日本にもたらされたインキュナブラ4点のうちのひとつである。インキュナブラがはじめて日本で紹介されたのが1891年であるから、ボエティウスの『著作集』を含む4点は、わが国では最初期の揺籃期活版印刷本の例であった[10]。

競売目録には、ボエティウスの印刷本の装幀について「木版による頭文字(イニシャル)と図版（ダイアグラ

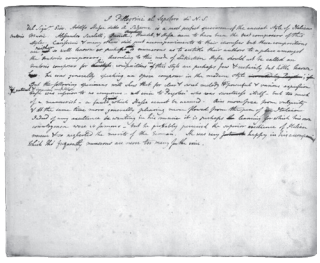
（8）*Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripits, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W. H. Cummings, Mus. Doc. Of Sydcote, Dulwich, S. E. (Sold by Order of the Executors)* (London: Dryden Press, 1917). 本カタログは、南葵音楽図書館における所蔵は目録上確認できるが、現在の南葵音楽文庫には見いだせない。
（9）兼常, 前掲書, p. 7. なお、カミングス・コレクションの全体像ならびにカミングスがどのようにコレクションを拡充したかについては、本紀要に掲載した佐々木勉氏の論考を参照願いたい。
（10）徳永聡子「南葵音楽文庫のインキュナブラ」『Oxalis:音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』1号（2007）, p. 25-28.

ム)、刻印された子牛の皮と二重の留め金がついた古いオークの板によるカバー」と記されている。

ザルリーノ『著作全集』の場合はどうであろうか。カタログは「この稀覯書はマルクス･メイボミウス旧蔵で、彼の自筆署名がタイトルページにある」と付記されている。メイボミウス (メイボム、1630 頃～ 1710/11 年) は、数学、文献学なかでも古代音楽に通じた碩学で、1652 年にはギリシア、ラテンの音楽文献を集め校注、ラテン語訳を付した『古代ギリシアの七つの音楽論』(11) を出版した。メイボミウスがこの出版にあたって、ザルリーノを参照したかまでは不詳だが、蔵書研究は創造過程研究に少なからず寄与する。メイボミウスの関心や探究の広がりを知る一助となろう。

しかし、『カミングス文庫目録』、『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』には、こうした書誌学的な関心や、資料の形態に関する記述、来歴に関する情報は、参照したはずの競売目録に記載がある場合でも、わずかな例外はあるものの、ほとんど注意が払われていないように思われる。

手稿資料もまた、カミングス文庫の整理、目録作成、紹介記述にあたって課題をもたらした。手稿資料整理の例として、J. A. ハッセ（1699 ～ 1783 年）の 2 部分からなるオラトリオ《我らが主［イエス・キリスト］の墓への巡礼たち》の筆写楽譜を見てみよう。オークション･カタログ (競売番号 844) の記載は以下のようになっている。



J.A. ハッセ《我らが主［イエス・キリスト］の墓への巡礼たち》筆写楽譜より（収蔵番号 N-3/19）

> Hasse (G.A.) Pellegrini al Sepolchro di U.S.
> Manuscript, *mostly in the handwriting of Dr. Crotch, half calf folio*. SÆC.XVIII

『カミングス文庫目録』の記述もほとんど同一である(12)。しかし、カタログの誤記である題名中の U.S. は、N.S.（Nostro Signore の略）と訂正している。この筆写楽譜は、イギリスの音楽家･画家のウィリアム･クロッチ (1775 ～ 1847 年) が自ら写譜した。イタリックで記された部分は、そのまま『カミングス文庫目録』に採録されている。そして、この作品がオラトリオであると追記している。原資料を照合し、精確な目録を目指していたことが窺える。

(11) Mrcus Meibomius(Meibom), *Antiquae musicae auctores septem* (Amsterdam, 1652). 国内では慶應義塾大学図書館（遠山音楽文庫）が所蔵。
(12) "Pellegrini al sepolchro di N.S. [*oratorio, mostly in the handwriting of Dr.Crotch.*]"（『カミングス文庫目録』, p. 6.）

その一方、資料のサイズの情報である *folio* は継承しても装幀については省略している。ハーフ･カーフ（*half calf*）とは、本の背が牛革装であることを意味しているが、この点を理解したうえで競売目録としては必要でも、資料の目録としては不要との判断が働いたのであろうか。なお、『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』には、本資料への言及は見られない。

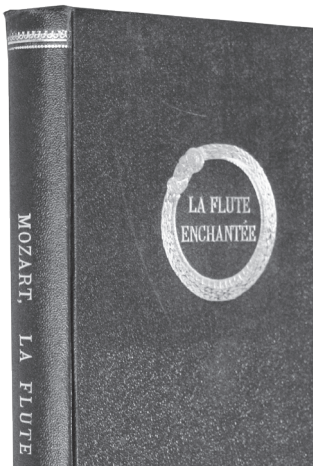
6. 南葵音楽図書館の庄司淺水

インキュナブラを含む揺籃期と、それに続く時代の印刷本、また装幀、造本、字体などへの関心は、南葵音楽図書館のなかで看過されたわけではない。1929 年に刊行された『南葵音樂事業部摘要』第 1 の巻末には、館長徳川頼貞以下南葵音楽図書館の職員 7 名の名簿が掲載されている。そのなかに装潢匠[13]、すなわち典籍等の装幀や美装を担当する専門家の名が掲げられている。

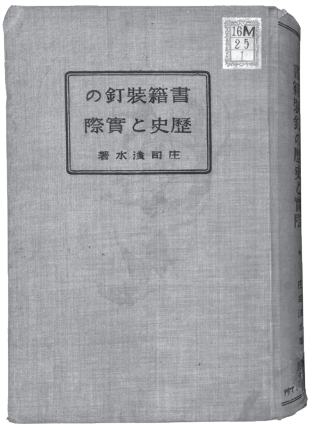
装潢匠の任にあったのは庄司淺水（本名は喜造。1903 ～ 91 年）であった。後に主に西洋古典籍、書誌学、造本・装幀に関する厖大な著作を残すことになる庄司は、学業を終えるとまもなく南葵音楽図書館に勤務している。

彼は自伝的著述のなかで、装潢匠としての業務内容については語っていない[14]。しかし、ただひとりの担当者として、南葵音楽図書館が所蔵する楽譜等の装幀をおこなったと思われる。和歌山県立図書館南葵音楽文庫閲覧室に並ぶ、臙脂色の布張り表紙に金箔押し、天金をあしらい、特注と思われる鶯色に金色のパターンをあしらった見返しの料紙を用いて、揃いの装幀を施されたオペラのヴォーカル・スコアの数々は、彼の日々の業務を伝えている。

庄司淺水の著述活動の処女作である『書籍装釘の歴史と実際』[15]を、徳富蘇峰は東京日々新聞の「日々だより」で「庄司君は書籍装釘の理論家たるばかりでなく、その実践家である。海外にはこの種の著作は稀有ではないが、わが国においては最初である」と紹介したという。この実践家という表現は、南葵音楽図書館の製本室等における職務が背後にある。むろん勤務先で直接手にしたカミングス文庫の典籍から得た刺激が、装幀家としての庄司



南葵音楽図書館製本室によるオペラのヴォーカル・スコア　金箔押しのエンブレム



庄司淺水『書籍装釘の歴史と実際』(1929 年)
慶應義塾大学図書館蔵

(13) 装潢匠（そうこうしょう）ないし装潢師は、画幅、書跡。典籍、文書等の修理や装飾をおこなう技術者で、すでに奈良時代に主として写経所で働いていたという。南葵音楽図書館は、別棟に製本室をそなえていた。
(14) 庄司淺水「書物研究家への歩み」『定本庄司淺水著作集　書誌篇』11 巻 , 出版ニュース社 , 1963.
(15) 庄司淺水『書籍装釘の歴史と実際』ぐろりあそさえて , 1929.

淺水の基礎になったに違いない。

処女作を上梓したのと同じ 1929 年、書誌研究家としての庄司は、南葵音楽図書館の古典籍について一文を残している。その『南葵音樂圖書館所藏のインキユナブルその他に就いて』(16)のなかで、庄司はカミングス文庫に含まれていた 4 点のインキュナブラを書誌の面から紹介している。先に言及したボエティウスの『著作集』の装幀について、「表紙には樫板を芯に使用し、茶褐色の犢皮總包み、背も平も一面、當時盛んに用ひられた線やアラビヤ語風の空押しがしてある。表裏とも模様は同じで、中央には曾て何か金属製のパネルでも附着して居つたかと思はるゝ跡が殘つている［以下略］」と、揺籃期印刷本に施された装幀を詳述している。

庄司は、他の初期活版印刷本も紹介したあと、カミングスが書籍の装幀に関する専門誌を購読し、フランシス・ベッドフォード（1799 ～ 1883 年）ら当時のイギリスにおける第一級の装幀家にのみ依頼していたと指摘してもいた。

音楽図書館職員であった庄司淺水を通じて、カミングス文庫は西洋のさまざまな装幀の実際に接しうる場として、わが国にこの分野の実例をもたらし、刺激をあたえることにつながった。

7. 手沢本の価値と魅力

世界で最も落札価額が高価な印刷本といえば、1623 年版の『シェイクスピア作品集』(17)、いわゆる「ファースト・フォリオ」が真っ先にあげられる。このシェイクスピア作品の出版史に占める画期的な意義については、厖大な研究の蓄積がある。ただし、当時またそれに続く時代にどのように読まれたのか、受け入れられていたのかとなると、そのための資料はきわめて少ない。そこで注目されたのが、テキストへの注記や余白への書き込みである。近年、世界に残存する「ファースト･フォリオ」への書き込みをすべて調査するという国際共同プロジェクトがおこなわれ、明星大学（東京・日野市）所蔵本のひとつが世界の注目を浴びるようになった。

このような関心や研究の動向は、書き込みや注記を、書物の「汚れ」や「穢れ」としてではなく、その書物の「個性」として見直し、そこから受容動向や各時代が見いだ

（16）庄司淺水「南葵音樂圖書館所藏のインキユナブルその他に就いて」『書物の趣味』第 4 冊 , ぐろちあそさえて , 1929.

（17）*Mr.William Shakespeare's Comedies, Histories, & Tragedies.* London, 1623. 約 750 部印刷され、235 部が現存、そのうち 12 部を明星大学が所蔵。

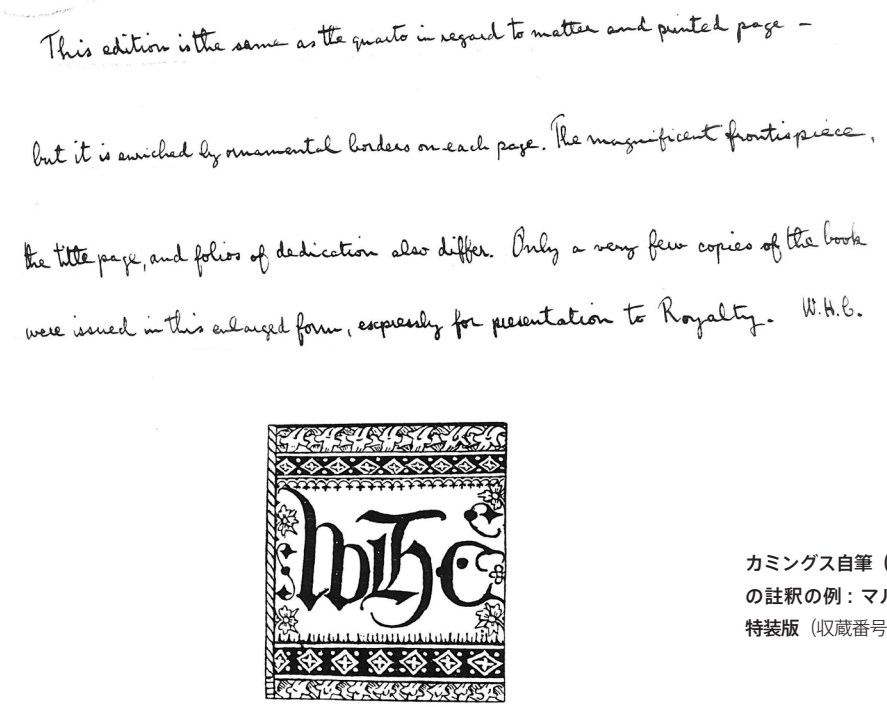
した価値が何かを探究する方向へとつながってきた。このとき重要になるのが、来歴と註釈者の同定、またその内容である。

来歴（provenance）は、次のような情報を含む。カミングスの所蔵となる前に、どのような立場の人物の蔵書であったか、カミングスはその資料（手写ないし印刷された書物や楽譜）をどのようにして入手したのか、たとえば前の所有者から直接譲り受けたのか、あるいは競売で入手したのか、競売であれば、そのカタログには当該資料についてどのような紹介文があったか、応札と落札の結果（落札価格は競争者がいてエスティメート、つまり落札予想価格より高くなったのか否か）などである。

カミングスは、彼の前にその資料を所持していた人の蔵書票を剥がさず、重ね張りもしない。競売で入手した場合は、そのカタログの記事切り抜きを貼り付けてもいる。来歴をきわめて重視していた。

註釈（annotations）者の同定とは、その資料に書き込みをした人が誰かが特定でき、できれば書き込みがおこなわれた年月日もわかるかである。通常は追記した人物は所蔵者であるから、来歴とも重なることになる。この点で、カミングス文庫はさまざまな音楽資料コレクションのなかでも、特別な位置にある。

カミングス文庫に含まれる資料には、旧蔵者、とりわけカミングス自身による書き込みがある例が大変多い。その内容は、多岐にわたる。筆写楽譜に含まれている曲目の詳細、資料の来歴、資料の稀少性や独自性について


This edition is the same as the quarto in regard to matter and printed page –
but it is enriched by ornamental borders on each page. The magnificent frontispiece,
the title page, and folios of dedication also differ. Only a very few copies of the book
were issued in this enlarged form, especially for presentation to Royalty. W.H.C.

カミングス自筆（イニシャル署名つき）の註釈の例：マルティーニ『音楽史』特装版（収蔵番号 M-7/25）

の見解、作曲者の自筆楽譜である点の指摘などが含まれ、またほとんどの場合彼の署名が添えられている。

カミングスは単なるコレクターではなく、声楽家、指揮者、音楽教育者であり、パーセルやヘンデルとその作品の研究家でもあった。そのため書き込みには、彼の造詣、蒐集の方向、作品についての理解や関連情報の取得、関心の広がりとその範囲、そして彼の時代の音楽観、歴史観が刻印されている。

蒐集者が集めた資料に、これほどまで広く深く関与している音楽コレクションは、ほとんど類例がない。来歴にかかわる情報を繙き、数多い註記や追記を分析することが望まれる。カミングス文庫が手沢本の宝庫である点は、実は 90 年も前に報じられてはいた[18]。しかしその研究は、いま端緒についたばかりである。

世界で、おそらく南葵音楽文庫に最もまとまって残っているカミングス旧蔵資料群は、まずインキュナブラやパーセル資料などその稀覯性により、次に装幀等の書誌学的な見地から、さらに手沢本の鉱脈としてそれぞれ特別な意味意義があり、それらが重層し渾然となっている。蒐集者の熱意が築きあげた著名な音楽資料コレクションが、前の世紀にあらかた散逸していった事実を顧みるにつけ、南葵音楽文庫につたわったカミングス文庫の価値に、あらためて震撼せざるをえない。

讀書界出版界

近く南葵で公開される

カミングス文庫

クロムエルやワグネルの手譯本

南葵音樂圖書館に數年間屋に埋れてゐたカミングス文庫が近頃一氏や倉橋清佐氏の努力で近く公開される運びとなつた。佛しその道の玄人筋はカミングス文庫の藏書は骨董品的の

珍本

だから普通の音樂研究家には利益をあたへない。丁度われ〳〵の家には骨董品よりも茶碗や急須の方が價値があるやうなものだ」とおつしやる。何にしてもカミングス文庫とは一體どんなものか。同圖書館で開くカミングス（一八三一年——一九一五年）は有名な音樂學士で或る音樂學校の校長をつとめ、ヘンリ、パーセル會の出版に盡力した人である

音樂時代には數會のオルガン彈きや歌唱ひをやり來國へ演奏旅行をしてゐる、歌劇としては二三通俗な音樂書があり、作曲もやつている。骨董趣味のあつた人で金にまかせて濫然と珍しいものを蒐集したものだがそれで世界的藏書家として知られているカミングス文庫には好事家の垂涎する珍本が六

千册

以上もある。南葵音樂圖書館にあるのは、約四百册位のもので、驚嘆に出たのを買つたのだからうまい汁は海外國に吸はれてしまつてゐる。それでも斯界の珍本を幾部でも我國に持つことを得たに就ては大いに德川公に感謝しなければならぬ。この文庫にはドイツのものは極めて少いが英國と佛國のものが多く得難い珍本である。珍中の珍ともいふべきは、クロムエルの直筆署名のある歴史の本（音樂書でないのが混つている）

ワグネルが其譜で以て

指揮

棒を振つたと傳へられているベートサベンの樂九「シンフォニー」の譜、伊のツアルリの全集これは音樂藏で常時無比の名文藏とされた珍書其他佛伊の數會音樂の譜などもあつて其等はベルリン博物館と米國の外ではどこでも見られないやうなものである。この通り總てが得難い貴重なものばかりで英國や伊太利の音樂の歴史を研究するには手にあまる程のものだから、一般の

音樂

家には餘り有難味もないまいが特殊の研究家には極めて貴重な文庫である。それは丁度侯爵上公のコレクションが天下一品であるやうにこの文庫も天下一品だと云へる。

讀賣新聞 1926 年 1 月 20 日

(18)「讀書界出版界」『讀賣新聞』1926 年 1 月 20 日 .

ミュージック・ライブラリーの夢
南葵音楽図書館の成立と展開（2）

林　淑　姫

1923（大正12）年9月1日

1923（大正12）年9月1日正午、相模湾を震源として発生した大地震はマグニチュード7.9、被災地域は湘南から南関東一円に及び、死者10万5000人、建物の全半壊、焼失およそ37万棟という巨大な震災をもたらした。帝都東京の被害はもっとも大きく死者6万、その多くは地震によって起された火災によるものだった。政府は混乱を収めるべく東京に戒厳令を発令したが、続いて起された大杉栄や朝鮮人の虐殺は日本近代史に暗い記憶を残した。

徳川頼倫が運営していた東京飯倉の南葵文庫は幸いにも、南葵楽堂とパイプオルガンに損傷を受けたことを除けば、比較的軽微な被害にとどまった。

この日、南葵文庫音楽部は「南葵音樂叢書」3冊を刊行している。ハンス･シュナイダー『音樂の感得』、フェルディナンド・プレーガー『音樂形式論』、チャールズV.スタンフォード『作曲の最近傾向を論ず』である(1)。原著は英国音楽学会誌*Proceedings of the Musical Association*および音楽雑誌掲載の論文で、翻訳はすべて門馬直衛(2)が担当した。30頁に満たない小冊子ながら､叢書刊行の趣旨「はしがき」に記されている通り､「表層をのみ素通り」する日本の西洋音楽受容の傾向に抗して「靜に音樂の眞髄に達し得たい」と願う若き研究者徳川頼貞の堅実な、しかし意欲的な試みであった。

Ch. V. スタンフォード著『作曲の最近傾向を論ず』(南葵音樂叢書 III)
門馬直衛訳　南葵文庫音楽部
1923.9.1 (南葵音楽文庫蔵書)

「南葵音樂叢書」の刊行は、音楽部がそれまでに蓄えた音楽蔵書の整理を終えて全面公開に漕ぎつけた1920年10月のあと、次の段階に向う最初のステップといってよいだろう。

1. 南葵文庫閉鎖と頼倫の死

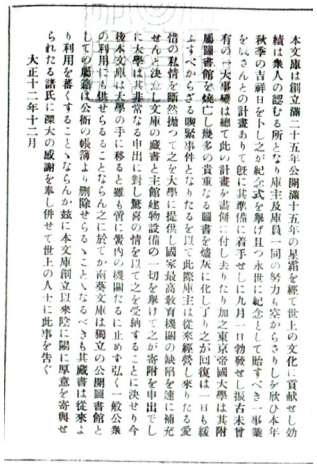
関東大震災が南葵文庫に与えた被害は前述の通り、深刻な事態には至らなかったものの、状況は秋に予定され

（1）「南葵音樂叢書」は全3冊。南葵文庫音楽部刊、岩波書店発売。いずれも1923年9月1日刊。同年12月20日付の重刷本がある。原著掲載誌は南葵音楽文庫所蔵。詳細は篠田大基「南葵音楽図書館の出版活動」『南葵音楽文庫紀要』1号（2018）参照。

（2）門馬直衛（1897～1961年）は音楽研究者、評論家。東京帝大法学部卒。大正期末から昭和戦後期にかけて精力的に執筆活動を行い、『ベートーヴェン』（1924年）、『樂典』（1925年）、『音樂解剖學』（1933年）など著書訳書多数。当時『月刊樂譜』などに寄稿していた。「南葵音樂叢書」は彼の著作が公刊された最初。

徳川頼倫（1872～1924年）

和田萬吉（1865～1934年）



本文庫は創立滿二十五年公開滿十五年の星霜を經て世上の文化に貢献せし効績は衆人の認むる所となり庫主及庫員一同の努力も空からざりしを欣ひ本年秋季の吉辰日を卜し之が紀念式を擧げ且つ永世に紀念として貽すべき一事業をいざさんとの計畫ありて既に其準備に着手せしに九月一日物發せし振古未曾有の大震災は總て此の計畫を書餅に付し去りたり加之東京帝國大學は其附屬圖書館を焼亡し幾多の貴重なる圖書を燼灰に化し了り之が回復は一日も緩ふすべからざる喫緊事件となりたるを見て此際庫主は從來經營し來りたる愛藏の數書を賑然拋つて之を大學に提供し國家最高教育機關の缺陥を速に補充せんと決し立ち文庫の藏書と主館建物設備の一切を擧げて之を寄附を申出でしに大學は非常なる申出に對し驚喜の情を以て之を受納することに決せり今後本文庫は大學の手に移ると雖も曾て當内の機關たる主めず弘く一般公衆の利用に供せらるることならん之に於て南葵文庫は獨立の公開圖書館としての使命は公衆の輿論より削除せらるゝことゝなるべきも其藏書は從來より利用を都くすることゝならんか茲に本文庫創立以來陰に陽に厚意を寄與せられたる諸氏に深大の感謝を奉し併せて世上の人士に此事を告ぐ

大正十二年十二月

南葵文庫閉鎖の告知
『南葵文庫報告』第15　南葵文庫，大正12[1923].12.29

ていた創立25周年公開15周年記念行事の中止を余儀なくさせた。一方で震災により焼失した東京帝国大学附属図書館の惨状が広く巷間に伝えられていた。日本図書館協会総裁であった徳川頼倫には、当時同館館長であった和田萬吉(3)を通してつぶさにその実態が伝えられたであろう。その年のうちに頼倫は南葵文庫蔵書と文庫本館建物を東京帝大に寄贈することを決断し、公表した(4)。

南葵文庫の東京帝大への寄贈手続きが完了したのは翌1924年7月4日のことである。官報は次のように伝える。

> ○南葵文庫受領　東京帝國大學ニ於テ本月四日侯爵徳川頼倫所有ニ係ル東京市麻布區飯倉町六丁目一四番地南葵文庫ノ寄附ヲ受領シ東京帝國大學附屬圖書館分館南葵文庫ト呼稱セリ（文部省）
> （『官報』3576号「彙報」　大正13年7月24日付）

頼倫の決断は一般には「侯爵の快挙」として賞賛されたが、批判がなかったわけではない。民間に公開された私立図書館が保持していたもうひとつの使命――一般公開性――が果たされなくなるではないかという秘かな疑問と批判である。南葵文庫司書で文庫閉鎖とともに東京帝大附属図書館に転じた小説家喜多村進は、短編小説「鳩巣を造る」の主人公に次のように言わせている。

> 「之を學府に呈上することは、學府の喜びには違ひがなからう。だが、一度學府に収められた暁は、學府以外の民衆は今日の制度では容易にその圖書に接することが出來ぬ。今日まで、この圖書館が民間にあつたために、どれ丈け多くの民衆を裨益し民衆に愛されたか知れない、圖書館は民衆を對手としてこそ最もその能力が発揮される。何を苦んで政府が支持する學園に寄附する要ありや、妄も甚しい。」
> （『書物展望』1巻2号（1931年8月）掲載）

頼倫がそのことを思わないわけはない。頼倫は当初、文庫を建物ごと寄附することにより帝大附属図書館分館となった以上、従来通り公開図書館としての機能が継続

(3)和田萬吉(1865～1934年)は国文学者。日本に図書館学を導入した先駆者。日本文庫協会（のち日本図書館協会）創設にかかわり、数次にわたって会長を務める。徳川頼倫の日本図書館協会総裁就任は彼の熱心な慫慂によるもので、以来頼倫と親しく交遊した。1893（明治26）年より東京帝大附属図書館長を務めていたが、関東大震災直後の1923年11月辞任。

(4) 大正12年12月付。『南葵文庫報告』第15に掲載。図版参照。

されるものと考えていた。言い換えれば公開機能の継続のために建物、設備をともに寄附したのだったのではなかったか。そのことは上記「報告」掲載の告知文の一節からも見てとれる。

> 今般本文庫は大學の手に移ると雖も啻(ただ)に黌(こう)内の機關たるに止めず、弘く一般公衆の利用にも供せらるることならん、之に於てか南葵文庫は獨立の公開圖書館としての屬籍は公衙(が)の帳簿より刪除(さんじょ)せらるることなるべきも、その藏書は從來より利用を善くすることゝならんか。
>
> （『南葵文庫報告』第15）（句読点、ルビ筆者）

しかし結局、1928（昭和3）年4月、蔵書は建て直された本郷の帝大図書館に移され、分館南葵文庫は完全に閉鎖されるに至った。

頼倫は1924年7月の南葵文庫移管後、11月に狭心症の発作を起し、その後暫く和歌山白浜で静養している。翌1925（大正14）年5月19日、宮内省宗秩寮総裁の勤めを終えて帰宅後に急逝。享年54。頼貞32歳の春のことであった。

徳川頼貞と為子夫人（1921年）
『音樂界』大正10［1921］年2月号　口絵

2. 南葵楽堂図書部から南葵音楽図書館へ

頼倫は「文庫」の移管時に、「音楽部」所管の蔵書を切り離し、頼貞に委ねた。頼貞は移管の年の10月、新たに「南葵楽堂図書部」を開設し、旧文庫事務棟で業務を続行した。1920年に到着した「カミングス文庫」の本格的整理が計画されていたこともあろう。事業の中断を避けるための経過措置であったと思われる。整理は1925年2月に兼常清佐、辻荘一らを迎えて着手されたようである。

南葵楽堂図書部開設からちょうど1年経った1925（大正14）年10月、カミングス文庫および新規受入資料の整理を完了させるとともに[5]新しい組織のための準備を終え、新たに「南葵音楽事業部」が誕生、附属図書館「南葵音楽図書館」が開設された。

南葵楽堂図書部表札
（1924～25年）

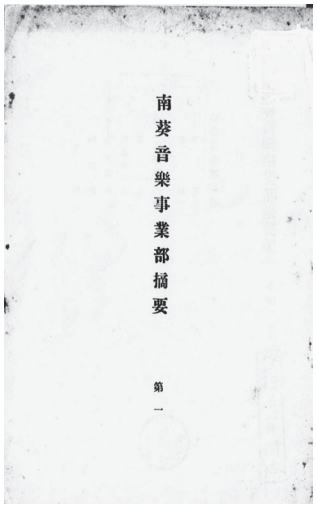
3. 南葵音楽事業部と南葵音楽図書館

南葵音楽事業部設立までの経緯ならびに初期の活動については、1929（昭和4）年に刊行された『南葵音樂

（5）兼常清佐、辻荘一編著による目録と解題書が南葵音楽図書館より刊行されている。*Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*（1925年12月刊）。『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』（1926年1月1日刊）。

事業部摘要』第１[6]に詳しい。同書に拠れば、南葵音楽事業部の事業内容並びに組織は次のようなものであった。

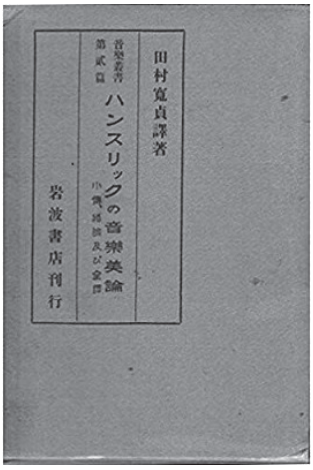
南葵音樂事業部規則（1925年9月付）
［事業内容］
一、音樂ニ関スル研究、調査著作等ヲ助成シ、斯道ノ普及発達ヲ奬勵スルコト
二、専門家ニ委嘱シテ特殊ノ研究、調査ヲ爲シ又ハ有益ナル文献ヲ出版スルコト
三、音樂堂ヲ設立シ音樂演奏會及ビ講演會等ヲ開クコト
四、音樂圖書館ヲ設ケ音樂圖書樂譜等ヲ蒐集シテ之レヲ一般ニ公開スルコト
五、其ノ他本事業部ノ目的ヲ遂行スルニ必要ト認メタルコト
［組織と陣容］
部長　徳川頼貞
理事評議員　小泉信三、黒田清、山東誠三郎、高見廉吉（南葵樂堂主事）、宮澤宗助
評議員　鎌田榮吉、上田貞次郎、田中正平、田村寛貞、上野直昭、兼常清佐、圖師尚武、辻荘一、遠藤宏、木岡英三郎、喜多村進



『南葵音樂事業部摘要』第１(1929年)

音楽事業部規則とともに音楽図書館の組織も定められた。
館長　徳川頼貞
主事　宮澤宗助
掌書長　喜多村進　ほかスタッフ４名

頼貞は南葵音楽事業部を組織するにあたって、運営陣に旧南葵文庫以来の鎌田栄吉、上田貞次郎らに加えて、長老田中正平（1862～1945年）をはじめ、兼常清佐（1885～1957年）、田村寛貞（1883～1934年）、辻荘一（1895～1987年）、遠藤宏（1894～1963年）ら中堅・若手の音楽学者を集めブレーンとした。欧米留学から帰国したばかりの木岡英三郎（1895～1982年）も主任オルガニストとして加わっている。田村寛貞はハンスリック『音楽美学』の最初の訳者として今日知られているが、1916年に発表した著書『リッヒァルト･ワークナー』は、同年刊行の大田黒元雄『バッハよりシェーンベルヒ』とともに青年研究者による大著として楽界を驚かせ「近来の名著」と騒がれた。事業部評議員で附属



田村寛貞訳著『ハンスリックの音樂美學　小傳、緒論及び全譯』
岩波書店，大正13[1924].12.10.5
（音樂叢書第２編）

（6）『南葵音樂事業部摘要』第１　南葵音楽図書館，昭和４年４月20日刊。

図書館掌書長の喜多村進は、南葵文庫10年勤続、文庫閉鎖後は東京帝大司書として分館南葵文庫の業務に従事していたが、文庫蔵書が東京帝大に移された1928年4月を以て退職、頼貞に請われて南葵音楽図書館の主任司書を務めた。旧音楽部設置以前から音楽資料の整理にあたってきたベテラン司書である(7)。また図書館スタッフ4名のなかには「裝潢(そうこう)匠」(製本装本)として庄司淺水(1903～91年)の名が見える。

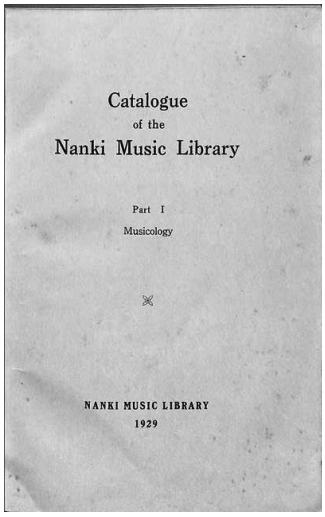
「南葵文庫音楽部」が、1924年7月の「南葵文庫」移管により独立して「南葵楽堂図書部」となった時点での蔵書数は、「カミングス文庫」を含む音楽書865点、楽譜1829点であった。「南葵音楽図書館」の設立以降音楽専門図書館として活動を開始するためには、参考図書を含めて蔵書の見直しが図られたであろう。5年後、1929(昭和4)年当時の蔵書数は、音楽書・楽譜およそ2万点、レコード2500枚と報告されている(8)。一般蔵書とは別に、記念文庫があり、既述の「カミングス文庫」、館長徳川頼貞とかねてより親交のあったオランダのチェロ奏者ジョゼフ・ホルマン Joseph Hollman(1852～1927年。23年来日し演奏会を開く)の歿後に受け入れた「ホルマン文庫」(楽譜1030点)、音楽教育の先駆小山作之助(1864～1927年)の歿後に遺族より寄贈された「小山作之助文庫」(図書・楽譜2330点)、理事田村寛貞が訪独の際、音楽史学者フリートレンダー Max Friedlaender(1852～1934年)より蔵書の一部を受入れた「マックス・フリードレンデル文庫」(音楽書・雑誌244冊)のほか、新劇俳優で雅楽研究者の東儀鐵笛(1869～1925年)の日本音楽史遺稿、ベートーヴェンをはじめとする西洋作曲家の原稿、書簡などが含まれていた。

「南葵音楽図書館」はその利用規程によれば、日曜・祝日および年末年始の10日間を除く週6日、朝9時より午後4時まで開館し、利用手続きは所定の書類に記入の上、閲覧証を発行した。閲覧料は無料。南葵音楽図書館の利用規程を含む運営方針はほぼ旧南葵文庫を踏襲している。

「南葵音楽図書館」には資料閲覧室のほかにレコード試聴室3室(蓄音機ヴィクトローラ、エオリアン)が置かれ、ほかにピアノ室、研究室、製本室を備えていた。研究室の設置は「事業部」の事業内容第一、二項に挙げ

(7)掌書長喜多村進(1888～1958年)については、拙稿「ミュージック・ライブラリーの夢[1]」『南葵音楽文庫紀要』1号(2018)参照。

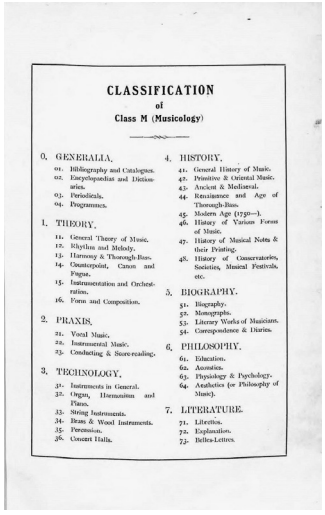
(8)喜多村進手記「徳川頼貞侯の横顔」(1932年)では、音楽書3300冊、楽譜3900冊、パート譜(片譜)を含めて3万冊、レコードおよそ3500枚、とある(和歌山県立博物館「喜多村進資料」資料番号133)。


Catalogue
of the
Nanki Music Library

Part I
Musicology

NANKI MUSIC LIBRARY
1929

音楽書蔵書目録（1929 年）


CLASSIFICATION
of
Class M (Musicology)

0. GENERALIA.
01. Bibliography and Catalogues.
02. Encyclopaedias and Dictionaries.
03. Periodicals.
04. Programmes.

1. THEORY.
11. General Theory of Music.
12. Rhythm and Melody.
13. Harmony & Thorough-Bass.
14. Counterpoint, Canon and Fugue.
15. Instrumentation and Orchestration.
16. Form and Composition.

2. PRAXIS.
21. Vocal Music.
22. Instrumental Music.
23. Conducting & Score-reading.

3. TECHNOLOGY.
31. Instruments in General.
32. Organ, Harmonium and Piano.
33. String Instruments.
34. Brass & Wood Instruments.
35. Percussion.
36. Concert Halls.

4. HISTORY.
41. General History of Music.
42. Primitive & Oriental Music.
43. Ancient & Mediaeval.
44. Renaissance and Age of Thorough-Bass.
45. Modern Age (1750—).
46. History of Various Forms of Music.
47. History of Musical Notes & their Printing.
48. History of Conservatories, Societies, Musical Festivals, etc.

5. BIOGRAPHY.
51. Biography.
52. Monographs.
53. Literary Works of Musicians.
54. Correspondence & Diaries.

6. PHILOSOPHY.
61. Education.
62. Acoustics.
63. Physiology & Psychology.
64. Aesthetics (or Philosophy of Music).

7. LITERATURE.
71. Libretos.
72. Explanation.
73. Belles-Lettres.

分類表（上掲書所収）

られた「研究調査」事業に即している。レコード試聴室はユニークである。閲覧者が自由に試聴できる設備を整えた図書館は当時、音楽学校を含めて存在しない。

南葵音楽図書館蔵書の整理法

閲覧室に置かれた参考図書、雑誌最新号以外は書庫閉架式で、閲覧者はカード目録を検索して資料を請求するシステムである。

分類法

分類表1929年版（別表1、2。1920年版との比較表として作成）は大綱としてはアメリカ議会図書館（LC）の音楽書と楽譜を別体系とする方法を採用した。

旧音楽部時代にはカッターの展開分類法にしたがって、それまで用いられていなかったアルファベットMを音楽資料全般にあて、a～eを音楽書、f～rを楽譜に用い、それぞれをアラビア数字1桁で細分した。かなり大まかな列挙型分類で蔵書が質量ともに少ないうちは事足りたかもしれないが、音楽専門図書館として新たに発足した1926年以降は不足を覚えたことだろう。

1929年に刊行された『南葵音樂事業部摘要』第1および音楽書蔵書目録 *Catalogue of the Nanki Music Library. Part I. Musicology*(9) の巻頭に掲げられた音楽書分類、上記『事業部摘要』に記された楽譜分類を見ると、大幅に改定されたことが分る。最終版となった分類表は、全蔵書を音楽書M（Musicology）、楽譜N（Music Notes）、その他の文献（音楽外書）L（Referencies）に分け、それぞれの区分を数字2桁によるシンプルな十進法で展開する。『事業部摘要』の分類表は、ローマ数字とアラビア数字の組み合わせで表示されているが、実際にはアラビア数字2桁の展開形が用いられた。分類排架を可能とし、同一分類中の図書記号は受入れ順番号を採用したようである。表記法はベートーヴェンの書簡集を例にあげると、「M54／35」となる。（「M」音楽書、「5」は「伝記」、「4」は「書簡集、日記」、「35」が図書記号）

音楽書Mの分類項目は、『事業部摘要』が誇らしげに報告しているように、体系的音楽学と音楽史学に分け、音楽史区分を「原始」「古代・中世」「ルネサンス・通奏低音時代」「近代（1750年～）」とするなど、蔵書の実態に見合って簡略化されているものの、ほぼリーマンの

（9）*Catalogue of the Nanki Music Library. Part I. Musicology*. Nanki Music Library, 1929. 372, 25 p., 23 cm. 著者索引付。Part II として楽譜所蔵目録が計画されていたようだが刊行されなかった。楽譜分類表の最新版は『南葵音楽事業部摘要』第1による。

学説に添って作成されている。

楽譜分類Nの項目はLC分類に添って器楽から声楽へと展開（DDCは声楽から器楽）、細分は編成によって展開するが、この展開は室内楽、管楽器アンサンブルまでで、オーケストラの項目はなく、形態を考慮して設定されたフルスコア、ミニチュアスコアのどちらかに属することになる。旧音楽部時代の分類と比して実用的になってはいるものの、分類表としては必ずしも十全とは言い難い。そのほかにも、例えば旧版（LCの影響が顕著である）に挙げられていた宗教音楽 “Hymn and Sacred Music” の項目はみられない。カードボックスを繰っていくと、声楽（VII）に「7. オラトリオ、ミサ、その他」が加わっている。制定後も補訂作業が進められていたようである。

関連文献（音楽外書）Lの分類はデューイ十進分類法（DDC）11版に拠った。

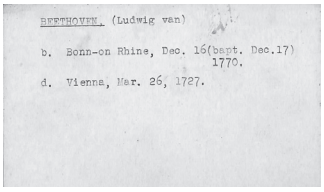
音楽専門図書館の蔵書の実態に即した独自の分類表の作成には工夫が必要だった筈である。参考とした文献も少なくはなかったであろう。蔵書中にLCの音楽分類表 *Classification of Music and Books on Music* の1904年版と17年版が見え、その痕跡をとどめている。南葵音楽図書館スタッフが考案した分類法は1960年代から70年代にかけて日本の音楽図書館界が悩んだ問題のひとつ、音楽書と楽譜を別体系にするか否か等に、時代性を反映しつつも一定の解決策を示している。南葵音楽図書館はその意味でも日本の音楽図書館の先達といわねばならない。

目録法

カード目録は、図書・楽譜については著者・作曲者名と分類、レコード目録は作曲者名と演奏者名から検索できるようになっていた。図書・楽譜の記述目録は標目基本記入方式であり、楽譜、和書を含む全資料の目録法は洋図書に準じていた。主要作曲家については典拠カードも作成された。目録法についてはアメリカ議会図書館Library of Congress (LC) の記述目録法を参考にしたであろうことが当時のカードから読みとれる。図書目録は単行書ばかりでなく、英国音楽学会誌 *Proceedings of the Musical Association*（現 *Journal of the Royal Musical Association*）、国際音楽学会論文集 *Sammelbände der internationalen Musikwissenschaft* や *Die Musik* など主要な逐次刊行物の論文索引も作成されている。

南葵音楽図書館時代のカードボックス
黒澤商店製 (プレート「Teijiro Kurosawa, Ginza, Tokyo」) 木製。高さ 100cm、幅 51cm、奥行き 40cm. 3 段重ね。27 ケース。

カードボックス抽斗

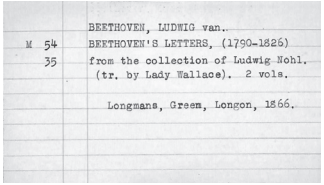


BEETHOVEN, (Ludwig van)

b. Bonn-on Rhine, Dec. 16(bapt. Dec.17) 1770.

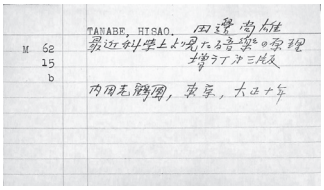
d. Vienna, Mar. 26, 1727.

作曲者典拠カード



BEETHOVEN, LUDWIG van.
M 54 BEETHOVEN'S LETTERS, (1790-1826)
35 from the collection of Ludwig Nohl.
(tr. by Lady Wallace). 2 vols.
Longmans, Green, Longon, 1866.

洋書目録カード



TANABE, HISAO. 田邊尚雄
M 62 最近科學上に現れる音樂の原理
15 增訂第三版
b 内田老鶴圃, 東京, 大正十年

和書目録カード

作成された目録カードおよそ20,000枚は黒澤商店製のカードボックスに収められて、今日まで残されてきた。このカードボックスについては調査、整備の途中にあり、中間報告となるが、ボックスの構成は次の通りである。（　）内の数字はケース数

○音楽書 “Musicology”（逐次刊行物を含む）
著者目録（3）、分類目録（4）のほか、音楽家に関する目録 “Bibliographies of Musicians”（被伝者を標目とする単行書副出と論文）（2）、東洋および原始音楽の書誌目録 “Bibliographies of Oriental and Primitive Music”（1）、*SIMG: Sammelbände der internationalen Musikwissenschaft*（Jg.1-15, 1899-1914）より分出された論文目録（4）

○楽譜 “Music Notes”
作曲者目録（6）、分類目録（5）および、ホルマン文庫楽譜目録 “Musician’s Collection”（1）

レコード目録は見出すことができない。空ケースが1つあること、ケースの配置が乱雑であること、作成中の目録原稿がところどころ見られること、また各ケースにカードがぎっしり詰め込まれ、排列もひどく混乱している等々の状況から推して、当時のままではなく、引っ越し用に梱包された状態のものと思われる。おそらくボックスも複数台あったであろうし、カードもすべてではなかろう。カード記入自体も今日からすれば混乱もある。それでも当時の整理担当者の労作は90年の時を隔てて、私たちに多くを語りかけてくる。

南葵音楽図書館は南葵音楽事業部が設定した事業内容一、二（研究調査、出版）の実施の現場でもあった。蔵書形成にもこの研究部門が大きく係わっている。南葵音楽図書館のすぐれた蔵書および研究部門の業績については稿を改めたい。

別表 1　南葵音楽図書館分類表　音楽書

南葵音楽図書館版（1929）

class M

O. Generalia ［総記］
- 01 Bibliography & Catalogues.
- 02 Encyclopaedias & Dictionaries.
- 03 Periodicals.
- 04 Programmes.
- 05 Polygraph.
- 06 *Manuscripts, Letters, etc.*

I. Theory ［音楽理論］
- 11 General Theory of Music
- 12 Rhythm and Melody
- 13 Harmony, Thorough Bass
- 14 Counterpoint, Canon & Fugue
- 15 Instrumentation & Orchestration
- 16 Form & Composition

II. Praxis ［実技］
- 21 Vocal Music
- 22 Instrumental Music
- 23 Conducting & Score-reading

III. Technology ［楽器・器楽］
- 31 Instruments in General
- 32 Organ, Harmonium and Piano
- 33 String Instruments
- 34 Brass & Wood Instruments
- 35 Percussion
- 36 Concert Halls

IV. History ［音楽史］
- 41 General History of Music
- 42 Primitive & Oriental
- 43 Ancient & Medieval
- 44 Renaissance and Age of Thorough-Bass
- 45 Modern (1750-)
- 46 History of Various Forms of Music
- 47 History of Musical Notes & Their Printing
- 48 History of Concervatories, Societies, Musical Festival, etc.

Ⅴ. Biography ［伝記］
- 51 Biography
- 52 Monographs
- 53 Literary Works of Musicians
- 54 Correspondance & Diaries

VI. Philosopy ［音楽哲学］
- 61 Education
- 62 Acoustics
- 63 Physiology & Psychology
- 64 Aesthetics (Philosophy of Music)

VII. Literature ［関連文献］
- 71 Librettos
- 72 Explanation
- 73 Belles-Lettres ［音楽に関する文芸作品］

『南葵音樂事業部摘要一』および *Catalogue of the Nanki Music Library. Part I. Musicology*（いずれも 1929 刊）掲載の分類表に基づいて編集した。
01、11…は展開形。和文は筆者補記。

南葵文庫音楽部版（1920）

class M

a. GENERALIA
- a1 Dictionaries
- a2 Reports, Proceedings, Year-Book, Directories
- a3 Programmes
- a4 Catalogues
- a5 Magazines

b. MUSICOLOGY
- b1 Grammar
- b2 Harmony
- b3 Counterpoint
- b4 Canon
- b5 Fugue
- b6 Orchestration
- b7 Composition and Form
- b8 Playing
- b9 Singing

c. LITERATURE
- c1 Criticism and Essays
- c2 Poetry
- c3 Fiction
- c4 Drama
- c5 Libretto
- c6 Interpretation

d. HISTORY AND BIOGRAPHY
- d1 History
- d2 Biography

e. PHILOSOPHY AND PHYSIOLOGY
- e1 Education
- e2 Psychology
- e3 Aesthetics
- e4 Acoustics
- e5 Physiology

Catalogue of the Nanki Music Library. (Books on Music) II (1920) 掲載の分類表による

別表２　南葵音楽図書館分類表　楽譜

南葵音楽図書館版（1929）

class N

O. Generalia
1 Complete Works
2 Series
3 Collection & Selection
4 Manuscripts
5 Facsimile, etc.

I. Pianoforte
1 Schools and Studies
2 Pianoforte Solo
3 Pianoforte Duet (4 hands)
4 2 Pianos 4 Hands
5 2 Pianos 8 Hands
6 Virginal, Harpsichord & Clavichord

II. Organ & Harmonium
1 Organ
2 Organ with Other Instruments
3 Harmonium
4 Harmonium & Pianoforte

III. Violin
1 Schools and Studies
2 Violin Solos.
3 Violin Duet, Trio, etc.
4 Violin with Pianoforte.
5 Violin with Other Instruments.

IV. Viola, Violoncello & Double-Bass
1 Viola
2 Violoncello Solos
2*(3)*Violoncello Duet, Trio, etc.
4 Violoncello with Pianoforte
3*(5)*Violoncello with Other Instruments
4*(6)*Double-Bass
7 Miscellaneous

V. Chamber Music
1 String Trio
2 String Quartet
3 String Quintets
4 String Sextet, Septet, Octet, etc.
5 Piano Trio
6 Piano Quartet
7 String Quintet, Sextet, etc.
8 Miscellaneous *[不使用]*

VI. Wind Instruments, etc.
1 Wood Instruments.
2 Brass Instruments
3 Percussions
4 Harp
5 Mandolne, Gitar, etc.

VII. Vocal Music
1 Vocal Exercises & Solo
2 Song with Piano-accompt.
3 Song with Other Instruments
4 Vocal Duet, Terzet, Quartet, etc.
5 Choral Works (a Cappella & piano score or organ accomp.)
6 Opera and Dramatic Works with Piano Score
7 Oratorio, Mass, etc., with Piano accomp

VIII. Full Score
1 Song with Orchestra
2 Choral Works
3 Opera & Dramatic Works
4 Symphonie & Poem
5 Suite & Ballet
6 Overture
7 Concerto, etc.
8 Various Orchestra Works

IX. Miniature Score
1 Vocal Works
2 Opera & Dramatic Works
3 Orchestral Works
4 Concerto, etc. …
5 Chamber Music
6 Pianoforte, etc. …

『南葵音樂事業部摘要』第１（1929）掲載の分類表による。
実際の分類記号はローマ数字をアラビア数字に置き換えて細分化し、
01、11…71 のように 2 桁で展開する。斜体はカードボックスに追加された項目。

南葵文庫音楽部版（1920）

class M

a. ～ e. は音楽書（別表 1 参照）

f. PIANO
f1 Solo
f2 Four-hands and others
f3 Trio
f4 Quartette
f5 Quintette
f6 Sextette
f7 Septette
f8 Octette
f9 Nonette

g. ORGAN AND HARMONIUM
g1 Solo
g2 Four-hands and others
g3 Trio
g4-9

h. VIOLIN
h1 Solo
h2 Duetto
h3 Trio

j. STRING
j1 Solo
j2 Duetto
j3 Trioj2
j4 Quartette
j5 Quintette
j6 Sextette
j7 Septette
j8 Octette
j9 Nonette
j9' Monette
jj Orchestra

k. BRASS and WIND
k1 Solo
k2 Duetto
k3 Trio
k4 Quartette
k5 Quintette
k6 Sextette
k7 Septette
k8 Octette
k9 Nonette
k9' Monette

l. BAND

m. ORCHESTRA

n. PERCUSSION AND OTHER INSTRUMENTS

o. VOCAL SCORE
o1 Solo
o2 Duetto
o3 Trio
o4 Quartette
o5 Chorus (opera)

p. HYMN AND SACRED SONG

q. JUVENILLE

r. MISCELLANEOUS

Catalogue of the Nanki Music Library.(Musical Scores) II
（1920）掲載の分類表による。

南葵楽堂の演奏会プログラム

篠田大基

日本初の本格的コンサートホールであった南葵楽堂が、1918（大正7）年の開堂から1923（大正12）年の関東大震災で使用不能になるまでの6年間に開催した公開演奏会を一覧にまとめる。そのなかの南葵文庫音楽部主催演奏会15回の演奏曲目をもとに次のことを示したい。すなわち、

①6年間15回の演奏会で複数回演奏された曲は非常に少なく、これは、演奏曲目の選定が各出演者に一任されていたのではなく、個々の演奏会を超え、全体のプログラミングを統括する人物がいたことを示唆する。

②その人物とは、南葵楽堂の演奏会事業が一時停止している1921（大正10）年に日本を離れていた楽堂の運営者、徳川頼貞以外に考えられない、ということである。

この2点について以下に詳述する。本論中の演奏会番号は後掲の「南葵楽堂公開演奏会一覧」の番号に対応する。

南葵楽堂の6年間15回の主催公開演奏会の演奏曲目には、複数回演奏された曲がほとんどない。1920（大正9）年秋の極めて近い時期に相次いで開催された演奏会（演奏会番号6～8）のみ、例外的に曲目の重複が多く見られるが、この時期を除けば、他に複数回演奏された曲は、ビゼーの《アルルの女》組曲しかない（演奏会番号2、9）[1]。これは、現代よりもレパートリーが限定されていた大正時代にあっては特異であり、南葵楽堂における演奏曲目の選定には、特定曲のみが繰り返し演奏されないように、緩やかなコントロールが働いていたと考えるのが自然ではないだろうか。たとえば南葵楽堂で最多の、のべ19曲が演奏されたベートーヴェン作品のうち、管弦楽曲は1曲を除きすべて東京音楽学校の管弦楽団が演奏している。他方、東京音楽学校に次いで南葵楽堂に多く出演した横浜在留外国人管弦楽団は、彼らの最初の南葵楽堂公演（演奏会番号2）でベートーヴェンを披露した後は演奏していない。反対に2番目に多く演奏されたチャイコフスキー（6曲）に関しては、東京音楽学校は南葵楽堂では一切演奏していない。全体で見

南葵文庫音楽部主催公開演奏会において、のべ3曲以上が演奏された作曲家

ベートーヴェン	19曲
チャイコフスキー	6曲
J. S. バッハ	5曲
ショパン	4曲
サン＝サーンス	4曲
ビゼー	3曲
ブラームス	3曲
グリーグ	3曲
モーツァルト	3曲
ヴァーグナー	3曲

※曲数には他人によって編曲された作品も含み、演奏会プログラムで演奏順を示す番号（1、2…）およびアルファベット（(a) (b)…）が付されたひとまとまりを1曲として数えた。

（1）サン＝サーンス《あなたの声に私の心は開く》もプログラムに2回登場するが（演奏会番号3と10）、うち1回（演奏会番号3）はおそらく演奏されていない（「南葵楽堂公開演奏会一覧」演奏会番号3の注記を参照）。

れば、東京音楽学校がドイツ・オーストリア系の管弦楽作品を演奏し、それ以外の作品を横浜在留外国人管弦楽団が取り上げるという「棲み分け」が成立しており、これが、出演者がめいめい自由に曲目を選んだ結果とは考えにくい。

遠藤宏はこう述べる。「南葵樂堂でやる東京音樂學校管絃樂合唱のためには毎回二三千圓づゝ謝金を徳川家が、支出していたがいつも上野で定期演奏をした曲目をそのまゝ後で演奏しに來るのであつて、頼貞氏の希望する新しい曲目による樂堂のための演奏會にはならなかつた」(2)。頼貞は、日本初演や日本でほとんど演奏されたことのない曲目で構成した南葵楽堂独自の演奏会を希望していた。事実、開堂当初の『南葵文庫報告』や頼貞の著書には、演奏曲目について、日本初演、日本で2回目の演奏といった記述が散見される。演奏曲目の重複が少ないのも、新しい曲を求めた頼貞の意向によるのであろう。

1921年、頼貞は欧州に旅立つ。報道によれば、「多年計画して居られた音樂圖書館の事業や音樂會のマネージメント、其の他南葵樂堂に關して更に完璧を期せらるべき目的を以て」(3)の1年の外遊であった。この1年間、南葵楽堂は演奏会を開催していない。南葵文庫音楽部は頼貞一人の組織ではないが、この年の活動休止は、南葵楽堂の演奏会が頼貞抜きでは実施できなかったことを意味している。

頼貞の帰国後、南葵楽堂の演奏会事業の方向性は変化する。管弦楽演奏会は東京音楽学校が出演する春期音楽会のみに減り、代わりに、頼貞と交流の深かった国際的に活躍する演奏家が中心となる室内楽演奏会が増えている。また南葵文庫以外の団体が主催する、いわば貸館公演も行われるようになり、演奏会の回数は増加した。

現在の南葵音楽文庫に、往時の演奏会の制作過程を示す資料は残っていない。頼貞自身も演奏会事業の内実を多くは語っていない。ただ、頼貞が単に、演奏家に楽堂の提供と資金援助をしただけのパトロンでなかったことは、確実である。楽堂運営の方向性を定め、統括するその姿は、むしろ今日で言う「芸術監督」の仕事ぶりと言えよう。

---

(2) 遠藤宏「「南葵文庫」音樂史話」『音樂』3巻5号 (1948 (昭和23) .6) , p. 32.
(3) 「樂況と樂報」『音樂界』1921 (大正10) .2, p. 28-29.

南葵楽堂公開演奏会一覧

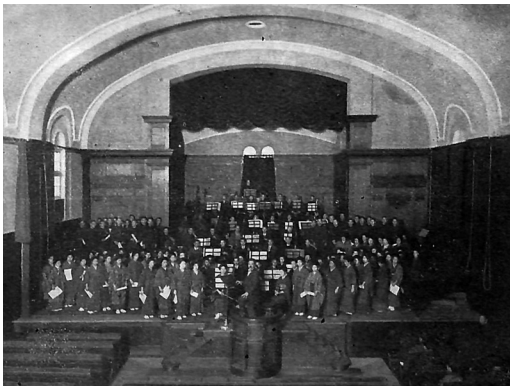
凡例

●南葵楽堂における公開演奏会を、I. 南葵文庫音楽部主催公演、II. 他団体主催公演に分類し、開催日順に排列した。より私的な、非公開の演奏会や関東大震災後の旧南葵文庫閲覧室での演奏会に関しては、今後の調査課題とし、ここでは除外した。
●演奏会名は『南葵文庫報告』記載の日本語名を採用し、曲目の演奏順を、南葵楽堂の演奏会プログラム等に記載された番号とアルファベットで示した。作品名は演奏会プログラム（現存しない場合は『南葵文庫報告』）での表記に準じ、一般的な日本語訳と筆者による補足を［　］で付記した。
●【関連印刷物】として、演奏会プログラム等の資料を現存が確認されるかぎりで記載した。［南］は南葵音楽文庫関連資料（読売日本交響楽団蔵）に含まれていることを示す。
●まとめるにあたり以下を参考にした。

◎『南葵文庫報告』第11-15 南葵文庫, 1919.11-23.12.
◎『南葵音樂事業部摘要』第1 南葵音楽図書館, 1929.4.
◎*Nanki Concert Hall*, The Japan Advertiser Press, 1924.
◎徳川頼貞『薈庭樂話』徳川頼貞刊, 1941.11.
◎『音樂界』音楽社, 1918-23.
◎『音樂』東京音楽学校学友会, 1918-23.
◎秋山竜英編『日本の洋楽百年史』井上武士監修 第一法規出版, 1966.1.
◎東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』演奏会篇第1巻 音楽之友社, 1990.11.

I. 南葵文庫音楽部主催公演

1.［南葵文庫大礼紀念館（南葵楽堂）開館記念］「第一回秋期音樂會」
1918（大正7）年10月27、28日



第一回秋期音樂會（『南葵文庫報告』第11より）

1）ベートーヴェン：Overture "Consecration of the House," Op. 124［《献堂式》序曲 作品124］
2）ベートーヴェン：Piano Concerto in E Flat Major, No. 5, Op. 73［ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 作品73《皇帝》］
3）ベートーヴェン：Chorus "Calm Sea and Prosperous Voyage," Op. 112［《静かな海と幸運な航海》作品112］

【出演】
指揮：グスタフ・クローン Gustav Kron
ピアノ：パウル・ショルツ Paul Scholz
東京音楽学校教員、卒業生、海軍軍楽隊による管弦楽団 / 東京音楽学校生徒による合唱団
【関連印刷物】
プログラム *Nanki Auditorium*［南］/ 曲目解説　田村寛貞『第壹回音樂會　演奏樂曲に就て』
※プログラム *Nanki Auditorium* には、演奏曲目のみを記載したもの（日付を10月26、27日と記載。日本近代音楽館蔵）と、演奏曲目に加え南葵楽堂の紹介文4点を収録したもの（読売日本交響楽団蔵）との2種が確認されている。後者所収の紹介文のうち1点は1919年発行の雑誌記事であるため、この冊子は事後に作られたと考えられる。収録されている紹介文は次の4点。

◎[Anonymous], “Brief Outline of the Founding the Auditorium”.
◎Sir Brumwell Thomas, “Music Room at Tokio”.
◎W. M. Vories & Company, “The Music and Lecture Hall of Marquis Tokugawa”.
◎N. [anonymous], “A Concert-Hall at Tokyo”, *The Musical Times*, no. 912 (Feb, 1919), p. 82.

2.「春期臨時音樂會」
1919（大正8）年2月16日
1）ベートーヴェン：Concerto for Piano in C-Minor, Op. 15, No. 1［ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 作品15］
2）チャイコフスキー：Romance and Valse du Ballet［バレエ作品のロマンスとワルツ。未詳］
3）ドビュッシー：Danse Sacrée et Danse Profane［神聖な舞曲と世俗的な舞曲］
4）ビゼー：L’Arlesienne Suite［組曲《アルルの女》。第1組曲の前奏曲、メヌエット、アダージェット、第2組曲のファランドール］
5）リスト：Fantaisie Tzigane［ハンガリー民謡の主題による幻想曲 S. 123 ？］
【出演】
指揮：ヒュー・ホーン Hugh Horne
ピアノ：アンドリュー・ヴァグナー・スカルスキー Andrew Vagner-Scalsky
横浜、神戸在留外国人による管弦楽団
【関連印刷物】
プログラム *Nanki Auditorium*
※『薔庭樂話』ではベートーヴェン《ピアノ協奏曲第3番》が演奏されたとあるが、《第1番》の誤り。同書ではこの演奏会でゲルシュゴルンのヴァイオリン独奏と管弦楽伴奏で、ベートーヴェンの《ロマンス》［第1番か第2番かは未詳］も演奏されたとある（1941年刊私家版, p. 137）。

3.「第二回春期音樂會」
1919（大正8）年5月4日
1）シューベルト：Overture “Fierrabras”［《フィエラブラス》序曲 D796］
2）ヤルネフェルト：Prelude［前奏曲］
3）チャイコフスキー：Andante from the “Fifth Symphony”［交響曲第5番 ホ短調 作品64より第2楽章］
4）シューマン：Concerto (A minor) for Piano with Orchestra［ピアノ協奏曲 イ短調 作品54］
5）シベリウス：Valse Triste from Järnefelt’s Drama “Kuslema”[sic]［《クオレマ》作品44より〈悲しきワルツ〉］
6）チャイコフスキー：Serenade, Op. 26［憂鬱なセレナード 作品26］
7）サン＝サーンス：Cantabile from “Samson et Dehila”[sic]［《サムソンとデリラ》よりカンタービレ。〈あなたの声に私の心は開く〉？］
8）シューベルト：Symphony in B Minor［交響曲 第7番 ロ短調 D759《未完成》］
【出演】
指揮：チャールズ H. ソーン Charles H. Thorn
ピアノ：レオ・ポドルスキー Leo Podolsky
メゾ・ソプラノ：［アグネス？］オルチン嬢 Miss [Agnes?] Allchin
ヴァイオリン：B. ゲルシュゴルン B. Gershgorn
横浜在留外国人による管弦楽団
【関連印刷物】
プログラム *Nanki Auditorium*
※シベリウス作品 5）は当日のプログラムに記載がなく、『南葵文庫報告』第11（1919年）に記載。プログラムに記載されていた7. サン＝サーンス作品が『報告』第11には記載されていない。曲目の差し替えがあったと考えられる。

4.「大正八年秋期音樂演奏會」
1919（大正8）年12月14日
1）ヴェーバー：Overture “Oberon”［《オベロン》序曲 J.306］
2）ベートーヴェン：Symphony No. 5

in C minor, Op. 67［交響曲第５番 ハ短調 作品67］

3）(a) ヴァーグナー：Entr'acte to Act II and Aria "Hail, Hall of Song" from "Tannhauser"［《タンホイザー》より第２幕への導入、歌の殿堂のアリア］
(b) ヴァーグナー：Fest March and Chorus from "Tannhauser"［《タンホイザー》より大行進曲］

【出演】
指揮：グスタフ・クローン Gustav Kron
ソプラノ：ハンカ・ペッツォルト Hanka Petzold
東京音楽学校職員、卒業生、海軍軍楽隊による管弦楽団 / 東京音楽学校生徒による合唱団

【関連印刷物】
プログラム *Nanki Auditorium*［南］

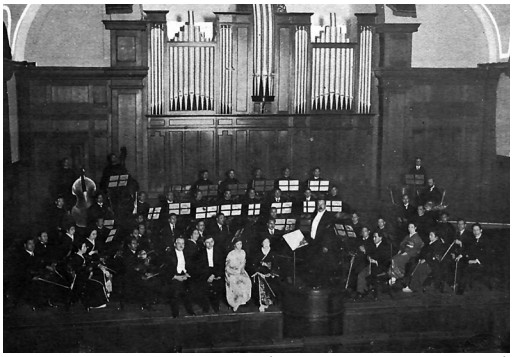
5.「大正九年春期音樂演奏會」

1920（大正９）年５月８日

1）グルック：Ouverture to "Imphegnia in Aulis"［《アウリスのイフィゲネイア》序曲］
2）グリーグ：Menuet from the Sonata. Op. 7［ピアノ・ソナタ ホ短調 作品７より第３楽章］
3）ビゼー：Dance Espagnole［スペインの踊り。未詳。《カルメン》より？］
4）ショパン：Concerto in E minor for Piano with Orchestra［ピアノ協奏曲第１番 ホ短調 作品11より第１楽章］
5）(a) ウッドフォルデ＝フィンデン："Allah be with us"［《ダマスカスの恋人》より〈アラーは吾等と共に在り〉］
(b) ウッドフォルデ＝フィンデン："Far Across the Desert Sands"［《ダマスカスの恋人》より〈砂漠の砂を渡りて〉］
6）メンデルスゾーン：Symphony in A minor (scotch) Op. 56［交響曲第３番 イ短調 作品56《スコットランド》より第１、３、４楽章］

【出演】
指揮：チャールズ H. ソーン Charles H. Thorn
ピアノ：［コンスタンス？］シンプソン・ベーキー夫人 Mrs. E. B. Simpson Baikie
バリトン：A. E. クーパー A. E. Cooper
横浜在留外国人による管弦楽団

6.［パイプオルガン備付工事竣成］「特別音樂演奏」



特別音樂演奏（『南葵文庫報告』第 13 より）

1920（大正９）年11月22日

1）ベートーヴェン：「戯曲「エグモント」の序曲」［作品84］
2）(イ) タルティーニ：「歌謠調の緩徐調」［アンダンテ・カンタービレ。未詳］
(ロ) J. S. バッハ：「G線にて奏する一歌謠調」［G線上のアリア］
(ハ) フィッツェンハーゲン：「アントニオロッテイの作りし一歌謠調」［未詳］
3）(イ) J. S. バッハ：「ニ短調のプレリュード」［《平均律クラヴィーア曲集》第１巻第４番 嬰ハ短調 BWV849の前奏曲を移調］
(ロ) ラインベルガー：「イ短調 ソナータ中の間奏曲」［オルガン・ソナタ イ短調 作品98より第２楽章］
4）グリーグ：「ト調のソナータ（作品十三）」［ヴァイオリン・ソナタ第２番 ト長調 作品13］
5）(イ) チャイコフスキー：「悲しき歌」［未詳］
(ロ) ポッパー：「ポロネーズ」［演奏会用ポロネーズ 作品14または28 ？］
6）ベートーヴェン：「第三交響樂中の第一楽章」［変ホ長調 作品55《英雄》より第１楽章］

【出演】
指揮：グスタフ・クローン Gustav Kron
ヴァイオリン：安藤幸子
チェロ：ボグミル・シコラ Bogumil Sykora
ピアノ：パウル・ショルツ Paul Scholz
オルガン：中田章
東京音楽学校職員、生徒による管弦楽団
【関連印刷物】
プログラム 『演奏曲目』/ 曲目解説　二見孝平『演奏樂曲に就て』/『大風琴ニ就イテ』、写真帖『南葵文庫附属御大礼奉祝紀念館大風琴』

7.［パイプオルガン備付工事竣成］「紀念臨時音樂演奏」
1920（大正9）年11月23、24日
1）ネイラー：Overture［序曲《徳川頼貞》］
2）(a) ヘンデル：Air from "Messiah"［《メサイア》HWV56より〈私は知る、私をあがなう者は生きておられる〉］
(b) J. S. バッハ／グノー：Ave Maria［アヴェ・マリア］
3）チャイコフスキー：Variation on a Rococo Theme［ロココの主題による変奏曲 作品33］
4）(a) タルティーニ：Andante Cantabile［アンダンテ・カンタービレ。未詳］
(b) J. S. バッハ：Air on the G-String［G線上のアリア］
(c) フィッツェンハーゲン：An Air of Antonio Lotti［アントニオ・ロッティのアリア。未詳］
5）(a) ショパン（グラズノフ編曲）：Etude. Op. 25, No. 7［練習曲 作品25-7］
(b) ポッパー：Tarantella, Op. 33［タランテラ 作品33］
6）ホズマー［Lucius Hosmer］編曲：Grand Fantasy of Chopin［ショパンによる大幻想曲］
【出演】
指揮：横枕文四郎
ソプラノ：武岡鶴代
チェロ：ボグミル・シコラ Bogumil Sykora
ピアノ：ヒルベルグ夫人 Mrs. Hillberg
オルガン：エドワード・ガントレット Edward Gauntlett
海軍軍楽隊
【関連印刷物】
チラシ？ *Nanki Orchestral Concert*［南］/ プログラム *Nanki Auditorium* / 曲目解説　二見孝平『演奏樂曲に就て』

8.「ベートーヴェン［生誕］百五十年紀念音樂會」
1920（大正9）年12月11日
1）ベートーヴェン：Overture to Goethe's Tragedy "Egmont". Op. 84［《エグモント》序曲 作品84］
2）ベートーヴェン：Two Songs to Goethe's Tragedy "Egmont". Op. 84［《エグモント》作品84より］
(a) "Die Trommel Gerühret"［太鼓が鳴ると］
(b) "Freudvoll und Liedvoll, Gedankenvoll"［喜びに満ち、悲しみに満ち］

グスタフ・クローン肖像写真
「ベートーヴェン［生誕］百五十年紀念音樂會」に際して書かれたサイン入り。このとき演奏された《英雄》交響曲の主題が書かれている。　（公益財団法人読売日本交響楽団蔵）

3）ベートーヴェン：Symphony Eroica in E Flat Major. op. 55［交響曲第3番 変ホ長調 作品55《英雄》］
4）ベートーヴェン：Concerto for Pianoforte in C Minor No. 3. Op. 37［ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 作品37］
5）ベートーヴェン：Elegiac Song for Mixed Chorus with String Orchestra and Organ. op. 118［悲歌 作品118］

【出演】
指揮：グスタフ・クローン Gustav Kron
ソプラノ：長坂好子
ピアノ：小倉末子
東京音楽学校職員、卒業生、海軍軍楽隊による管弦楽団 / 東京音楽学校生徒による合唱団

【関連印刷物】
プログラム *Nanki Beethoven Festival* / 曲目解説　兼常清佐『演奏樂曲に就て / *Works of Beethoven* (*Beethoveniana*)［紀要1号, p. 34参照］
※曲目は、東京音楽学校第39回定期演奏会（1920年12月3、4日）と同一。

9.「臨時音樂演奏」

1920（大正9）年12月12日
1）ベルリオーズ：Carnival Romain［《ローマの謝肉祭》序曲］
2）W. デイヴィス：Solemn Melodie［荘厳な旋律］
3）(a) ヴィドール：Andante from 5th Organ Symphony［オルガン交響曲第5番 ヘ短調 作品42-1より第3楽章または第4楽章？］
(b) J. S. バッハ：Fugue in D Minor［フーガ ニ短調。未詳］
4）(a) ベンベール［Hermann Bemberg］：Chant Hindou［インドの歌］
(b) トマ：Counnais-tu le Pays［《ミニョン》より〈君よ知るや南の国〉］
5）(a) デュボワ：Andante in E♭［アンダンテ 変ホ長調。未詳］
(b) デュボワ：Toccata in G［トッカータ ト長調。未詳］
(c) メンデルスゾーン：Prelude and Fugue in G［前奏曲とフーガ ト長調 作品37-2］
6）ビゼー：L'arlesienne Suite［《アルルの女》組曲。第1組曲より1. 前奏曲、3. アダージェット、4. カリヨン、第2組曲より3. メヌエット（あるいは第1組曲第2曲？）、4. ファランドール］

【出演】
指揮：横枕文四郎
メゾ・ソプラノ：柴田［花島］秀子
オルガン：ヒュー・ホーン Hugh Horne
海軍軍楽隊
※トマ作品 4）(b) は *Nanki Concert Hall* のみに記載がある。

10.「英國軍樂隊歡迎音樂會」

英國軍樂隊歡迎音樂會（『南葵文庫報告』第 14 より）

1922（大正11）年4月20日
1）モーツァルト：Ouverture, "Nozze di Figaro"［《フィガロの結婚》序曲 K. 492］
2）ヴェルディ："Caro Nome" from Rigoletto［《リゴレット》より〈慕わしい御名〉］
3）(a) ドヴォルザーク：Largo "From the New World Symphony"［交響曲第9番 ホ短調 作品95《新世界より》より第2楽章］
(b) チャイコフスキー：Suite, Casse Noisette［《くるみ割り人形》組曲］
4）サン＝サーンス："Mon Coeur S'ouver a ta Voix" from "Samson et Delilah"［《サムソンとデリラ》より〈あなたの声に私の心は開く〉］

5）リスト：Hungarian Rhapsody. No. 2［ハンガリー狂詩曲第2番 S.244/2］
"Kimigayo"［君が代］
"God Save the King"［ゴッド･セイヴ･ザ･キング］
【出演】
指揮：サミュエル・フェアフィールド Samuel Fairfield
ソプラノ：武岡鶴代
メゾ・ソプラノ：花島［柴田］秀子
英国軍艦レナウン号乗組軍楽隊
【関連印刷物】
プログラム　*Nanki Auditorium*

11.「臨時音樂會」
1922（大正）11年5月21日
1）ベートーヴェン：Piano Trio. Op. 70. No. 1［ピアノ三重奏曲第5番 ニ長調 作品70-1《幽霊》］
2）(a) プッチーニ：Si, Mi, Chiamano Mimi from "La Boheme"［《ラ・ボエーム》より〈私の名はミミ〉］
(b) R. シュトラウス：Staendchen (Mach Auf)［セレナーデ 作品17-2］
3）(a) ドビュッシー：Mandoline［マンドリン］
(b) ドゥフォッセ［Henri Defossé］：La Lune Blanche 白い月
(c) フランケッティ：Dille tu, Rosa［バラよ、彼女に伝えてくれ］
4）ゲーゼ：Piano Trio. Op. 42［ピアノ三重奏曲 ヘ長調 作品42］
5）(a) マスネ：Elegie［エレジー］
(b) メサジェ：Chanson des Cigales from "Madame Chrysantheme"［《お菊さん》より〈蝉たちの歌〉］
【出演】
ソプラノ：三浦環
ピアノ：アルド・フランケッティ Aldo Franchetti
榊原トリオ［ピアノ：榊原直 / ヴァイオリン：多忠亮 / チェロ：平井保三］
【関連印刷物】
プログラム　*Nanki Auditorium*［南］

12.「南葵文庫春期音樂會」
1922（大正11）年5月28日
1）モーツァルト：Symphony E Flat Major［交響曲第39番 変ホ長調 K. 543］
2）モーツァルト：Concert for Two Pianos and Orchestra［2台のピアノのための協奏曲 変ホ長調 K.365 (316a)］
3）(a) ブラームス：O Lovely May［おお、心地よい5月 作品93a-3］
(b) ブラームス：Farewell［さようなら 作品93a-3, 4］
4）マンドル［Richard Mandl］：Hymn [sic] on the Rising Sun［日の出の讃歌］
5）ブラームス：The Falcon［鷹 作品93a-5］
6）ヴァーグナー：Prelude to "Die Meister Singer von Nurnberg"［《ニュルンベルクのマイスタージンガー》前奏曲］
【出演】
指揮：グスタフ・クローン Gustav Kron
ピアノ：小倉末子、萩原英一
東京音楽学校職員、生徒による管弦楽団
【関連印刷物】
プログラム　*Nanki Auditorium*
※曲目は、マンドル作品 4）を除き、東京音楽学校第42回定期演奏会（1922年5月13、14日）と同一。

13.「ホルマン氏歡迎音樂會」
1923（大正12）年4月28日
1）ヘンデル：Sonata［ソナタ。未詳］
2）サン＝サーンス：Concerto. No. 1. Op. 33［チェロ協奏曲第1番 イ短調 作品33］
3）ショパン：Sonata. No. 2. Op. 35［ピアノ・ソナタ第2番 変ロ短調 作品35《葬送》］
4）ブルッフ：Kol Nidrei［コル･ニドライ］
5）(a) シューマン：Abendlied［夕べの歌 作品107-6］
(b) サン＝サーンス：Le Cygne［白鳥］

(c) ホルマン:Serenade［セレナード］
6）ベートーヴェン：Trio in B Major. Op. 97［ピアノ三重奏曲第7番 ロ長調 作品97《大公》］
【出演】
チェロ：ジョセフ・ホルマン Josef Hollman
ヴァイオリン：ウィリー・ブルメスター Willy Burmester
ピアノ：ウィリー・バルダス Willy Bardas
【関連印刷物】
チラシ　*Nanki Auditorium Violoncello Reciatal by Josef Hollman*［南］/ プログラム　*Nanki Auditorium*［南］
※当初は4月7日にジュリエーモ・ドブラヴチッチ Gugliemo Dubravcich 指揮、宮内省楽部管弦楽団の助演で計画されていたが、北白川宮成久王（1887～1923年）の薨去に弔意を表し延期。これに伴い出演者と曲目も変更された。当初は、1. ヘンデル作品ではなく、モーツァルト《後宮からの誘拐》序曲 K. 384が、6. ベートーヴェン《大公》ではなく、リムスキー＝コルサコフ《クリスマス・イヴ》組曲より〈ポロネーズ〉が、演奏される予定であった。

14.「ホルマン氏告別音樂會」
1923（大正12）年5月26日
1）(a) ドヴォルザーク：Lento. Op. 96. (from F Major Quartett)［弦楽四重奏曲第12番 ヘ長調 作品96《アメリカ》より第2楽章］
(b) チャイコフスキー：Scherzo［弦楽四重奏曲第1番 ニ長調 作品11より第3楽章］
2）ベートーヴェン：Sonata in G Minor. Op. 5. No. 2［チェロ・ソナタ第2番 ト短調 作品5-2］
3）ホルマン:Andante Cantabile［未詳。日本で作曲され、徳川頼貞に献呈。この演奏会で初演］
4）ベートーヴェン：Sonata in D Minor. Op. 31［ピアノ・ソナタ第17番 ニ短調 作品31-2］
5）ベートーヴェン：Variations on a Theme from "Judas Macabeus" of Händel［ヘンデルの《見よ勇者は帰る》の主題による変奏曲 WoO45］
【出演】
チェロ：ジョセフ・ホルマン Josef Hollman
ジュピター弦楽四重奏団 Jupiter Quartette［ヴァイオリン：末吉雄二、栗原大治 / ヴィオラ：大塚淳 / チェロ：伊達三郎］
ピアノ：ウィリー・バルダス Willy Bardas
【関連印刷物】
プログラム *Nanki Auditorium*［南］/『マダム・ホルマンに就て』［紀要1号, p. 35参照］

15.「南葵文庫春期音樂會」
1923（大正12）年6月10日
1）ベートーヴェン:Ouverture "Leonore". No. 3. Op. 72［《レオノーレ》序曲第3番 作品72b］
2）グリーグ：Holbergs Suite［ホルベアの時代より 作品40］
3）メレンドルフ［Willi von Möllendorff］: Pentecost. Op. 16［聖霊降臨祭 作品16］
4）ヴィドール:Canzonetta from "Suite in E Minor"［3つの小品 作品21より〈カンツォネッタ〉］
5）シベリウス:Finlandia. Op. 26［フィンランディア 作品26］
【出演】
指揮：グスタフ・クローン Gustav Kron
チェロ：ジョセフ・ホルマン Josef Hollman
ヴァイオリン：安藤幸子
ヴィオラ：大塚淳
東京音楽学校職員、生徒による管弦楽団
【関連印刷物】
入場券（試し刷り）？ / プログラム *Nanki Auditorium*
※曲目は東京音楽学校第44回定期演奏会（1923年5月19、20日）と同一。

II. 他団体主催公演

横浜東京コーラル・ソサエティー主催「聖樂演奏會」
1919（大正8）年5月10日
「英國負傷兵に對する英國王誕辰基金竝に合衆國赤十字社基金寄附音樂演奏會」（『南葵文庫報告』第11, p. 28-29）。

横浜東京コーラル・ソサエティー主催「哀悼曲大演奏會」
1920（大正9）年3月18日
「本邦基督教青年會シベリヤ救濟資金寄附音樂演奏會」（『南葵文庫報告』第12, p. 11）。
【関連印刷物】
プログラム 『哀悼曲大演奏會』［南］

「宮内省式部職洋樂部音樂會」
1922（大正11）年5月22、23日
【関連印刷物】
プログラム *Programme du Concert Orchestral* / 曲目解説 『歐洲管絃樂演奏曲目』（著者名なし）

音樂奬勵會
1922（大正11）年10月31日

「宮内省樂部演奏會」
1922（大正11）年11月4、5日
【関連印刷物】
プログラム *Programme of The Orchestral Concert* / 曲目解説『歐洲管絃樂演奏曲目』（著者名なし）

東京帝國大学学友会音楽部主催「ベートーヴエン祭」
1922（大正11）年12月16日
【関連印刷物】
プログラム 『ベートーヴエン祭』/ 曲目解説 『ベートーヴエン祭演奏曲目解説』

「英國兒童救濟會主催慈善音樂會」
1923（大正12）年1月16日

音樂奬勵會
1923（大正12）年1月27日
「メルシオール夫人助演のヒユー・ホーン氏オルガン獨奏會」（『南葵文庫報告』第15, p. 9）。『薔庭樂話』に登場する「露西亞救濟慈善音樂會」のことか？（1941年刊私家版, p. 155-156）

音樂奬勵會
1923（大正12）年3月9日
「ウイリー･バルダス氏ピアノ獨奏會」（『南葵文庫報告』第15, p. 9）。

「ウイリー・ブルメスター氏ヴイオリン獨奏會バルダス氏伴奏」
1923（大正12）年3月24日

「ジヨセフ・ホルマン氏ヴイオロン・セロ獨奏會ホーン氏助演」
1923（大正12）年4月3日

「白耳義大使館主催慈善音樂會」
1923（大正12）年4月25日、5月22日

「チブリンスキイ氏ウエルクマイスター氏ミツヘルソン氏のピアノ・トリオ演奏會」
1923（大正12）年6月12日

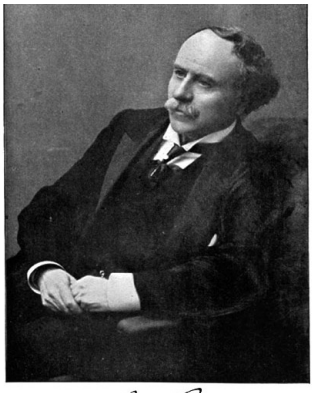
音樂奬勵會
1923（大正12）年6月18日
「ミヘル・ピアストロ氏ヴイオリン獨奏會ホーン氏伴奏」（『南葵文庫報告』第15, p. 10）

カミングス文庫とW. H. カミングスをめぐって[1]
—W. H. カミングスとその生涯—

佐々木勉

カミングス文庫は、南葵音楽文庫を代表する収蔵書群である[2]。この「カミングス文庫」という呼称は、そのもともとの所有者であったウィリアム・ヘイマン・カミングス William Hayman Cummings（1831～1915年）の名に由来している。カミングスは、生前から蔵書家、愛書家、好事家としてだけでなく、作曲家、声楽家、音楽史家としても知られた人物であった。

現在、南葵音楽文庫に収蔵されているカミングス文庫は、およそ450点で、カミングスが生前に蒐集した蔵書のほんの一部に過ぎない。その内容はイギリスの音楽家たちによる作品の楽譜を中心に多岐にわたっており、カミングスの旧蔵書全体がどれほどの規模で、どのような内容のものであったのか、現在のカミングス文庫から推し量ることは難しい。*The Musical Times* 誌に掲載されたカミングスの紹介記事 "Mr. William H. Cummings"（1898年2月1日）[3]には、その蔵書の数はおよそ4500点、また『グローヴ音楽事典』第2版（1904年）における "Libraries and Collections of Music" の項の "Dulwich"[4]には「6000点余り」と記載されている。*The Musical Times* 誌の同記事には、息子のノーマン・パーシー・カミングス Norman Percy Cummings（1868～没年不明）[5]が、父カミングスの蔵書の目録を「ちょうど完成したところ」と記されているが、最終的に出版されたのは、おそらくその



W.H. カミングスの肖像写真とサイン
出典："Mr. William H. Cummings", *The Musical Times*, vol. 39, no. 660 (Feb, 1898), p. 81-85.

W.H. カミングスの蔵書票とサイン
『レヴェリッジ氏による歌曲選集、旋律付き』1793年、南葵音楽文庫（N-1/4）から

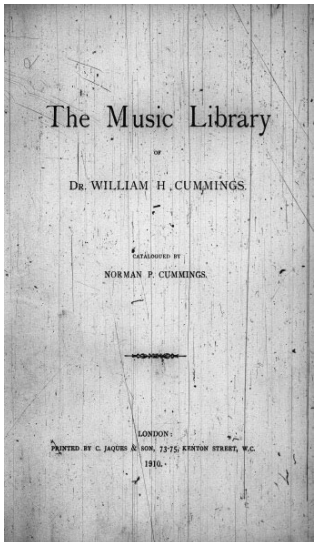
（1）本稿は、2018年3月4日に和歌山県立図書館講義研修室で開催された第2回「南葵音楽文庫定期講座」における筆者による講演『W. H. カミングスが愛した音楽——カミングス文庫を考える』をもとに加筆したものである。

（2）カミングス文庫については、1925年に目録が、1926年に解説書が出版されている。*Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*, Nanki Music Library, 1925. 兼常清佐 , 辻荘一『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』南葵音楽図書館 , 1926.

（3）"Mr. William H. Cummings", *The Musical Times*, vol. 39, no. 660 (Feb, 1898), p. 81-85.

（4）"Libraries and Collections of Music", *Grove's Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., vol. 2 (London, Macmillan, 1904), p. 702. "Dulwich ダリッジ " は、ロンドンのテムズ川南岸のカミングスの自宅があった地区。

（5）ノーマン・パーシー・カミングスは、家庭で音楽教育を受け、1884年7月にダリッジ・カレッジでピアニストとしてデビュー。その後、ライプツィヒに留学し、帰国後はピアニストとして活躍、父ウィリアムの講演を補佐するかたわら、ノーウッドの王立盲学校 Royal Normal college for the Blind のピアノ教授を務めた。"Cummings, William H.", *British Musical Biography*, ed. J. D. Brown (Birmingham,1897), p. 112.


The Music Library
OF
DR. WILLIAM H. CUMMINGS.
CATALOGUED BY
NORMAN P. CUMMINGS.
LONDON:
PRINTED BY C. JAQUES & SON, 72-75, KINTON STREET, W.C.
1910.

The Music Library of Dr. William H. Cummings. **Catalogued by Norman P. Cummings (London, 1910)**
ヴァージニア大学図書館所蔵。大英図書館が所蔵するマイクロフィルムからタイトルページ。

一部のみであった(6)。この目録では、楽譜類が作曲者のアルファベット順に並べられ、完結していたことをうかがわせる記述が随所に見られるが、残念なことにBの項目で終わっており、C以降の項目については確認できない。Bの項目の終わりにおける項目数は1257点で、ここでもその全容は計り知れない。また、カミングスの死後、1917年5月17日から23日にかけて行われた蔵書の競売には、目録が示すように1744点が出品されている(7)。

南葵音楽文庫の歴史的な意義や音楽学的な価値を理解するためには、カミングス文庫について知ることが不可欠であることは言うまでもない。それには、カミングス文庫そのものの分析をはじめ、カミングスの旧蔵書の形成の過程を探ることや、その全容を知ることが不可欠である。また、多様な側面をもったカミングスという人物について知ることも必要であろう。集書を行った本人であるのだから。そこでここでは、「カミングス文庫」研究の一歩として、その生涯をたどることにしたい。

W. H. カミングスの生涯については、境目となる時期は必ずしも明確ではないが、全体をおおよそ3期に区分することができる。第1期「少年聖歌隊員、オルガン奏者時代」(1838年頃～55年頃)、第2期「歌手、指揮者時代」(1855年頃～75年頃)、第3期「教育者、研究者時代」(1875年頃～1911年頃)である。

第1期「少年聖歌隊員、オルガン奏者時代」(1838年頃～55年頃)

カミングスは、1831年8月22日にイングランド南西部デヴォン Devon のシドベリー Sidbury で生まれた。その後、一家はロンドンに移り、カミングス少年は、1838年にセント・ポール大聖堂の少年聖歌隊員となる(8)。しかし当時、同大聖堂聖歌隊の活動は停滞しており、聖歌隊が礼拝における義務を忠実に履行することは少な

(6) *The Music Library of Dr. William H. Cummings*. Catalogued by Norman P. Cummings (London, 1910).

(7) *Catalogue of the Famous Musical Library of Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books, The Property of the Late W.H.Cummings, Mus.Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E.* (Sotheby, Wilkinson & Hodge, 1917). なお、この競売に先立って1915年12月17日には、カミングスが所有していた肖像画などのコレクションが競売にふされた。*Catalogue of Portraits of Musical Celebrities and Pictures and Drawings, The Property of Dr. W. H. Cummings, F. S. A.* (Messrs. Christie, Mason & Woods, 1915). 本カタログの競売番号126～164号が、カミングスの蒐集品。

かった。しかも少年隊員たちを指導していたウィリアム・ホーズ William Hawes（1785 ～ 1846年）は、手荒な指導で知られ、発声の訓練でも音を間違えれば鞭打ちの罰が加えられた。カミングスの父親は、こうした状況を大法官庁裁判所 Court of Chancery に訴え、結果的にカミングス少年は、テンプル教会 Temple Church の聖歌隊に移籍した。1842年11月20日に挙行された同教会聖所の修復工事の落成礼拝にカミングスが参加した記録が残されている。翌43年には、エドワード・ジョン・ホプキンス Edward John Hopkins（1818 ～ 1901年）が、そのオルガン奏者に指名され、カミングスは、彼から歌だけでなく、オルガン演奏の指導を受けることになる。カミングスは、この時期、10 ～ 18歳の男子が学ぶシティー・オヴ・ロンドン・スクール City of London School に入学し、通常の教育も受けている。はっきりした時期は不明であるが、やがてカミングスは、師の代理としてロンドン市内の様々な教会のオルガンを演奏するようになった。また、仲間の聖歌隊員で結成したテンプル合唱クラブ Temple Choral Club の指揮者を務めている。

1847年4月18日、フェーリクス・メンデルスゾーン（1809 ～ 47年）のオラトリオ《エリア》作品70(9)の改訂版が、作曲者自身の指揮でロンドンのエグゼター・ホール Exeter Hall で初演された。この時、カミングスは、アルトの一人として参加したが、その「熱烈な歌唱」は、メンデルスゾーンの目に止まり、名前を聞かれ、その名をメンデルスゾーン自身が記した訪問用名刺を渡されたという。

その後、カミングスは変声期を迎え、師のホプキンスの勧めに従って空席となっていたロンドン郊外のウォルサム・アビイ Waltham Abbey のオルガン奏者に就任した。彼は、この新天地で音楽史に関わる重要な発見をする。彼の前任者の中に、ルネサンス期を代表する

（8）"Cummings, William H.", 前掲（p. 111）には、「7歳になる年に」という記載がある。また "Mr. William H. Cummings", 前掲書（p. 82）によれば、カミングスは、1838年3月31日に営まれたセント・ポール大聖堂のオルガン奏者で作曲家であったトーマス・アトウッド Thomas Attwood（1765 ～同年3月24日没）の葬儀と埋葬の様子を記憶しており、この年の初めに聖歌隊に加わったと考えられる。

（9）オラトリオ《エリア *Elijah*》は、メンデルスゾーン自身の指揮で1846年8月26日にバーミンガム音楽祭（"Birmingham Triennial Music Festival", https://www.triennialfestivals.co.uk/（参照2018-8-30））で初演されている。なお、"Cummings, William H.", *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 6 (Oxford University Press, 2001), p. 778 は、このロンドンでの改訂版初演を4月16日としている。

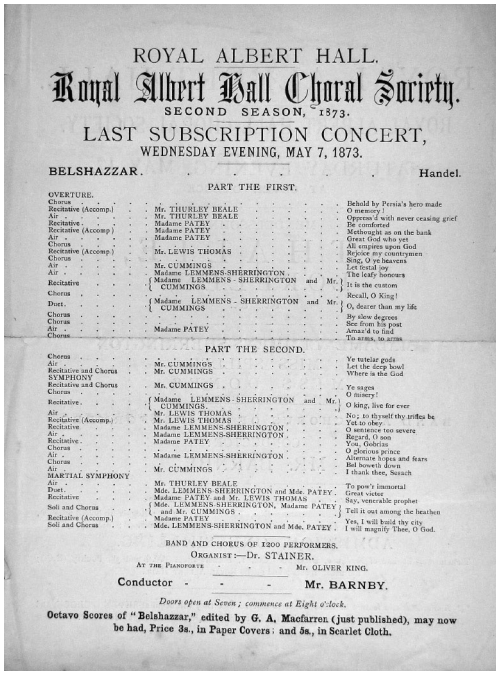
音楽家の一人であるトーマス・タリス Thomas Tallis（1505 ～ 85年）[10]がいたことを示す記録を発見したのであった。また、カミングスは、ウォルサム・アビイ在職中に後に世界各地で愛唱されることになる、降誕祭の聖歌を生み出した。ウォルサム・アビイの会衆に歌わせるために、チャールズ・ウエスレー Charles Wesley（1707 ～ 88年）の詩をメンデルスゾーンの《祝典歌 *Festgesang*》WoO. 9（1840年）の第2曲〈歌 *Lied*〉で歌うように付曲した《聞け、天使たちが歌う御告げを（神には栄え）*Hark!, The Herald Angels Sing*》である。楽譜は1856年に出版され、翌年には聖歌集 に収録されてイギリス中に普及することになった[11]。

第2期「歌手、指揮者時代」（1855年頃～ 75年頃）

正確な時期は明らかではないが、カミングスは、ウォルサム・アビイを辞してテナー歌手としての道を進み始める。最初はテンプル教会や王室礼拝堂、ウェストミンスター･アビイで正規の歌手の代わりに歌う「代理歌手」を務め、やがてテンプル教会の独唱者に、次いで王室礼拝堂のジェントルマン（聖歌隊員）に指名された。カミングスが歌手として一般に名を知られるようになったのは、演奏会での代演によるものだった。おそらく1860年代の初めのこと、エグゼター・ホールで行われたヘンデルのオラトリオ《ユダス・マカベウス》の演奏会ではシムス・リーヴス Sims Reeves（1818 ～ 1900年）に代わって、また1864年のバーミンガム音楽祭におけるアーサー・サリヴァン（1863 ～ 1900年）の《ケニルワースのマスク *The Masque at Kenilworth*》の初演では、人気歌手のジョヴァンニ・マッテオ・マリオ Giovanni Matteo Mario（1810 ～ 83年）に代わって歌い、高い評価を得た。そして、その歌手としての地位は、1870年4月6日にエグゼター・ホールで行われたヨハン・ゼバスティアン・バッハの《マタイ受難曲》の演奏会における「宗教的情熱にあふれた」歌唱によって不動のものとなった。1870 ～ 80年代にかけて、カミングスは、イギリス各地の音楽祭をはじめ、劇場やコンサートホールで歌手として活躍し、さらに指揮者も務めるようになる。1871年11月と75年5月には、アメ

（10）タリスは、1538年頃から1540年までウォルサム・アビイのオルガン奏者を務めていた。

（11）*Congregational Hymn and Tune Book*, ed. Richard R. Chope (London, 1857). また楽譜は、以下にも転載されている。"Hark!, The Herald Angels Sing", *The Musical Times*, vol. 13, no. 297 (Nov., 1867). この聖歌については "Hark!, The Herald Angels Sing", *The Musical Times*, vol. 38, no. 658 (Dec., 1897), p. 810 でその付曲の経緯などが紹介されている。



ROYAL ALBERT HALL.

Royal Albert Hall Choral Society.

SECOND SEASON, 1873.

LAST SUBSCRIPTION CONCERT,

WEDNESDAY EVENING, MAY 7, 1873.

BELSHAZZAR . . . . . **Handel.**

PART THE FIRST.

OVERTURE.		
Chorus		Behold by Persia's hero made
Recitative (Accomp.)	Mr. THURLEY BEALE	O memory!
Air	Mr. THURLEY BEALE	Oppress'd with never ceasing grief
Recitative	Madame PATEY	Be comforted
Recitative (Accomp.)	Madame PATEY	Methought as on the bank
Air	Madame PATEY	Great God who yet
Chorus		Ah empires upon God
Recitative (Accomp.)	Mr. LEWIS THOMAS	Rejoice ye countrymen
Chorus		Sing, O ye heavens
Air	Mr. CUMMINGS	Let festal joy
Air	Madame LEMMENS-SHERRINGTON	The leafy honours
Recitative	Madame LEMMENS-SHERRINGTON and Mr. CUMMINGS	It is the custom
Chorus		Recall, O King!
Duet	Madame LEMMENS-SHERRINGTON and Mr. CUMMINGS	O, dearer than my life
Chorus		By slow degrees
Chorus		See from his post
Air	Madame PATEY	Amazed to find
Chorus		To arms, to arms

PART THE SECOND.

Chorus		
Air	Mr. CUMMINGS	Ye tutelar gods
Recitative and Chorus	Mr. CUMMINGS	Let the deep bowl
SYMPHONY		Where is the God
Recitative and Chorus	Mr. CUMMINGS	Ye sages
Chorus		O misery!
Recitative	Madame LEMMENS-SHERRINGTON and Mr. CUMMINGS	O king, live for ever
Air	Mr. LEWIS THOMAS	No; to thyself thy trifles be
Recitative (Accomp.)	Mr. LEWIS THOMAS	Yet to obey
Recitative	Madame LEMMENS-SHERRINGTON	O sentence too severe
Air	Madame LEMMENS-SHERRINGTON	Regard, O son
Recitative	Madame PATEY	You, Gobrias
Chorus		O glorious prince
Air	Madame LEMMENS-SHERRINGTON	Alternate hopes and fears
Chorus		Bel boweth down
Air	Mr. CUMMINGS	I thank thee, Sarach
MARTIAL SYMPHONY		
Air	Mr. THURLEY BEALE	To pow'r immortal
Duet	Mde. LEMMENS-SHERRINGTON and Mde. PATEY	Great victor
Recitative	Madame PATEY and Mr. LEWIS THOMAS	Say, venerable prophet
Soli and Chorus	Mde. LEMMENS-SHERRINGTON, Madame PATEY and Mr. CUMMINGS	Tell it out among the heathen
Recitative (Accomp.)	Madame PATEY	Yes, I will hold thy city
Soli and Chorus	Mde. LEMMENS-SHERRINGTON and Mde. PATEY	I will magnify Thee, O God.

BAND AND CHORUS OF 1200 PERFORMERS.

ORGANIST:—Dr. STAINER.

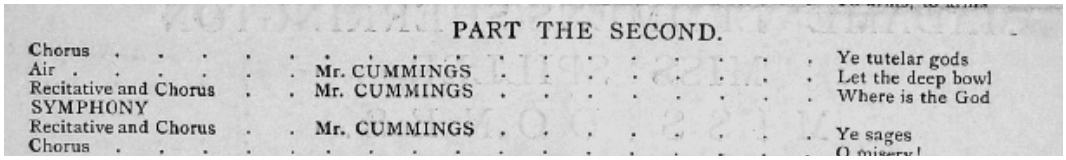
AT THE PIANOFORTE . . . Mr. OLIVER KING.

Conductor - - - Mr. BARNBY.

Doors open at Seven; commence at Eight o'clock.

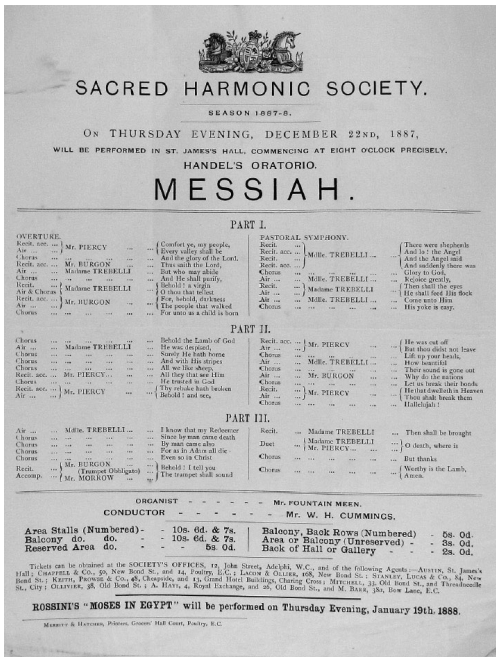
Octavo Scores of "Belshazzar," edited by G. A. Macfarren (just published), may now be had, Price 3s., in Paper Covers; and 3s., in Scarlet Cloth.

1873 年 5 月 7 日に開催されたロイヤル・アルバート・ホール合唱協会の G. F. ヘンデル《ベルシャザール》演奏会のチラシ
独唱者としてカミングスの名を見ることができる。南葵音楽文庫 M-3/22



PART THE SECOND.

Chorus		
Air	Mr. CUMMINGS	Ye tutelar gods
Recitative and Chorus	Mr. CUMMINGS	Let the deep bowl
SYMPHONY		Where is the God
Recitative and Chorus	Mr. CUMMINGS	Ye sages
Chorus		O misery!



SACRED HARMONIC SOCIETY.

SEASON 1887-8.

ON THURSDAY EVENING, DECEMBER 22ND, 1887,

WILL BE PERFORMED IN ST. JAMES'S HALL, COMMENCING AT EIGHT O'CLOCK PRECISELY.

HANDEL'S ORATORIO.

MESSIAH.

PART I.

OVERTURE.		
Recit. acc.	Mr. PIERCY	Comfort ye, my people,
Air		Every valley shall be
Chorus		And the glory of the Lord.
Recit. acc.	Mr. BURGON	Thus saith the Lord,
Air	Madame TREBELLI	But who may abide
Chorus		And He shall purify,
Recit.	Madame TREBELLI	Behold! a virgin
Air & Chorus		O thou that tellest
Recit. acc.	Mr. BURGON	For, behold, darkness
Air		The people that walked
Chorus		For unto us a child is born
PASTORAL SYMPHONY.		
Recit.		
Recit. acc.	Mdlle. TREBELLI	There were shepherds
Recit.		And lo! the Angel
Recit. acc.		And the Angel said
Chorus		And suddenly there was
Air	Mdlle. TREBELLI	Glory to God.
Recit.		Rejoice greatly,
Air	Madame TREBELLI	Then shall the eyes
Air	Mdlle. TREBELLI	He shall feed His flock
Chorus		Come unto Him
		His yoke is easy.

PART II.

Chorus		Behold the Lamb of God
Air	Madame TREBELLI	He was despised,
Chorus		Surely He hath borne
Chorus		And with His stripes
Chorus		All we like sheep
Recit. acc.	Mr. PIERCY	All they that see Him
Chorus		He trusted in God
Recit. acc.	Mr. PIERCY	Thy rebuke hath broken
Air		Behold! and see,
Air	Mdlle. TREBELLI	He was cut off
Chorus		But thou didst not leave
Air	Mdlle. TREBELLI	Lift up your heads,
Chorus		How beautiful
Chorus		Their sound is gone out
Air	Mr. BURGON	Why do the nations
Chorus		Let us break their bonds
Recit.	Mr. PIERCY	He that dwelleth in Heaven
Air		Thou shalt break them
Chorus		Hallelujah!

PART III.

Air	Mdlle. TREBELLI	I know that my Redeemer
Chorus		Since by man came death
Chorus		By man came also
Chorus		For as in Adam all die
Chorus		Even so in Christ
Recit.	Mr. BURGON (Trumpet Obbligato)	Behold! I tell you
Accomp.	Mr. MORROW	The trumpet shall sound
Recit.	Madame TREBELLI	Then shall be brought
Duet	Madame TREBELLI, Mr. PIERCY	O death, where is
Chorus		But thanks
Chorus		Worthy is the Lamb, Amen.

ORGANIST - - - - - - Mr. FOUNTAIN MEEN.

CONDUCTOR - - - - - - Mr. W. H. CUMMINGS.

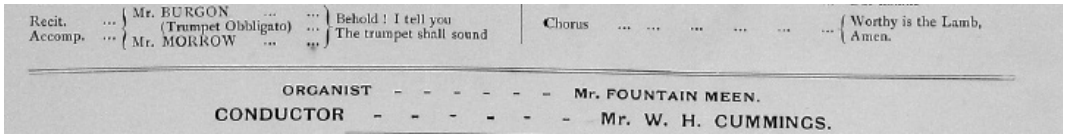
Area Stalls (Numbered) -	10s. 6d. & 7s.	Balcony, Back Rows (Numbered)	5s. 0d.
Balcony do. do. -	10s. 6d. & 7s.	Area or Balcony (Unreserved) -	3s. 0d.
Reserved Area do. - -	5s. 0d.	Back of Hall or Gallery - -	2s. 0d.

Tickets can be obtained at the SOCIETY'S OFFICES, 12, John Street, Adelphi, W.C., and of the following Agents:—AUSTIN, St. James's Hall; CHAPPELL & CO., 50, New Bond St., and 14, Poultry, E.C.; LAUCH & OLLIER, 168, New Bond St.; STANLEY, LUCAS & CO., 84, New Bond St.; KEITH, PROWSE & CO., 48, Cheapside, and 13, Grand Hotel Buildings, Charing Cross; MITCHELL, 33, Old Bond St., and Threadneedle St., City; OLIVIER, 38, Old Bond St.; A. HAY, 4, Royal Exchange, and 26, Old Bond St., and M. BAAR, 38, Bow Lane, E.C.

ROSSINI'S "MOSES IN EGYPT" will be performed on Thursday Evening, January 19th, 1888.

MURRAY & HAYCOCK, Printers, Goodge' Hall Court, Poultry, E.C.

1887 年 12 月 22 日、セント・ジェイムズ・ホールで開催された宗教音楽協会の G. F. ヘンデル《メサイア》演奏会のチラシ
指揮者にカミングスの名が記載されている。南葵音楽文庫 N-4/2



Recit.	Mr. BURGON (Trumpet Obbligato)	Behold! I tell you
Accomp.	Mr. MORROW	The trumpet shall sound
Chorus		Worthy is the Lamb, Amen.

ORGANIST - - - - - - Mr. FOUNTAIN MEEN.

CONDUCTOR - - - - - - Mr. W. H. CUMMINGS.

リカに演奏旅行を行っており、現地の新聞には「音量のあるテナーで、銀のトランペットのような、称賛すべき声質である。イントネーションは信頼でき、その発声は心地よい。言葉［歌詞］は、レチタティーヴォにおいてもアリアにおいても明確に耳に届く。カミングス氏が偉大な歌手であることに疑いの余地はなく、私がこれまで聴いた中でも最も優れたオラトリオのテナー歌手である。彼［の歌］には、ふるえや無意味な感情移入はまったくない」(12)とカミングスの声と歌唱について紹介している。

W.H.カミングス
(Frederic G. Hodsoll撮影、1904年)
©National Portrait Gallery, London

第3期「教育者、研究者時代」(1875年頃～1911年頃)

歌手としての名声が頂点を迎える頃、カミングスは、後進の指導を託されることになる。1879年には、王立音楽院 Royal Academy of Music の歌唱教授に指名され、1896年6月にギルドホール音楽学校 Guildhall School of Music の校長に選ばれるまでその任にあった。この間、王立盲学校 Royal Normal College for the Blind でも教え、また宗教音楽協会 Sacred Harmonic Society の合唱指揮者、フィルハーモニー協会 Philharmonic Society の指揮者なども務めた。こうした教育活動のかたわら、カミングスは、1874年にはイギリス音楽学会 Royal Musical Association、1876年にパーセル協会 Purcell Society の設立に参加し、蒐集した貴重な資料に基づいてヘンリー・パーセルやヘンデルなど、イギリスの作曲家や音楽史に関わる多数の論文や研究書などを発表する(13)。特に、"The Formation of a National Musical Library（国立音楽図書館の設立）" と題された1877年12月3日に行われたイギリス音楽学会における発表は、異論も多く出されたが、資料の蒐集と保存に関する彼の基本的な考え方を示すものとして重視される(14)。そして、様々な功績から1900年にはダブリン、トリニティー・カレッジから名誉博士号 Doctor of Music Honoris Causa が授与された。また、この第3期には、作曲、編曲、楽譜の校訂なども活発に行われており、作品にはカンタータ《妖精の輪 *The Fairy Ring*》(1872年初演)、校訂楽譜にはパーセル協会から出版されたオペラ《ディドとエネア

(12) *Chicago Tribune*, May 15, 1871.

(13) カミングスの著作については、"Cummings, William H.", *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 6 (2001), p. 778に一覧表がある。

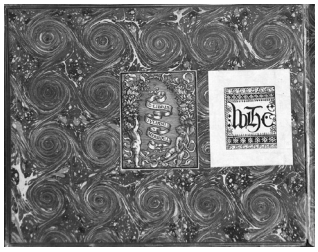
(14) 発表原稿は、質疑と共に *Proceedings of the Musical Association*, 4th Sess. (1877-78), p. 13-26 に収録されている。また邦訳は、『Oxalis：音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』3号（2010）, p. 27にある。

ス *Dido and Aeneas*》（1889年）などがある。

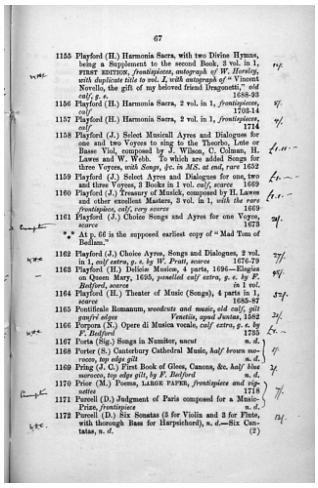
1915年6月6日、カミングスは世を去った。その直後の6月15日、イギリス音楽学会は、研究報告会でかつて会長を務めたカミングスの死を悼み、功績をたたえて全員が起立をして祈りを捧げている[15]。また、*The Musical Times* 誌は、7月1日に死亡記事を掲載してその業績を紹介し、6月10日に執り行われた葬儀について、王室礼拝堂の聖歌隊が正装で聖歌を歌ったことをはじめ、式次第や参列者を含めて詳細を伝えた[16]。

こうした生涯における活動の変化にかかわらず、カミングスが一貫して強い関心をもって行ったのは、作曲家たちの自筆楽譜や初版楽譜などの蒐集であった。すでに1850年にはジョージ・フリデリック・ヘンデル（1685～1759年）が所有していたレースの袖飾りを購入している[17]。最終的におそらく数千点に上ったであろう蒐集がどのように行われたのか、全容は不明であるが、少なくともカミングスの生前に開催された、蔵書家として知られたエドワード・リンボルト（1816～76年）やジュリアン・マーシャル（1836～1903年）の蔵書の競売（それぞれ1877年と1884年）は、重要な入手先であった。例えば、カミングス文庫には、マーシャルの蔵書票が貼られた楽譜などを相当数確認することができ、また競売の際のカタログには、落札者としてカミングスの名が記されている[18]。

カミングスは、蒐集した蔵書がその死後、散逸することに危機感をもっていた。それは、自らが先輩蔵書家たちの蔵書の競売に参加し、競り落とすことで集書してきた経験によるものであったろう。はたしてその予感は的中し、蔵書は、その死後、競売にふされて散逸すること



南葵音楽文庫蔵『ポルポラ、作品集』（ロンドン、1735年）の表紙裏とタイトルページ（N-3/8）
表紙裏にはJ. マーシャルとW. H. カミングスの蔵書票が並んで貼り付けられている。



67

1155 Playford (H.) Harmonia Sacra, with two Divine Hymns, being a Supplement to the second Book, 2 vol. in 1, FIRST EDITION, *frontispiece, autograph of W. Hawkes, with duplicate title to vol. I, with autograph of "* Vincent Novello, the gift of my beloved friend Dragonetti," *old calf, g. e.* 1688-93 — 1/.
1156 Playford (H.) Harmonia Sacra, 2 vol. in 1, *frontispiece, calf* 1703-14 — 8/.
1157 Playford (H.) Harmonia Sacra, 2 vol. in 1, *frontispiece, calf* 1714 — 7/.
1158 Playford (J.) Select Musicall Ayres and Dialogues for one and two Voyces to sing to the Theorbo, Lute or Base Viol, composed by J. Wilson, C. Colman, H. Lawes and W. Webb. To which are added Songs for three Voyces, *with Songs, &c. in MS. at end, rare* 1652 — £1. 11. —
1159 Playford (J.) Select Ayres and Dialogues for one, two and three Voyces, 3 Books in 1 vol. *calf, scarce* 1669 — £1. —
1160 Playford (J.) Treasury of Musick, composed by H. Lawes and other excellent Masters, 3 vol. in 1, *with the rare frontispiece, calf, very scarce* 1669 — £1. 11. —
1161 Playford (J.) Choice Songs and Ayres for one Voyce, *scarce* 1673 — 9/.
, At p. 66 is the supposed earliest copy of "Mad Tom of Bedlam."
1162 Playford (J.) Choice Ayres, Songs and Dialogues, 2 vol. in 1, *calf extra, g. e. by W. Pratt, scarce* 1676-79 — 27/.
1163 Playford (H.) Delicie Musicæ, 4 parts, 1696—Elegies on Queen Mary, 1695, *panelled calf extra, g. e. by F. Bedford, scarce* in 1 vol. — 24/.
1164 Playford (H.) Theater of Music (Songs), 4 parts in 1, *scarce* 1685-87 — 35/.
1165 Pontificale Romanum, *woodcuts and music, old calf, gilt panfret edges* *Venetiis, apud Juntas,* 1582 — 3/.
1166 Porpora (N.) Opere di Musica vocale, *calf extra, g. e. by F. Bedford* 1735 — £1. —
1167 Porta (Sig.) Songs in Number, *uncut* n. d. — 1/.
1168 Porter (S.) Canterbury Cathedral Music, *half brown morocco, top edge gilt* n. d. — 2/.
1169 Pring (J. C.) First Book of Glees, Canons, &c. *half blue morocco, top edge gilt, by F. Bedford* n. d. — 7/.
1170 Prior (M.) Poems, LARGE PAPER, *frontispiece and vignettes* 1718 — 7/.
1171 Purcell (D.) Judgment of Paris composed for a Music-Prize, *frontispiece* n. d. — 10/.
1172 Purcell (D.) Six Sonatas (3 for Violin and 3 for Flute, with through Bass for Harpsichord), n. d.—Six Cantatas, n. d. (2)

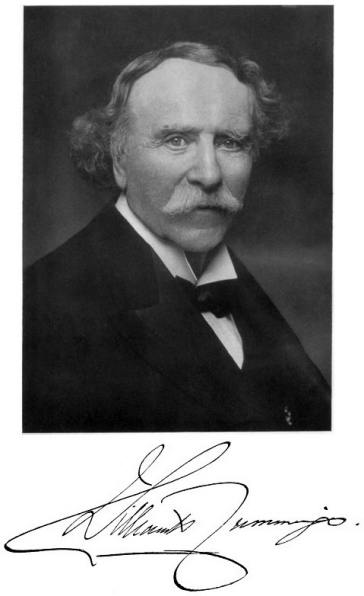
J. マーシャルの蔵書の競売カタログ（1884年）p.67
ロット番号1166"Porpora (N.) Opere di Musica"『ポルポラ、作品集』（ロンドン、1735年）にW. H. カミングスが購入したことを示す"W.H.C"の略号が記されている。

（15）"The Death of the President", *Proceedings of the Musical Association*, 41st Sess. (1914-15), p. 141-143.

（16）"William Hayman Cummings", *The Musical Times*, vol. 56, no. 869 (July 1, 1915), p. 394-397.

（17）"Cummings, William H.", *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 6 (2001), p.778.

（18）マーシャルの蔵書については、Arthur Searle, "Julian Marshall and the British Museum: Music Collecting in the Later Ninteenth Century", *Electronic British Library Journal* (The British Library, 1985), http://www.bl.uk/eblj/1985articles/article5.html（参照 2018-8-31）を参照。また、リンボルトとマーシャルの蔵書の競売カタログは、それぞれ *Catalogue of the Music Library of Edward Francis Rimbault, Sold at London, 31 July-7 August 1877, Auction Catalogue of Music , A series of Facsimiles eith Introduction by A. Hyatt King* (Frits Knuf, Buren, 1975) と *Catalogue of the Musical Library of Julian Marshall, Esq.* (Sotheby, 1884), The British Library, Hirsh 461.



晩年のカミングス
"William Hayman Cummings", *The Musical Times*, vol. 56, no. 869 (July 1, 1915), p. 397より。

になってしまう。しかし『ニュー・グローヴ音楽事典』（2001年）の報告によれば、今日、カミングスの旧蔵書は、その一部に過ぎないものの、南葵音楽文庫の他、アメリカ合衆国ワシントンの議会図書館に59点が収蔵されていることが確認されている[19]。また、近年、"RISM (Répertoire International des Sources Musicales)"[20]の国際的な活動により、カミングスの旧蔵書そのものと、それらを所有する図書館が確認できる可能性が高まっている。カミングスの旧蔵書の全容が判明する時が訪れることを期待したい。

『イギリス音楽の作曲家たち。存命の新旧の著名なイギリス人作曲家たち』
1908年10月24日に刊行されたSamuel Beggによるレリーフ画
©National Portrait Gallery, London
右側後ろに立つ4名の前に着席するW. H. カミングス。左側前方に着席する2人めは、徳川頼貞の作曲の師であるチャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォード（1852～1924年）、3人めはエドワード・エルガー（1857～1934年）。

(19) "Cummings, William H.", *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 6 (2001), p. 778.
(20) RISM, http://www.rism.info/home/（参照2018-9-9）

時代とともに／時代の傍らで
―スナール室内楽シリーズ―

近藤秀樹

本紀要第１号の調査報告「スナール社[1]の挑戦」では、南葵音楽文庫所蔵のスナール室内楽シリーズについて概観したが、この室内楽シリーズに登場する作曲家たちは、Musiques modernes と Musiques anciennes を併せると実に200名以上に登る。Musiques modernes の部に関して言えば、「スナール社の挑戦」で指摘したように、最年長の作曲家はヴァンサン・ダンディ Vincent d'Indy（1851 ～ 1931年）、最年少はジャン・フランセ Jean Françaix（1912 ～ 97年）である。スナール室内楽シリーズのラインナップの傾向を探るために、まずは Musiques modernes に登場する作曲家たちを、当時のパリの楽壇の動向と関連させて整理してみよう。

1. 時代とともに：パリ楽壇の３つのグループとスナール

両大戦間のパリの楽壇には、大きくわけて３つの作曲家のグループがあったとされる。①フランス六人組。②アルクイユ楽派。③エコール・ド・パリ。

フランス六人組 Les Six は、サティ Erik Satie（1866 ～ 1925年）に影響を受けた６人の作曲家の集まり。メンバーはルイ・デュレ Louis Durey（1888 ～ 1979年）、アルテュール・オネゲル Arthur Honegger（1892 ～ 1955年）、ダリウス・ミヨー Darius Milhaud（1892 ～ 1974年）、ジェルメーヌ・タイユフェール Germaine Tailleferre（1892 ～ 1983年）、フランシス・プーランク Francis Poulenc（1899 ～ 1963年）、ジョルジュ・オーリック Georges Auric（1899 ～ 1983年）。これに「詩的通信員」たる詩人ジャン・コクトー Jean Cocteau（1889 ～ 1963年）を付け加えるべきであろう。六人組はコクトーの『雄鶏とアルルカン』抜きには語れない。六人組の名づけ親は、作曲家で音楽評論家のアンリ・コレ Henri Collet（1885 ～ 1951年）だが、コレはスナール室内楽シリーズの付録論考の執筆者の一人であった。六人組のメンバーのうち、スナール社ともっとも縁が深いのはオネゲルである。彼の代表作である交

（1）楽譜出版社 Senart ならびに「室内楽シリーズ」の概要については、「スナール社の挑戦――南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ」『南葵音楽文庫紀要』1 号（2018）, p. 49-56 を参照。なお、Senart はしばしば Sénart とも表記され、これに対応して「セナール」の片仮名表記も用いられるが、ここでは『ニューグローヴ世界音楽大事典』日本版に準拠して「スナール」と表記する。

響的運動《パシフィック231》はスナール社から刊行された。室内楽シリーズにも、ピアノ曲、歌曲、ヴァイオリン・ソナタなど、数多くの作品が含まれている。音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル *La Revue Musicale*』に掲載されたスナール社の広告では、しばしばオネゲルが大きく扱われており、オネゲルはいわばスナールの看板作曲家だったようである。オネゲル以外ではダリウス・ミヨーの作品が若干含まれる程度。

アルクイユ楽派 Ecole d'Arcueil は、上記のフランス六人組とは別に、サティを師と仰ぐ若手作曲家たちが作ったグループで、アルクイユの名はサティが暮らしたパリ郊外の街の名から採られた。メンバーはアンリ・ソゲ Henri Sauguet（1901 ～ 89年）、アンリ・クリケ＝プレイエル Henri Cliquet-Pleyel（1894 ～ 1963年）、マクシム・ジャコブ Maxime Jacob（1906 ～ 77年）、ロジェ・デゾルミエール Roger Désormière（1898 ～ 1963年）。彼らはみな、スナール室内楽シリーズの主要な作曲家の一人であったシャルル・ケクラン Charles Koechlin（1867 ～ 1950年）の弟子であるが、アルクイユ楽派の作品は室内楽シリーズにはほとんど出てこない。ソゲの作品がひとつだけ含まれるが、これはもともと他社から刊行されたものである(2)。

エコール・ド・パリ Ecole de Paris は、フランス以外の国からやってきてパリを拠点に活動した作曲家たちのグループ。アレクサンドル・チェレプニン Alexandre Tcherepnine（1899 ～ 1977年、ロシア）、ティボール・ハルシャニー Tibor Harsányi（1898 ～ 1954年、ハンガリー）、マルセル・ミハロヴィッチ Marcel Mihalovici（1898 ～ 1985年、ルーマニア）、ボフスラフ・マルティヌー Bohuslav Martinů（1890 ～ 1959年、チェコ）、アレクサンドル・タンスマン Alexandre Tansman（1897 ～ 1986年、ポーランド）、エルネスト・ハルフテル Ernesto Halffter（1905 ～ 89年、スペイン）、フラダリーク（フェデリコ）モンポウ Frederic Mompou（1893 ～ 1987年、スペイン・カタルーニャ）、ヴィットリオ・リエティ Vittorio Rieti（1898 ～ 1994年、イタリア）。このうちスナール室内楽シリーズに登場するのは、タンスマン、モンポウ、リエティ。モンポウと親しかったカタルーニャの作曲家マヌエル・ブランカフォルト Manuel Blancafort（1897

（2）バレエ《雌猫 *La Chatte*》のピアノ独奏用編曲。1927年、ルアール・ルロル Rouart, Lerolle & Cie。他社から刊行された楽譜がスナール室内楽シリーズに収められるようになった経緯については、「スナール社の挑戦――南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ」, p. 51 を参照。

～ 1987年）も、初期の代表作である《アトラクション広場 *El Parc d'atraccions*》（1920 ～ 24年）をはじめ、いくつかの作品をスナールから出している。

なお、これら3つのグループに属する作曲家たちの多くは、ストラヴィンスキーの影響下に新古典主義的な作風を示したが、この新古典主義に反発して出てくるのがメシアン、ジョリヴェらの「若きフランス Jeune France」である。しかし、彼らが頭角を現すのは1930年代になってからであり、1920年代に刊行されたスナール室内楽シリーズにはこのグループの作曲家の作品は含まれていない。

2. 時代の傍らで：独立独歩の作曲家たち

一方、スナール室内楽シリーズには、特定のエコールに属さない、いわば独立独歩の人々も登場する。たとえば、六人組に対抗して「一人組」を名乗り、ドビュッシーとルネサンス期の音楽に学んで独自の作風を立てたジョルジュ·ミゴ Georges Migot（1891 ～ 1976 年）。あるいは、優れたオルガニストで、敢えてパリ音楽院の門をくぐらず我が道を歩んだジャン・ユレ Jean Huré（1877 ～ 1930 年）。彼らはどのエコールにも属さない音楽家といってよい(3)。また、本紀要第1号で取り上げたシャルル·ケクランも、ミヨー、プーランク、ソーゲらの多くの弟子を育てながら、流行を追わず伝統に縛られない独立独歩の音楽家でありつづけた。

まさにそのような姿勢のゆえに、彼らは音楽史の本流とは別の道を歩むことになった――それゆえ忘却された――わけであるが、スナール室内楽シリーズには、彼らのそのような“独立独歩”の足跡が刻まれている。しかも、楽譜のみならず付録論考という形で。大戦間、ことに1920 年代のフランス音楽史を多角的に検討しようとしたとき、いわば無党派のユニークな作曲家たちを数多く擁したスナール室内楽シリーズは、貴重な資料となりうるであろう。

そこで次節では、スナール室内楽シリーズに登場する独立独歩の作曲家たちの中から、近年とみに再評価が進んでいるジャン・クラースを取り上げたい。

（3）この 2 人の共通点は、作曲家であると同時に理論家でもあり、音楽史に通じていたことである。ミゴはパリ音楽院の楽器博物館の館長を務めたし、ユレにはオルガンについての著作のほか、『音楽家 聖アウグスティヌス』などの著書がある。また、この 2 人はスナール室内楽シリーズの付録論考の執筆者でもあった。

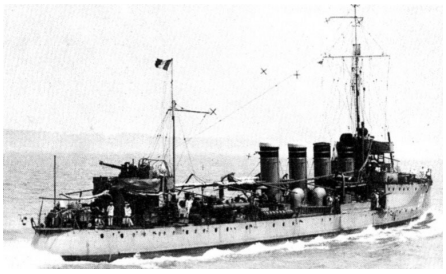
Le capitaine de vaisseau Jean Cras

3. ジャン・クラースとスナール社

ジャン・クラース Jean Cras（1879 ～ 1932年）[4]は、ブルターニュ地方フィニステール県の軍港ブレストに、軍医の子として生まれた。クラース家は音楽的な家庭で、ジャンも幼少よりピアノやヴァイオリンを演奏し、早くから作曲も試みている。父に倣って海軍軍人を志したジャン・クラースだが、海軍士官学校を卒業後、海軍軍人と音楽家のどちらを選ぶかで迷い、尊敬する作曲家アンリ・デュパルクに相談した[5]。デュパルクはクラースの音楽の才能を高く評価していたが、音楽家として生きる難しさもよく知っていたため、海軍に入り、なおかつ作曲を続けるようクラースに勧めた。同時に「才能だけでは曲は書けない。技術を身に着けるように」と助言。クラースはこれに従い、海軍軍人として生きる決意を固めたが、休暇で陸に上がるとデュパルクを訪ねて教えを受け、地道に作曲を続けて、ピアノ曲、歌曲、室内楽曲、管弦楽曲、さらには歌劇《ポリフェーム》を作曲した。クラースは自分の船室にアップライトピアノを持ち込み、軍務の合間に作曲の筆を執った。ピアノにスペースを取られて船室にベッドを置くことができなかったため、ハンモックで眠ったと伝えられる。

第一次世界大戦では駆逐艦コマンダン・ボリー Commandant Bory を指揮してオトラント海峡海戦に参加。オーストリア＝ハンガリー海軍のUボートと激闘を繰り広げた。また、航海術に関する発明も行っている。1924年3月には大佐に昇進。この時点でクラースは、フランス海軍でもっとも若い大佐であった。1932年に53歳で亡くなったが、その時点での階級は准将、故郷ブレストの軍港司令官の地位にあった。

クラースの作品は一時忘却されたが、1990年頃から再評価が進み、今日ではほとんどの作品がCD化され、コンサートで取り上げられる機会も徐々に増えている。



クラースが1916 ～ 17年に艦長をつとめた駆逐艦コマンダン・ボリー（写真は1912年に撮影されたもの）。
クラースはこの艦で軍務に精励するかたわら、歌劇《ポリフェーム》のオーケストレーションを行った。

クラースはスナール室内楽シリーズの常連であった

（4）Jean Cras はこれまで「ジャン・クラ」と片仮名表記されることが多かったが、Cras の s は発音する。「クラス」「クラーズ」等の表記も見られるが、ここでは『ニューグローヴ世界音楽大事典』日本版に従って「ジャン・クラース」とする。なお、やはりブレスト出身の詩人で船医だったヴィクトル・セガレン Victor Segalen（1878 ～ 1919 年）は、ジャン・クラースの従兄にあたる。

（5）クラースは 1901 年にテュパルクの知遇を得た。デュパルクは強迫神経症のためほとんど作曲できない状態だったが、クラースを「魂の息子」と呼んで援助を惜しまなかった。クラースとデュパルクとの関係については、以下を参照。Henri Duparc, *Lettres à Jean Cras «le fils de mon âme»*, présentées et annotées par Stéphane Topakian (Symétrie, Lyon, 2009). Paul-André Bempéchat, *Jean Cras, Polymath of Music and Letters* (Ahgate, 2009).

（表１を参照）。たとえば本紀要第１号で紹介した松山芳野里の《5つの日本的な歌》と同じ巻（1922年第２期、「歌とピアノ」編）には、クラースの歌劇《ポリフェーム》抜粋が収められている。この歌劇の間奏曲[6]のピアノ独奏用編曲（1923年第１期、「ピアノ音楽」編）、ヴァイオリンとピアノ用の編曲（1924年第２期、「ヴァイオリンとピアノ」編）も室内楽シリーズに入っており、歌劇の総譜ならびにヴォーカル・スコアもスナールから刊行されている。

《ポリフェーム *Polyphème*》はアルベール・サマン Albert Samain（1858 ～ 1900年）の同名の戯曲に基づく歌劇である。クラースは原作を一読して夢中になり、これを歌劇にすることを決意。構想の段階からデュパルクに相談し、1912年から14年にかけて筆を進めた。管弦楽配置は第一次世界大戦中、軍務の合間を縫うようにして行われ、1922年にパリ・オペラ座で初演された。《ポリフェーム》がスナール社から刊行された経緯は不明だが、これ以降に書かれたクラースの作品はすべてスナール社から刊行されており、そのうちの幾つか――歌曲、室内楽曲――は室内楽シリーズにも収められることになる（表1）。ここでは、その中から２つの歌曲集を紹介する。

【表1】スナール室内楽シリーズにおけるジャン・クラースの作品

◎1921年第1期
・《子どもたちの魂》（ピアノ連弾曲）
◎1922年第2期
・歌劇《ポリフェーム》より抜粋
　第3幕第1場 ポリフェームの歌
　第4幕第5場 ガラテの歌
◎1923年第1期
・歌劇《ポリフェーム》より〈間奏曲〉（ピアノ独奏用編曲）
・歌曲《映像》
・《ピアノ五重奏曲》
◎1923年第2期
・歌曲集《泉》
◎1924年第2期
・歌劇《ポリフェーム》より〈間奏曲〉（ヴァイオリンとピアノ用編曲）
◎1925年第1期
・歌曲集《5つのルバイヤート》
◎1926年第1期
・《2つの即興曲》（ピアノ or ハープ）
◎1927年
・《弦楽三重奏曲》

歌曲集《泉 *Fontaines*》

リュシアン・ジャック Lucien Jacques（1891 ～ 1961年）の詩集『泉 *Fontaines*』（1923年）[7]から5篇を選んで作曲。リュシアン・ジャックは詩人である以前に画家で、クラースの歌曲集《泉》の表紙を飾る木版画はジャックによるもの。舞踊にも造詣が深く、一時、イサドラ・ダンカン Isadora Duncan（1877 ～ 1927年）の秘書を務めており、ダンカンについての著作もある。また、『木を植えた男』で知られる作家ジャン・ジオノ Jean Giono（1895 ～ 1970年）の才能を最初に認めて世に出したのは、リュシアン・ジャックであった。

クラース《泉》表紙

曲を献呈されたヴァニ・マルクー Vanni-Marcoux（1877 ～ 1962年）はバリトン歌手。クラースの歌劇《ポリフェーム》でタイトルロールを歌ったのが、このヴァニ・マルクーであった。

この歌曲集におけるクラースの書法は、詩の素朴さと晴朗さを意識してか、簡潔を極めている。第１曲をはじめ、多くの曲はごく単純な音型の反復を基礎としており、

（6）〈ガラテの眠り *Le Sommeil de Galatée*〉。歌劇第１幕第１場と第２場をつなぐ間奏曲。
（7）「ジャン・レモン Jean Lémont」の筆名で出版。

また、旋律はしばしば旋法的である。第1曲にはドビュッシーやラヴェルが好んだ平行和音が用いられている。これらはクラースの師デュパルクの歌曲には見られないものであり、また、クラース自身の初期の作品にも見当たらない。これらの手法がクラースの作品中に出てくるのは、歌劇《ポリフェーム》が最初であろう。クラースは師デュパルクの影響もあってドビュッシーの音楽には若干批判的だったようたが(8)、歌劇《ポリフェーム》にはドビュッシーの《ペレアスとメリザンド》を研究したとおぼしき箇所が随所に見られる。この点で歌劇《ポリフェーム》は、クラースの作風の転換点であったと思われる。

なお、クラースは1928年に、再びリュシアン・ジャックの詩により歌曲集《牧神の笛 *La Flûte de Pan*》を書いている。フルート(ないしパンフルート)、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの伴奏で歌われるユニークな歌曲集である。

クラース《ルバイヤート》表紙

歌曲集《ルバイヤート *Robaiyat*》

フランツ・トゥッサン Franz Toussaint（1879～1955年）による『ルバイヤート *Robaiyat*』仏訳に作曲。表紙の絵はクラースの娘の一人モニク Monique Cras（1910～2007年）が描いた(9)。

ウマル・ハイヤーム Omar Khayyám（1048～1131年）の『ルバイヤート』には種々の仏訳があるが、トゥッサン訳（1924年）はもっとも人口に膾炙したもののひとつとされる。トゥッサンは東洋学者で、アラブの詩の翻訳（翻案？）である『愛撫の庭 *Le jardin des caresses*』（1914年）をはじめ、東洋のさまざまな文学作品を仏訳しており、それらの翻訳詩は同時代の作曲家たちを刺激してユニークな歌曲を生み出させることとなった(10)。作曲家たちを惹きつけたのが東洋趣味であることは言うまでもないが、翻訳詩が多くの場合散文訳であることも重要である。散文訳に作曲することは、句形や押韻に縛られないテキストに音楽を寄り添わせてゆくことを意味する。この困難にして魅惑的な課題も、作曲家たちを刺激したであろう。クラース自身もこの課

（8）Bempéchat, *Jean Cras, Polymath of Music and Letters*, p. 162-163. Duparc, *Lettres à Jean Cras «le fils de mon âme»*, p. 26-27, 66-67.

（9）歌曲集の表紙を書いたのはモニクが14歳の頃であろう。のちにモニクは画家となり、仏領アフリカを題材にした作品を多数描くことになる。

（10）ルイ・オベール Louis Aubert（1877～1968年）の歌曲集《6つのアラブの詩 *Six Poèmes arabes*》（1917～19年）、ギュスターヴ・サマズイユ Gustave Samazeuilh（1877～1967年）の歌曲集《時の廻り *Le Cercle des heures*》（1933年）など。

題に取り組んだ一人で、すでに1920年には、ラビンドラナート・タゴール Rabindranath Tagore（1861 ～ 1941年）の詩集『歌の捧げもの *Gitanjali*』の仏訳[11]から6篇を採って歌曲集を編んでいる[12]。

ただ、歌曲集《ルバイヤート》はそのペシミスティックな表現において際立っており、この点で《歌の捧げもの》や《泉》と好対照をなしている。とりわけ第5曲〈召使たちよ、ランプを持ってくるな *Serviteurs, n'apportez pas les lampes*〉は、《泉》に見られた簡潔さ――単純な伴奏型の反復――が、明るさや晴朗さではなく、悲痛な表現に通じている。「……なぜなら、死者たちに朝は来ないのだから」。

ジル=マルシェックス
マチス画

4. クラースとジル=マルシェックス

ジャン・クラースの作品が日本に初めて紹介されたのは、恐らく1925年のジル=マルシェックスの来日リサイタルにおいてであろう。

フランスのピアニスト、アンリ・ジル=マルシェックス Henri Gil-Marchex（1894 ～ 1970年）は薩摩治郎八（1901 ～ 76年）の肝煎りで1925年に初来日し、10月から11月にかけて6回の連続リサイタルを開催した[13]。これは、3つのテーマ（主観的音楽、追想的音楽、舞踊音楽）を設け、各テーマについて2回のリサイタルを行い、バロック時代の作品から、古典派、ロマン派を経て、現代（1920年代）の作品までを、テーマごとに概観するというものであった[14]。

そのうちの「追想的音楽」La Musique Evocatrice――映像を喚起する évoquer ような音楽の謂いであろう――の第2回演奏会で、ジル=マルシェックスは、ドビュッシーの《映像》と《前奏曲》(いずれも抜粋)、プーランク《3つの無窮動》などとともに、クラースのピアノ曲《風景 *Paysages*》から第1曲〈海の風景 *Maritime*〉を演奏している[15]。《風景》はジル=マル

(11) タゴール自身による英訳 (1913 年) からの重訳。アンドレ・ジッド André Gide（1869 ～ 1951 年）による。1917 年刊行。

(12) *L'Offrande Lyrique*（1920 年)。出版はルアール・ルロル。

(13) ジル=マルシェックスについては以下を参照。白石朝子『アンリ・ジル = マルシェックスによる日仏文化交流の試み――4 度の来日 (1925-1937) における音楽活動と日本音楽研究をもとに』愛知県立芸術大学音楽研究科博士後期課程学位論文 , 平成 25 年度 .

(14) 本紀要の資料紹介「ジル = マルシェックス編ラヴェル《ティータイムのフォックストロット》」(p. 74-77) も参照。

(15) 連続リサイタルの曲目解説では Jean Cras は「ヂャン・クラ」と片仮名表記されているが、正誤表で「ヂャン・クラはヂャン・クラスと発音す。」と訂正されている。

シェックスに献呈された曲で、〈海の風景〉〈田園の風景 *Champêtre*〉の2曲からなる。1917年10月、イタリアのブリンディジに停泊中の駆逐艦コマンダン・ボリー号で、歌劇《ポリフェーム》の管弦楽配置と平行して作曲が進められ、楽譜は1920年にデュラン社から出版されている。〈海の風景〉についてのジル＝マルシェックス自身による解説を参考資料として掲げる（資料1）[16]。上記のようにジル＝マルシェックスは〈海の風景〉を「追想的音楽」の一環として取り上げたわけだが、クラース自身は、むしろ第2曲〈田園の風景〉のほうがより喚起的évocatrice であり、「風景 *Paysage*」の名にふさわしいと考えていたようである[17]。

なお、ジル＝マルシェックスは、1923年にアンドルフィ弦楽四重奏団 Quatuor Andolfi とクラースの《ピアノ五重奏曲》を初演しており、この曲もスナール室内楽シリーズの「アンサンブル編」の一環として1923年に出版された。

【資料1】ジル＝マルシェックスによる《海の風景》解説

ヂャン・クラは現役の仏蘭西海軍将校で、神秘的雰囲気とその郷土であるブルタニュの美しい詩とが染めた作曲家である。彼の神秘的性格、その深奥な感覚は較々音楽のピエール ロチの感がある。アドリアチツク海の燃える様な太陽の下でBrindisi で、一千九百十六年に書かれたこの海の風景の中には雲の多い静なタ暮に紫の霧にこめられた広野から眺めたブルタニュの海の郷愁が漂ふてゐる。静に港に入つてくる船、古い十字架に祈る女達、灯火のともる燈台、と静に静に過るぼかしの様な黄昏の紫色、そして夜がくれて行く。

「アンリー・ヂル マルシエックス洋琴演奏会」プログラム, p. 28.

5. 倉重瞬輔の「ジャン・クラ研究」

1933（昭和8）年の『音樂新潮』2月号と3月号に、倉重瞬輔[18]が「ジャン・クラ研究」を書いている。クラースが前年の1932年に亡くなったことが記事掲載のきっかけであろうか。おそらく日本でのクラース紹介の嚆矢であろうと思われる。

「モーリス・ラヴェル、フローラン・シュミット、ジャック・イベール等に比較すべき1つの存在がある。それはジャン・クラだ。彼の作品は二三の歌謡曲[19]以外には餘り我が國には紹介されて居ない様である。以下私はジャン・クラに對する懐かしい想ひ出をもつて彼の人及び其の作品の代表的なものに触れて見やう」[20]。倉重の「ジャン・クラ研究」の冒頭にはこのように書かれ

（16）ジル＝マルシェックスは《風景》の作曲年代を 1916 年としているが、1917 年が正しい。

（17）Paul- André Bempéchat, *Jean Cras, Polymath of Music and Letters*, p. 313.

（18）倉重舜介（瞬輔）（1905 ～ 2000 年）は作曲家、評論家。東京高等音楽学院（現国立音楽大学）卒。1931 年 6 月渡仏、アンリ・トマジ Henri Tomasi（1901 ～ 71 年）に師事、32 年 5 月帰国。新興作曲家聯盟（日本現代音楽協会の前身）の創設時からのメンバーで、日本プロレタリア音楽（家）同盟にも関わる。フランス現代音楽やシャンソン、ジャズの紹介につとめ、「相馬仁」などの筆名で作詞、訳詞なども手がけた。作品に歌曲《牝鶏の視野》、オペレッタ《お前と私》、著書に評伝『タンスマン』、『音楽の話』、『現代世界音楽大観』（共著）など。

（19）1930 (昭和 8) 年 5 月 6 日に、三潴牧子 (みつま まきこ) が第五回独唱会でクラースの《3 つのクリスマス *Trois Noëls*》を歌っている。同曲は 1929 年に作曲され、翌年スナールから出版された。

（20）倉重瞬輔「ジャン・クラ研究」、『音樂新潮』1933 年 2 月号 , p. 9.

ているが、内容的には、スナール室内楽シリーズの付録論考（1925年第1期）にエドゥアール・シュネデール Edouard Schneider[21]が書いた「我らが音楽家たち──ジャン・クラース Nos musiciens: JEAN CRAS」と重なる部分が多く、その抄訳に近い。当時はシュネデールの論考以外にクラースについての参考文献がほとんどなかったというのが実情であろう。倉重自身、資料の少ないことを記事の末尾で嘆いている。ルネ・デュメニル René Dumesnil（1879 ～ 1967年）による論考は1938年を待たねばならない。

倉重の「ジャン・クラ研究」は、シュネデールの論考の大筋をたどりながら、クラースの生涯と作品を紹介している。とりわけ歌劇《ポリフェーム》に多くの紙幅を割いているが、《ピアノ五重奏曲》や歌曲集《泉》などにも言及している。

《泉》については「詩人の魂と音樂家の魂とは不思議にも此處では同一なる純情を歌ひ合つて居る。此の曲に於ける言葉と音樂との一致は完璧に近いものである。ジャン・クラの単純性は此處にも明瞭に現されて居る。ピアノは到る處に於て完全なる一致體を見出して居る。此の曲は近代歌謠中に於けるより可憐なるものの一つに數へる事が出來るだらう。」と述べている[22]。参考までに、シュネデールの原文から、この記述に対応する個所を掲げる（資料2）。

また、ピアノ曲《風景》については、次のように述べている。「此の Paysages に於てジャン・クラは海と田園の風光を歌って居る。それは彼の自然に対する深い観賞と愛撫との結晶である。／大洋のうねりに揺れる静かなる舟、無限の輝、波は長閑に流れて行く。Poèmes intimes [初期のピアノ曲集] と同様なテクニックを使用して居るとは云へこれは遥かに完成に近いものである。水平線を望むジャン・クラの感動が画かれている。低音部につながる五度は永遠なるものへの祈りを思はせ海の巨大なる力に引き寄せられた人類のさまざまな魂を物語る。Champêtre は崇高なるアリオンを示し、Maritime は藝術家の海に對する優しい思ひ出を歌う」[23]。《内なる音楽 *Poèmes intimes*》との比較や「低音部につながる五度」への言及などから見て、この部分

【資料2】シュネデールの原文

Ame du Poète, âme du musicien, il est difficile de rêver union de sources plus pures. L'accord entre le verbe et la musique se fait, dans ces mélodies, parfait. La simplicité, que j'ai signalée à plusieurs reprises comme l'une des vertus dominantes du compositeur, s'épanouit ici dans une lumière plus aiguë que par tout ailleurs. Le piano s'exprime en un style depouillé de tout effort, prolongeant insensiblement la parole, éployant subtilement sa vibration. Le texte et le commentaire musical ne forment qu'une seule et même réalité. On chercherait vainement dans la musique moderne oeuvre mélodique plus joliment sonore et plus absolument achevée.

(Edouard Schneider: Nos Musiciens JEAN CRAS, in La Musique de Chambre, Revue semestrielle de Musique ancienne et moderne, Supplément et Critique littéraire, 1er semestre 1925, p.15)

（21）エドゥアール･シュネデール（1880 ～ 1960 年）は象徴派の詩人、作家、評論家。クラースとは個人的に面識があり、シュネデールの詩「映像 Image」でクラースは歌曲を書いている（1921 年）。倉重の記事自体には、シュネデールの名は一度も出てこない。

（22）倉重瞬輔「ジャン・クラ研究」『音樂新潮』1933 年 3 月号 , p. 38.

（23）倉重瞬輔「ジャン・クラ研究」『音樂新潮』1933 年 2 月号 , p. 13.

もシュネデールの論考を下敷きにしたものと思われるが、《泉》を論じた部分と比べると、シュネデールのテキストとのつながりはより緩やかである。倉重が自由に解釈した部分もあったであろうし、誤解、誤訳もあったかもしれない。また、後述するように、倉重がシュネデール以外の文献を参照していた可能性もある。

一方、シュネデールの論考をふまえつつ、倉重が独自の見解を述べたと思われる部分も少なくない。たとえばシュネデールがクラースとピエール・ロティ Pierre Loti（1850 ～ 1923年）――どちらも海軍軍人で異国趣味の持ち主であった――との間に根本的な相違を見出しているのに対して、倉重は両者の共通点を強調している[24]。また、ピアノ連弾曲《子どもたちの魂 *L'âmes d'enfants*》(1918年)とその管弦楽版に対してシュネデールは批判的であるが、倉重は高く評価している。いずれにせよ倉重の論考は、スナール室内楽シリーズの日本での受容の一例として、たいへん興味深い。

ただし倉重は、付録論考とは別の参考文献も参照している可能性がある。倉重の記事の末尾には、未発表作品を含む、かなり詳細な作品リストが付いており、これはスナールの付録論考には見当たらない。このリストは、1926年以降の作品を含んでいないことから、恐らく1925年前後に作られたものであろう。さらに、倉重自身は、何らかの情報源から、クラースの近作にピアノ協奏曲（1931年）[25]があることを把握しているが、この曲は件の作品リストには含まれていない。また、倉重の「ジャン・クラ研究」には歌曲集《ルバイヤート》への言及があるが、これも付録論考には該当箇所が見当たらない。これらのことから倉重はシュネデールの論考以外の資料も参照していた可能性が高いと思われるが、この問題については今後の調査を俟たねばならない。

（24）クラース自身は、自分が「音楽のピエール・ロティ」と呼ばれることを嫌悪していた。Bempéchat, *Jean Cras, Polymath of Music and Letters*, p. 364.

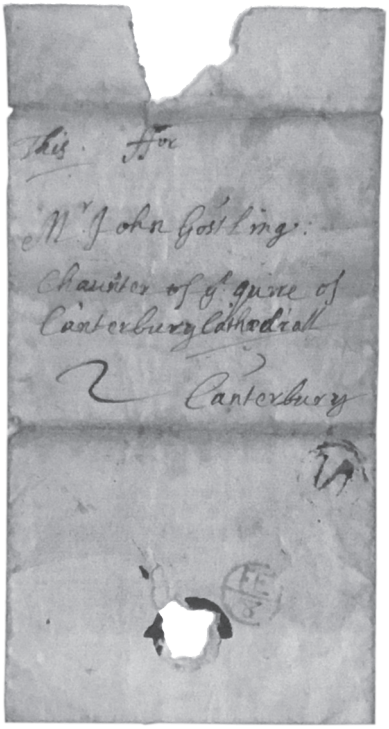
（25）《ピアノ協奏曲》はクラースの娘の一人コレット Colette（1908 ～ 53 年）に献呈され、やはりスナールから刊行された。コレット・クラースはラザール・レヴィ門下のピアニストで、1937 年にアレクサンドル・タンスマンと結婚することになる。《ソナタ》（1941 年）をはじめ、タンスマンのピアノ 2 台のための作品の多くは、夫婦共演のために書かれた作品である。なお、クラース《ピアノ協奏曲》には、コレット自身による録音がある（Timpani 1C1200, 2012）。

資料紹介

トーマス・パーセル「1678 年 2 月 8 日付けジョン・ゴスリング宛書簡」と「権利委譲証書」

Purcell, Thomas. Letter, 1678, Feb., 8, London, to John Gostling. 1p. 23 × 17cm. Holograph signed with superscription（収蔵番号 L-4）

Purcell, Thomas. The autograph deed of Thomas Purcell, May 15, 1681. 29 × 19cm.（収蔵番号 L-12）



トーマス・パーセル「1678年2月8日付けジョン・ゴスリング宛書簡」

イギリスのバロック期を代表する音楽家であるヘンリー・パーセル Henry Purcell（1659 ～ 95 年、以下「パーセル」）の出自について、今日では、一般的に王室礼拝堂のジェントルマンであった同名のヘンリー・パーセル（1664 年没）とその妻エリザベス Elizabeth（1699 年没）の間に生まれた子で、父親の死後、おそらくその兄弟、すなわち叔父、あるいは伯父のトーマス・パーセル Thomas Purcell（1682 年没）によって養育されたと考えられている[1]。これは、様々な資料に基づく推論によるが、ここで紹介するトーマス・パーセルの自筆によるとされる書簡と権利委譲証書は、その推論に重要な情報を提供するものであった。

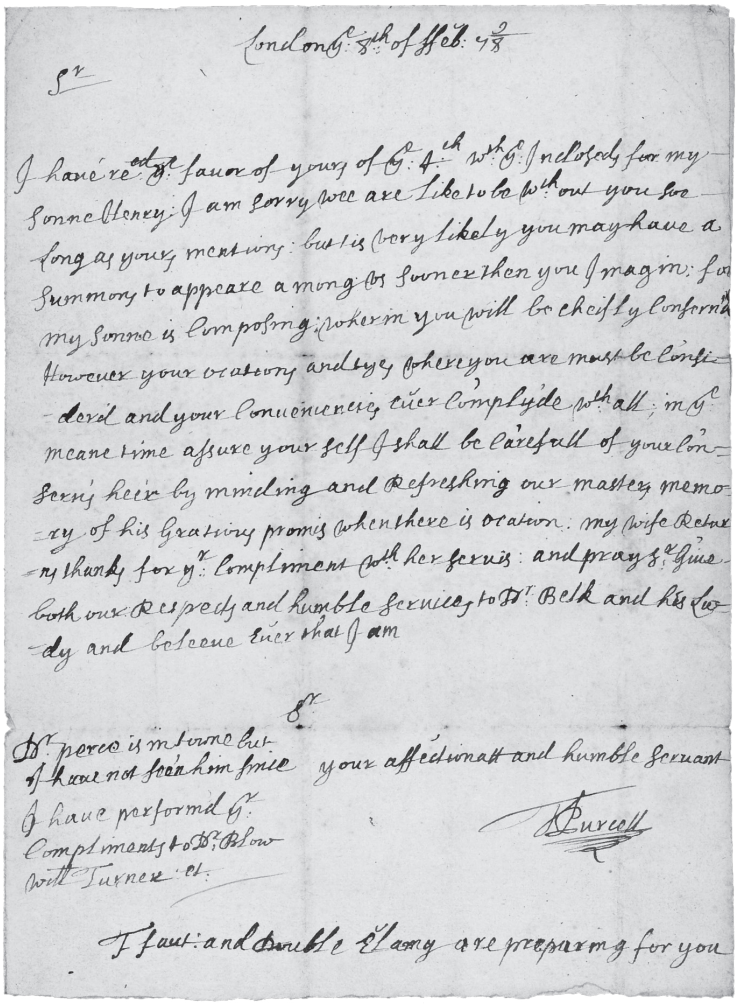
これらの書簡と証書は、どちらも南葵音楽文庫の中核に位置づけられるカミングス文庫に含まれ、同文庫においても特に貴重な資料とされている。W. H. カミングスの没後に開催されたその蔵書の競売（1917 年 5 月 17 ～ 23 日）では、両者は組み合わされて初日に競りにかけられた。しかし買い手がつかなかったために遺族に返却され、その後、他の資料と共に遺族から徳川頼貞が購入したものである[2]。なお、カミングスが、これらの資料を入手した経緯については、明らかではない。1936 年にパーセルについての評伝を著した J. A. ウェストラップは、その改訂版（1964 年）で、カミングスをおそらくこの書簡を最初に見た音楽史家としている[3]。

書簡は、王室礼拝堂のジェントルマンであったトーマス・パーセルが、1678 年 2 月 8 日付けでカンタベリー大聖堂聖歌隊の隊員ジョン・ゴスリング John

（1）“Purcell, Henry”, *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 20 (2001), p. 604-630. パーセルの出自についての様々な見解については、以下に詳しい。Francklin B. Zimmerman, *Henry Purcell, 1659-1695, His Life and Times* (Philadelphia,1983), p. 331-345.

（2）*Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripts, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W.H.Cummings, Mus. Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E. Sold by Order of the Executors* (London: Dryden Press, 1917). 大英図書館が所蔵するこのオークション目録（Hirsch 433）には、落札者と価格が手書きで書き込まれており、この書簡と証書（競売番号 171 番）には、「カミングス Cummings」と記入されていることから、買い手がつかなかったと考えられる。競売の方法や習慣については、ジョン・カーター『西洋書誌学入門』横山千晶訳 図書出版社 , 1994, p. 42-50 を参照。

（3）Jack A. Westrup, *Purcell* (London, 1937, r1965), p.306.（邦訳 : J. A. ウェストラップ『パーセル』松本ミサヲ訳 音楽之友社 , 1989, p. 440.）



London ye 8th of ffeb: 78

Sr

I have received ye favor of yours of ye 4th wth ye Indclosed for my Sonne Henry: I am sorry wee are like to be without you so long as yours mentions: but is very likely you may have a Summons to appeare amongst us sooner then you imagin: for my Sonne is composing: wherein you will be chiefly concerned However your oratorio and ye where you are must be considered and your conuenience euer complyde wth all: in ye meane time assure your self I shall be carefull of your concerns here by minding and refreshing our master memory of his gratious promis wheneuer there is occasion: my wife returns thanks for yr compliment wth her service: and prays yr Grace both our respects and humble seruices to Dr Belk and his Lady and beleeue euer that I am

Sr

your affectionatt and humble seruant

H Purcell

Dr Perce is in towne but I have not seen him since I have performd yr Compliments to Dr Blow wth Turner: et:

T faut: and Double Elamy are preparing for you

トーマス・パーセル「1678年2月8日付けジョン・ゴスリング宛書簡」書簡本文

Gostling（1650 頃～ 1733 年）に宛てたものである。当時、ゴスリングは、低音域に声域が広いバス歌手として知られ、同年 2 月 28 日付け[4]で王室礼拝堂のジェントルマンに任命されている。パーセルとも親交が深く、アンセム《彼らは海に船を出し *They that go down to the sea in ships*》（Z. 57）と《見よ、わたしは民全体に与えられる大きな喜びを *Behold I bring you glad tidings*》（Z. 2）は、ゴスリングのために書かれた作品とされる[5]。特に後者の作品では、書簡の「あなたのために Ffaut と Elami［の音が使われた曲］を準備しています」という追伸に一致する低音が使われている[6]。文中で言及された「私たちのご主人様」とは国王チャールズ 2 世のことであり、「後任［になること］」とは、同年 2 月 28 日に他界することになる、王室礼拝堂のジェントルマン、ウィリアム・タッカー William Tucker に代わってその職位に就くことを指していると考えられ、文脈からは、すでに国王からその許しが与えられていたと読み取れる。

ウェストラップは、追伸に見られる “Dr. Perce” を “Dr. Pierce”（ピアーズ博士）と解し、ソールズベリー教区の管区長でチャールズ 2 世の礼拝堂付き司祭であったトーマス・ピアーズ Thomas Pierce（1622 ～ 91 年）と同定し、また “Dr. Belk” を “Dr. Pelke” とみなし、カンタベリー大聖堂の聖職者であったトーマス・ペルク Thomas Pelke（1635 ～ 1712 年）としている[7]。“Dr. Blow” と “Will[am] Turner” については、それぞれ王室礼拝堂

（4）しばしば「1679 年 2 月 28 日」と記述されるが、カミングスによれば、これは当時の暦では 1678 年 2 月 28 日である。William H. Cummings, *Purcell* (London, 1881), p. 29.

（5）“Gostling, John”, *The New Grove Dictionary* 前掲書 , vol.10 (2001), p. 192. King, Robert, *Henry Purcell* (London, 1994), p. 112. 及び W. H. Cummings, 同上 , p. 30. ゴスリングのために書かれたパーセルの作品は、いずれも一般に用いられない低音域が使われており、《見よ、わたしは民全体に与えられる大きな喜びを》（Z. 2）では、《彼らは海に船を出し》（Z. 57）で使われた低音よりさらに低いれ音が現れる。

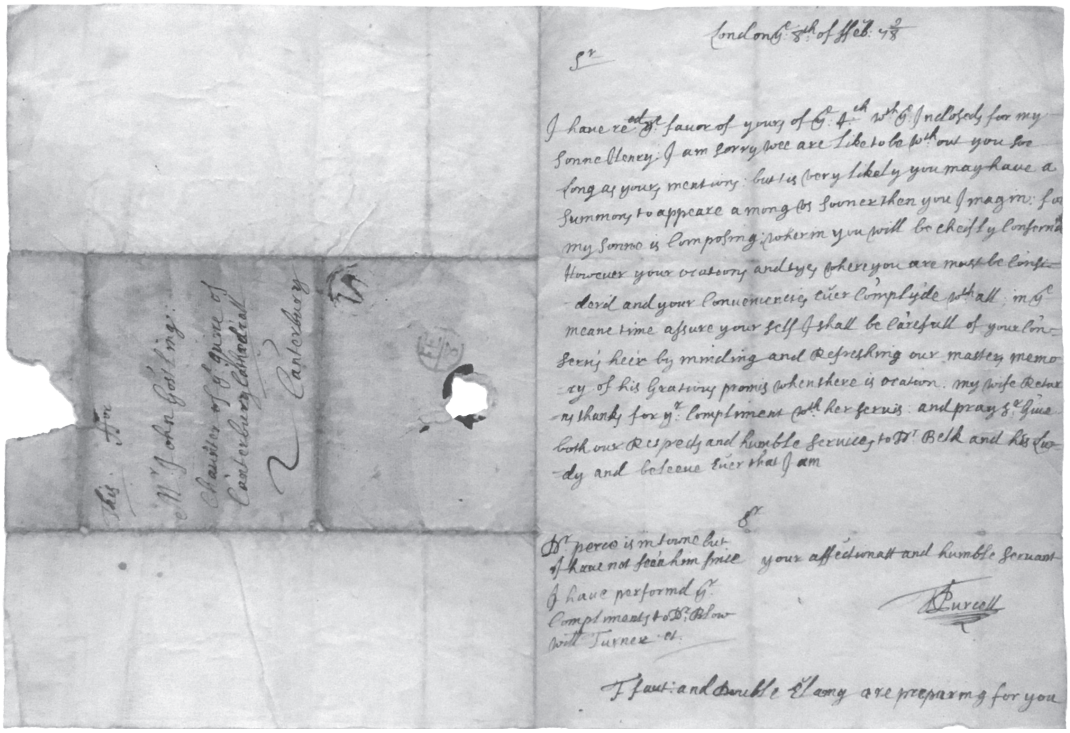
（6）Ffaut はヘ音、Elami はホ音のこと。

（7）Westrup, 前掲書 , p. 305, n. 2-3.（邦訳 ウェストラップ , 前掲書 , p. 438.）

のジェントルマンで、パーセルの師であったジョン・ブロウ John Blow（1649 ～ 1708 年）と、パーセルと親交のあったウィリアム・ターナー William Turner（1651 ～ 1740 年）のことであろう。

この書簡において最も注目されるのは、「私の息子ヘンリー to my sonne Henry」という記述である。ウェストラップは、この記述から素直にパーセルの父親をトーマス・パーセルと判断した[8]。根拠は、この記述の他に、パーセルが、上記のようにゴスリングのために書いた作品と声域が一致する作品を残しており、彼こそが「息子のヘンリー」に当ると考えられたからであった。

書簡と並んで重要な資料である権利委譲証書の記述を勘案したカミングスは、すでに 1881 年に著したパーセルの評伝において、今日の一般的見解と同じ推論を行った[9]。この証書が示すように、トーマス・パーセルは、彼に代わって彼の様々な権利を執行する代理人にマシュー・パーセル Mathew Purcell を指名した。この時、パーセルは存命中であり、立会人（証人）を務めたのは、その妻のフランシス Frances であった。なぜ、マシューよりも年上であったはずのパーセルが権利を委譲されなかったのであろうか。カミングスは、パーセルの父親と考えられるヘンリー・パーセルは、パーセルが 6 歳の時に他界しており、叔父（あるいは伯父）のトーマス・パーセルが音楽の才能を発揮しつつあった幼いパーセルを養子にしたのではないか、と推測したのである。実際に養子にしたか、証明する資料はないが、このように考えれば、書簡の「私の息子ヘンリー」と権利の移譲をマシューが受けた疑問は説明できることになる[10]。（佐々木勉）

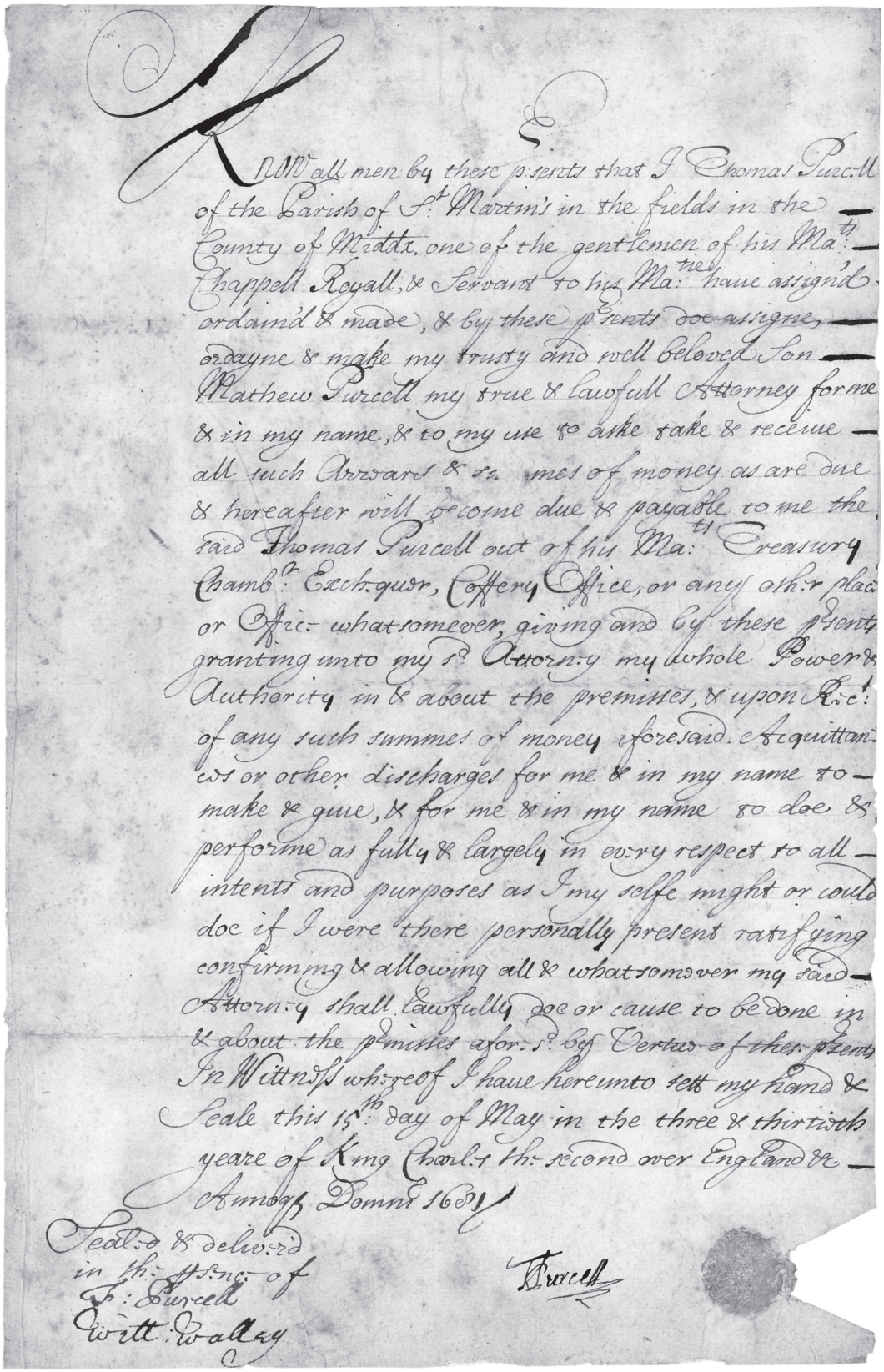


トーマス・パーセル「1678年2月8日付けジョン・ゴスリング宛書簡」（全体）

（8）Westrup, 前掲書 , p. 306.（邦訳 ウェストラップ , 前掲書 , p. 441.）

（9）Cummings, 前掲書 , p. 12-13.

（10）カミングスの没後、パーセルを「エリザベス・パーセルの子」と記述した、その洗礼時に教父を務めたジョン・ヒングストン John Hingston の遺言書（1683 年 12 月 12 日）が発見された。これによってカミングスの推論は、パーセルがトーマス・パーセルの養子になったのか確認はできないが、補強されることになった。ヒングストンの遺書については、Francklin B. Zimmerman, 前掲書 , p. 1 及び p. 345 及び Westrup, 前掲書 , p.306.（邦訳 ウェストラップ , 前掲書 , p. 441）を参照。



KNOW all men by these presents that I Thomas Purcell
of the Parish of St Martin's in the fields in the
County of Middx, one of the gentlemen of his Ma:ty
Chappell Royall, & Servant to his Ma:tie have assigned
ordained & made, & by these presents doe assigne,
ordayne & make my trusty and well beloved Son
Mathew Purcell my true & lawfull Attorney for me
& in my name, & to my use to aske take & receive
all such Arrears & summes of money as are due
& hereafter will become due & payable to me the
said Thomas Purcell out of his Ma:ty Treasury
Chamb: Exchequer, Coffery Office, or any other place
or Office whatsoever, giving and by these presents
granting unto my sd Attorney my whole Power &
Authority in & about the premisses, & upon Rec:t
of any such summes of money aforesaid, e & quittances
or other discharges for me & in my name to
make & give, & for me & in my name to doe &
performe as fully & largely in every respect to all
intents and purposes as I my selfe might or could
doe if I were there personally present ratifying
confirming & allowing all & whatsoever my said
Attorney shall lawfully doe or cause to be done in
& about the premisses afore:sd by Certificate of these presents
In Wittness whereof I have hereunto set my hand &
Seale this 15th day of May in the three & thirtieth
yeare of King Charles the second over England &c
Annoq Domni 1681

Sealed & delivered
in the presence of
F: Purcell
Witt: Walley

T Purcell

トーマス・パーセル「権利委譲証書」1681年5月15日

以下は、トーマス・パーセルによる書簡と権利委譲証書の原文とその全文の邦訳である[11]。

書簡

カンタベリー大聖堂聖歌隊の隊員、ジョン・ゴスリング氏宛
ロンドン、1678 年 2 月 8 日

拝啓
私の息子ヘンリー宛の言付けが同封された、4 日付のご厚情あふれるお手紙を拝読いたしました。あなたがおっしゃる通り、残念ながらあなたにお目にかかるのは、先のことになりそうです。しかしながら、あなたは、あなたが想像されている以上に早く、私たちのもとにお越しいただくための召喚状を受け取ることになるかもしれません。なぜなら、私の息子が、あなたが中心的に関わることになる［作品を］作曲しているからです。しかし、あなた［ご自身］のご事情やあなたが［今］いらっしゃるところとのしがらみも考慮しなければならず、あなたのご都合が何よりも大切です。話は変わりますが、あなたが気にされている、あなたが後任［になることに］ついて、機会あるごとに、私たちのご主人様にその慈悲深い約束を思い出し、心に留めていただくように注意を払いましょう。妻もあなたのご厚情に感謝申し上げております。恐れ入りますが、どうぞベルク博士と令夫人によろしくお伝えください。
敬具
私があなたに好意をもつ、忠実な召使いであることをお忘れなく。 ト［ーマス］・パーセル

パース博士は町にいっらしゃいますが、まだお会いしたことはありません。
ブロウ博士やウィリ［アム］・ターナー氏等には、よろしくとお伝えしてあります。
あなたのために Ffaut と Elami［の音が使われた曲］を準備しています。

This ffor Mr. John Gostling : Chaunter of ye quire of Canterbury Cathedral.
Canterbury
London ye 8th of ffeb. 9/78
Sr,
I have read ye fauor of yours of ye 4th wth ye incloseds for my sonne Henry : I am sorry wee are Like to be wthout you soe long as yours mentions : but 'tis very Likely you may have a summons to appeare among us sooner then you Imagin : for my sonne is composing : wherin you will be chiefly consern'd. However your ocasions and tyes where you are must be consider'd and your conueniences euer comply'de wthall : in ye mean time assure your self I shall be carefull of your consern's heir by minding and Refreshing our master's memory of his Gratious promis when there is occation. my wife Returns thanks for ye compliment wth her servis : and pray ye give both our respects and humble services to Dr. Belk and his Lady and beleeue euer that I am,
Sr,
your affectionatt and humble seruant,
T[homas]. Purcell
Dr Perce is in towne but I have not see'n him since.
I haue perform'd ye : compliments to Dr Blow, Will[iam] Turner, et.

F faut : and Double E lamy are preparing for you.

権利委譲証書

本証書により、ミドルセックス・カウンティのセント・マーティン・イン・ザ・フィールズ教会の教区に属し、王室礼拝堂のジェントルマンの一人であり、国王陛下の臣下である私、トーマス・パーセルは、私が信頼し、愛する息子、マシュー・パーセルを私のための、私の名による法律上の正当な代理人に指名し、任命したことを証する。そして本証書により、国王陛下の大蔵省、財務省、財源局、その他の省や局から上述のトーマス・パーセルに支払われるべき金銭や未払金、今後支払われるであろう、支払われるべき金銭をすべて、［マシュー・パーセルが］私のために請求し、受領し、取得することを証する。そして本証書により、上述の私の代理人に、土地家屋の内外に関する権限と権利、すでに述べた金銭の受領、債務の消滅や免責について私のために私の名において行い、私のために私の名において私自身が行うかもしれない、行うことができるであろう、すべての意図と目的のあらゆることがらについて、十分かつ広範囲にわたって行うための私のすべての権限と権利を与えることを証する。本証書の効力により、もし私が自らその場にいたとしたら、承認し、決定し、許可するであろうすべてのことがらについて、上述の私の代理人は、土地家屋の内外において法に従って行い、行わせることを証する。右の証拠として、ここに我が手を置き、封印する。イングランド王チャールズ 2 世の第 33 年、キリスト紀元 1681 年、5 月 15 日。ト［ーマス］・パーセル

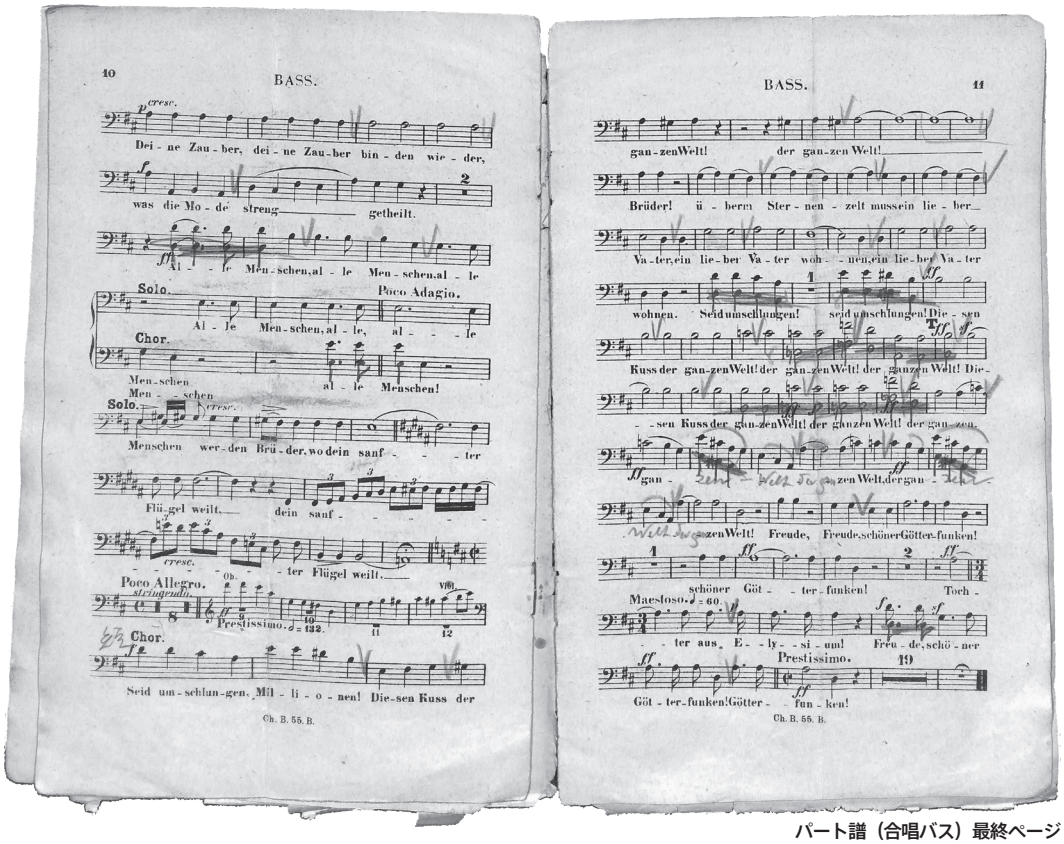
［フランシス］・パーセル、ウィット・ウォリーを立会人として封印し、引き渡す。

Know all men by these presents that I, Thomas Purcell, of the Parish of St. Martin's in the Fields, in the County of Middx., one of the gentlemen of his Mati Chappell Royall, & servant to his Matie, haue assign'd, ordain'd, & made, by these presents doe assigne, ordayne, and make my trusty and well beloved son, Mathew Purcell, my true & lawful Attorney for me & in my name, & to my use to aske, take, & receive all such arrears & s[um]mes of money as are due, & hereafter will become due & payable to me the said Thomas Purcell out of his Mats Treasury, Chambr Exchequer, Coffery office, or any other place or office whatsomever, giving, and by these presents granting unto my sd Attorney my whole Power &authority in & about the premisses, & upon Rect of any such summes of money aforesaid, Acquittance, or other discharges for me & in my name to make & give, & for me & in my name to doe & performe as fully & largely in every respect to all intents and purposes as I myself might or could doe if I were there personally present, ratifying, confirming, & allowing all & whatsomever my said Attorney shall lawfully do or cause to be done in & about the premisses aforesaid by Vertue of these presents. In witness whereof I have hereunto set my hand & seale, this 15th day of May in the three & thirtieth yeare of King Charles the Second over England, &c. Annoq. Domini 1681.

T. PURCELL.

Sealed & delivered
in the presence of F. PURCELL.
Witt. Walley

(11) ウェストラップ , 前掲書 , p. 441 に書簡の邦訳が、また南葵音楽文庫の収蔵資料が 1967 年に公開された際の展示目録（『特別展　南葵音楽文庫』読売新聞社 , 1967, p. 36）には、書簡と、一部省略されているが証書の邦訳が掲載されている。また両者の原文が Cummings, 前掲書 , p. 28 及び p. 34-35 に、また書簡の原文が Westrup, 前掲書 , p. 305 にある。



パート譜（合唱バス）最終ページ

ベートーヴェン　交響曲 第 9 番 ニ短調 作品 125 総譜・パート譜

然し、私は長い間、ベートーヴェンの最大の傑作といはれるこの第九交響曲をわが樂壇に於て演奏させてみたいものだと思つてゐた。近く自分が建設する南葵樂堂の開堂音樂會には出來ればこの希望を實現したいと考へて、具體的に研究もしたのであるが、その當時の上野の音樂學校の管絃樂では、とてもこの望みは不可能であると知つて殘念に思つてゐたのであつた。(1)

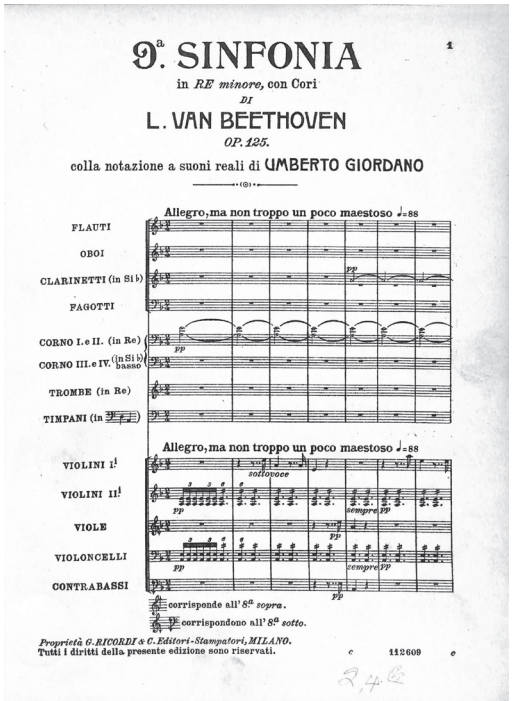
1918 年 6 月、徳島の板東俘虜収容所でベートーヴェンの交響曲第 9 番がドイツ人俘虜たちによって全曲初演された。徳川頼貞は 8 月に徳島に出向き、俘虜たちが演奏する「第九」の一部分を聴いている(2)。同じ年の 10 月 27 日、南葵楽堂開堂にあたっての「第九」演奏こそ断念したが、頼貞はこの作品に関連した楽譜や関連文献、また広くベートーヴェン文献蒐集への熱意を高め、1920 年にはベートーヴェン文献と作品リストを掲載した冊子を刊行(3)、「ベートーヴェン生誕百五十年紀念音楽会」というタイトルのもとにコンサートを主催もしている。

ベートーヴェン資料の蒐集は頼貞の音楽図書館事業の柱であったが、ここでは交響曲第 9 番の楽譜（総譜およびパート譜）の蒐集に絞って紹介してみよう。

リコルディ社版スタディ・スコア
9a. SINFONIA / in RE minore,con Cori / di / L. VAN BEETHOVEN / OP. 125. Milano, n. d. Pl. no. 112609. ii, 361p., 21cm.（収蔵番号 3D1.7/53）

「第九」を「具體的に研究もした」と記

（1）徳川頼貞『薔庭樂話』春陽堂 , 1943（昭和 18）, p. 97.
（2）前掲書 , p. 96-99 参照。
（3）*Works of Beethoven (Beethoveniana)* (Tokyo: Nanki Bunko,1920). 36p. 20cm.



リコルディ社版の冒頭ページ

している徳川頼貞が、最初に手にした総譜は、リコルディ社版の小型総譜であった。1917 年発行の南葵文庫所蔵楽譜目録によれば、すでにベートーヴェンの全交響曲の総譜が備えられ、そのうち第 6 番以降がリコルディ社版であった(4)。

リコルディ社版は、オペラ《アンドレア・シェニエ》で知られた作曲家ウンベルト・ジョルダーノが提唱した、すべてのパートをト音およびヘ音の譜表で記譜する方式を採用している。

総譜には、全体の演奏時間を想定するためかのような若干の書き込みがある。

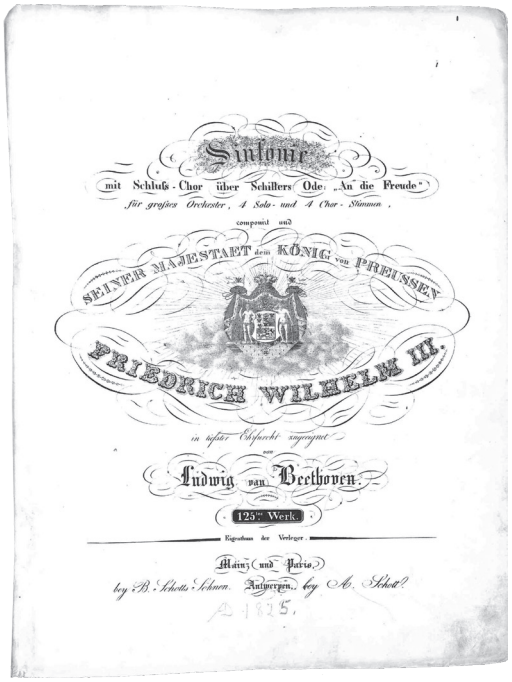
初版楽譜　ショット社 , [1826 年]
Sinfonie / mit Schlüss-Chor über Schillers Ode: "An die Freude" / für grosses Orchester, 4 Solo- und 4 Chor Stimmen, / componirt und / seiner Majestaet dem König von PREUSSEN / FRIEDRICH WILHELM III. / in tiefster Ehrfurcht zugeeignet / von / Ludwig van Beethoven. / 125tes. Werk. / Eigenthum der verleger. / Mainz und Paris. [1826].
226p. 34cm.（収蔵番号 N-4/23）

1917 年、徳川頼貞は、オークションは逃したものの留学時代の師ネイラーを通じて W. H. カミングスの遺族から故人のコレクションにあった多くの貴重な音楽資料を手に入れた。そのなかには、2 点の初版楽譜が含まれていた。

そのうち標記の初版楽譜には、メトロノーム記号が付されていない点で興味深い。交響曲は 1824 年 5 月 7 日にウィーンで初演、7 月にはマインツのショット社が出版を最終的に受諾した。翌 1825 年 1 月には印刷用原稿をショット社に送付している。同年、作品はロンドンやフランクフルト、アーヘンで演奏され、4 月に入るとショット社は初版の予約を募り始めている。作品の献呈先が決まらないため出版と予約募集の時期を延ばした。

1826 年 7 月 26 日、ベートーヴェンは、プロイセン国王から献呈を受けたとの連絡があるまで印刷を待つようにショット社に連絡した。その 3 日後には、メトロノーム記号を近日中に送るとも連絡している。

ところがショット社はその頃すでに印刷



初版楽譜のタイトルページ

(4) *Catalogue of the Nanki Music Library (Musical Scores), I* [Nanki Bunko, 1917], p. 3.

をおこない、同社の広報誌『ツェツィーリア』8月号に出版広告を掲載している。またライプツィッヒのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社には、同じ頃に印刷見本が届けられたという。ベートーヴェンのもとに初版が届いたのは9月15日であった。

同年10月にショット社にメトロノーム記号一覧が届くや、同社は12月の『ツェツィーリア』にリストを掲載した。

1827年になると、メトロノーム記号を補った初版増刷が世に出た。同年1月27日に、作曲者が初版のミスを指摘すると、ショット社は4月以降の増刷では誤りの一覧を付けて増刷を販売している。このやりとりの渦中である3月26日に、ベートーヴェンは他界した。

南葵音楽文庫が所蔵する初版総譜は、メトロノーム記号が加えられていない、初刷りである。印刷は凹版であり、試し刷りの段階かと思われる。ベートーヴェンはプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世に作品を献じる交渉を始めていたが、王の受領確認までは出版をしないようショット社に連絡し、献呈用の筆写楽譜完成と伝達は9月末になった。国王からの礼状はその2ヶ月後である。この経緯から、国王の確認を待たずにタイトルページもまた印刷されていたのであろう。

「第九」の出版は、《ミサ・ソレムニス》作品123、《献堂式》序曲 作品124とのセットによる予約出版であった。また総譜に加えパート譜、ヴォーカル・スコアが同時に出版されている。南葵音楽文庫所蔵本は、フロントカヴァーがなく、予約出版初刷りには挿入されていたはずの予約者リストは見当らない。これらの点も初刷り販売前の、試し刷りを思わせる。

いずれにしても、従来は初版楽譜とのみ目録に記載されていたこの総譜は、この高名な作品の印刷楽譜のなかで、もっと初期の形態をとどめている資料であると言えよう。

なお本資料は、2018年に装幀などの修復作業がおこなわれている。

カミングスの収集品に由来するもうひとつの総譜は、1827年以降に増刷された総譜であり、「メトロノーム記号つき。1855年3月25日、R. ヴァーグナーがロンドンのフィルハーモニック・ソサエティの演奏会で指揮に用いた」とされる(5)。しかしその後は行方がわからなくなり、1970年に刊行された『蔵書目録　貴重資料』には掲載されていない(6)。

自筆楽譜ファクシミリ版　1924年
Die Neunte Symphonie. [Die Faksimile Ausgabe der Originalhandschrift Beethovens in Originalgrösse. Im Besitz der Preussischen Staats-Bibliothek]. Leipzig, C. G. Röder, 1924. 401p. 39cm.（収蔵番号 N-7/6, N-7/7）

ファクシミリ版の外装

（5）［兼常清佐 , 辻荘一編］, *Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library* (Nanki Music Library, 1925), p. 28.
（6）大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）』東京音楽文化センター , 1970.

ベルリン州立図書館：プロイセン文化財団が所蔵、ユネスコ「世界の記憶」に登録されている自筆楽譜のファクシミリ版。本資料には出版情報が記されていない。また、解題等の冊子等の添付もみあたらない。そのため標記したタイトルは、『蔵書目録（貴重資料）』に拠っている(7)。

縦横とも 39 センチ、革装のハードカヴァー、2 分冊で共に帙に収められている、この重いファクシミリ版は、1924 年に製作されており、この交響曲初演から 100 年にあたる記念であることは、容易に推定できる。

今般の調査から、このファクシミリ版はライプツィヒのレーダー社 C. G. Röder GmbH が、同じライプツィヒにあるキストナー・ウント・ジーゲル社 Kistner & Siegel Verlag に協力し刊行された事実が判明した。

レーダー社は、兵役後ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社で楽譜彫版の見習いをしていたカール・ゴットリープ・レーダーが、楽譜印刷のため 1846 年に設立した。印刷速度の改善に取り組み、それが軌道にのっていた 1867 年 11 月 9 日、30 年以上前になくなった作曲家の作品を無制限に印刷出版可能とする法律が施行された。安価なペータース社版の印刷を引き受け、レーダー社は急成長、楽譜印刷以外の業務にものりだした。

第一次大戦前後にあっては、絵はがきの大流行を、写真を用いた印刷の技術と年間 5000 万枚の印刷量で支えていた。その一方で、ドイツ国内の楽譜出版社と協働し、楽譜の印刷を引き受け続けた。

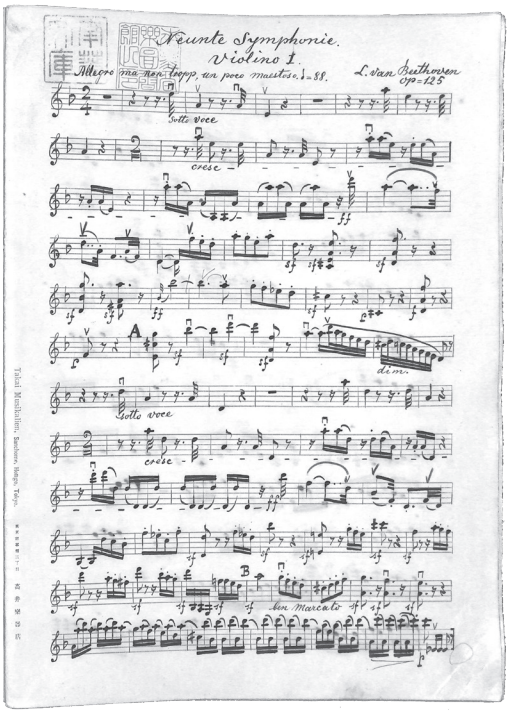
ライプツィヒで 1823 年に創業した楽譜出版社キストナー社は、シューマンやメンデルスゾーンの作品を出版してきたが、1919 年にライバルでもあるジーゲル社に買収された。創立 100 年にあたる 1923 年に合併し、キストナー・ウント・ジーゲル出版社が誕生した。

このファクシミリ版は、ドイツの音楽を多数出版してきた資産を継承した新しい有力な音楽出版社が、その新たな船出にあたって企画し、印刷と製本は楽譜印刷に通暁し、絵はがき印刷により写真の印刷技術でトップに立っていた会社が担当して完成された。

本資料は、日本国内はもとより欧米の主要図書館においても所蔵が確認できなかった。他方、ケルンの古書肆の目録を飾ったことがある。その記述によれば、表装は緑色のクロス装で、１巻本である。当時この種のファクシミリ版は最大でも 200 部程度作成されるにとどまり、大半は製作した企業が関係者に贈呈、一般販売は稀であったという(8)。

目録の記述は、1943 年のライプツィヒ爆撃によって失われた可能性を指摘してもいる。実際、レーダー社もキストナー・ウント・ジーゲル出版社も、壊滅的な被害を受けている。

あらためて南葵音楽文庫が所蔵するファクシミリ版を見れば、緑色のクロス装では



パート譜（第１ヴァイオリン）冒頭ページ

（7）前掲書 .

（8）Verlag IL Kunst, *Literatur & Antiquariat*, Köln.

なく茶色の革装で、堅牢な造本、２分冊などの異同があり、限定部数のファクシミリ出版のなかでも、さらに特装版として作成されたもののひとつであったと考えられよう。

南葵音楽図書館は、この稀少な、また貴重な資料を、どのような方法で入手したのであろうか。今回はそれを跡づけるまでには至らなかったが、ファクシミリ版完成後間もなく、特装版のひとつが徳川頼貞のもとに届いたことは間違いない。

遠藤宏の全訳並びに編注という形で1925（大正 14）年 12 月に刊行された G. グローヴ著『ベートーヴェンと彼の交響曲 I.-V.』の訳編者緒言には、「本書の譯出に際し、南葵音樂圖書館藏の貴重圖書、ベートーヴェンの交響曲原稿正寫版、及び第一版等を種々參考、利用し得たことに對し德川頼貞侯に厚く感謝し」とある(9)。この正寫版、すなわちファクシミリ版は、南葵音楽図書館に入るや直ちに、日本におけるベートーヴェン音楽啓蒙に貢献していたのである。

ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社版総譜とパート譜（旧全集版）

Ludwig van Beethoven's / Werke. / vollständige kritisch durchgesehene / überall berechtigte Ausgabe. / Mit Genehmigung aller Originalverleger. / Serie 9.

総譜　[1863]. Pl. no. B.9. 276p. 34cm.（収蔵番号 3A4.1/3）

パート譜　n. d. 33cm.

合唱パート譜　Breitkopf & Härtel Chorbibliothek. n. d. Pl. no. ch.b.55 b.

ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社版の総譜とパート譜は、1864 年に出版されるや最も広く使用されてきた楽譜であり、その地位は 1996 年にベーレンライター社の新全集のなかで新版が出るまで不動のものであった。南葵音楽文庫が所蔵しているのは、全集版の総譜、パート譜のセット、合唱のパート譜である。このうちオーケストラのパート譜は、不足分を国内で筆写し補充している。筆写は東京本郷の高井楽器店の五線紙を用いている。実際の演奏で使用しており、種々の書き込みや、なかにはそのパート譜を使用していた奏者の名前が記されている場合もある（前ページ図版）。

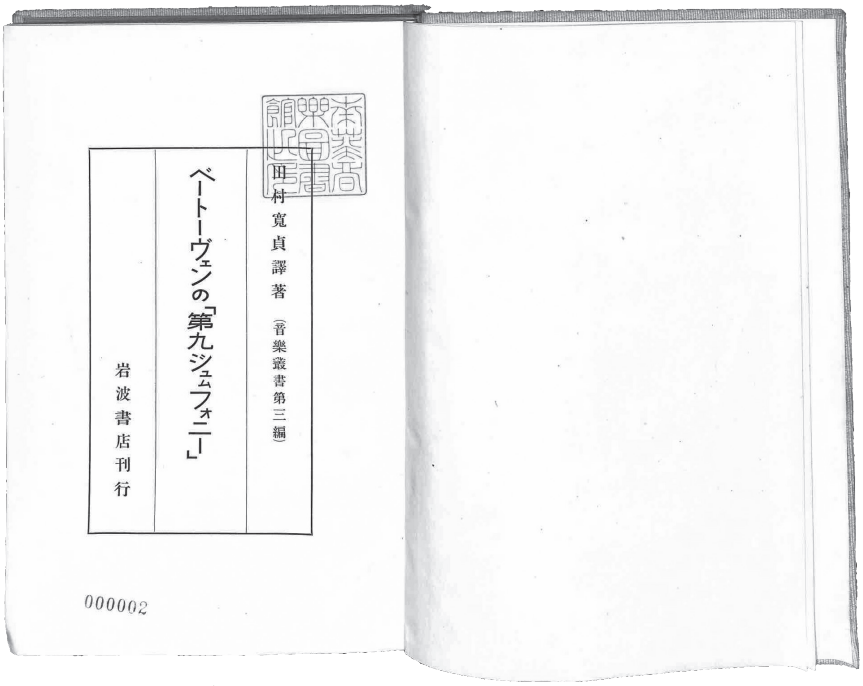
合唱のパート譜は、調査時には整理中であり、バス・パートのみを確認するにとどまった。バスのパート譜は 100 部用意され、その 3 割強が使用されたと思われる。なかには、多くの書き込みをおこなった例も見られ、指揮者の指示によると思われる変更が各パート譜に共通して認められる。ほかに各合唱団員による記載も少なくない（冒頭の図版）。

オーケストラと合唱のパート譜は、南葵音楽図書館の所蔵資料ではあるが、実際の演奏で用いられた。ではどの演奏会で使用されたのであろうか。

南葵音楽図書館は 1932 年 11 月末日に閉鎖、資料は慶應義塾図書館に寄託されることになった。それ以前の「第九」演奏は、ウィーン初演から 100 年にあたる 1924 年の 11 月 29、30 日、及び 12 月 6 日におこなわれた東京音楽学校による演奏（日本人による初演）をまずあげなくてはならない。ついで、作曲家の没後 100 年となる 1927 年以降は新交響楽団（NHK 交響楽団の前身）による演奏が続く。プロフェッショナルの楽団であれば、自前で楽譜を用意したであろう。南葵音楽文庫が所蔵している楽譜は、はたして日本人による初演で用いられたのであろうか。

東京音楽学校の教授であった田村貞寛は岩波書店から『ベートーヴェンの第九ジュムフォニー』を出版した。発行日は 1924 年 11 月 25 日、すなわち同校による「第九」初演の 4 日前である。その序言には次の

（9）ヂヨーヂ・グローヴ『ベートーヴェンと彼の交響曲 I.-V.』遠藤宏訳 , 編注 岩波書店 , 1925（大正 14）, p. 10.



田村寛貞訳著『ベートーヴェンの「第九ジュムフォニー」』タイトルページ

一節がある。

> 『第九ジュムフォニー』が今年今月我樂壇の中心上野に演奏されるに就いては、徳川頼貞氏の大正八年以来の熱心なる希望及び多大の援助と、指揮者クローン教授の非常なる努力に負う所が決して少なくない。此處に本書の發刊に當って特に其名を掲げて、感謝の意とする次第である。(10)

日本人による「第九」初演

演奏に用いるマテリアル、とくに楽譜を徳川頼貞は用意し、提供した。南葵楽堂のこけら落としに実現できなかった頼貞の夢は、その翌年にあたる1919（大正8）年に始まり、関東大震災をまたぎ、5年後に実現した。単なる資料蒐集と公開にとどまらない頼貞の熱意ある音楽図書館活動の賜物であった。

頼貞自身は、みずからの努力についていっさい語らないし、書き残してもいない。しかし関係者の謝辞のいくつかが、そして何よりも南葵音楽文庫に残されている資料が物語っている。徳川頼貞こそ、日本における「第九」、その演奏と研究を起動させた人物であることを。　（美山良夫）

(10) 田村寛貞訳著『ベートーヴェンの「第九ジュムフォニー」』岩波書店, 1924（大正13）, p. ii.

ベートーヴェン《月光ソナタ》日本版初版
―楽譜刊行の顛末―

南葵文庫の蔵書に日本で最初に刊行されたベートーヴェン《ピアノソナタ第 14 番嬰ハ短調　作品 27-2（月光）》の楽譜がある。

月光
楽聖ベエトウヱン作　音樂社學術部編
音樂社出版部, 明治42年8月10日刊
楽譜20, 解説8p., 図版(3), 32 cm.
定価　説明附35銭, 曲譜のみ30銭
(収蔵番号 3E1.3/23)

徳川頼貞は学習院中等学科に通っていたある日の夜、中島力造（1858 ～ 1918 年。東京帝大倫理学教授）に連れられて、ラファエル・フォン・ケーベル Raphael von Koeber（1848 ～ 1923 年）を訪れたことがある。ケーベルは当時、東京帝大で哲学を講ずるとともに東京音楽学校でピアノと音楽史を教えていた。ケーベルは少年頼貞のために《月光》を弾いた。全曲の演奏のあと、要所々々を丁寧に解説しながら繰り返し楽節を弾いてみせるケーベル博士に頼貞は深い感動を覚えたようである。

> 私は慈父にでも接したような思ひであつた。夜もおそくなって心を残してお暇を告げたが、博士を想ふと今日もなほあの温和な面影が目に浮んでくる。
> （徳川頼貞『薈庭樂話』より）（1）

ケーベルは 1902（明治 35）年 5 月 6 日の東京音楽学校演奏会で《月光》を演奏している（プログラムの曲目名「ムーンライト、ソナタ」）。《月光》の演奏記録は多く、東京音楽学校だけでも 1896（明治 29）年 4 月、1898（明治 31）年 1 月（いずれも遠山甲子（きね）演奏）が挙げられるが、ケーベルの演奏は「皇后行啓演奏会」だったから皇后のリクエストによったものでもあったろうか。

《月光》は明治期においてもっとも有名なピアノ曲といってよく、作品にまつわる挿話を中心に明治 30 年代から音楽雑誌で盛んに紹介された。その紹介のされ方は《月光》の作者はベートーヴェン、という逆転現象を印象づける。

楽譜『月光』の出版

1907（明治 40）年に楽譜が登場、雑誌『音樂』（楽友社）の綴込み附録として 5 回にわたって掲載され（12 巻 3 号、4 号、6 号、13 巻 1 号、2 号（明治 40 年 3 月 ～ 12 月））、2 年後の 1909（明治 42）年 8 月に『音樂』掲載譜をまとめた形で全曲が大判の楽譜（菊倍判）で出版された（音楽社）。

雑誌掲載時の楽譜の製作は必ずしも順調とはいえなかったようで、12 巻 3 号に第 1 楽章、4 号に第 2 楽章と第 3 楽章第 37 小節までを掲載したあと、6 号と 13 巻 1 号に第 3 楽章の第 38 小節～第 89 小節の譜が重複して掲載され、13 巻 2 号（明治 40 年 12 月）で完結している。

（1）徳川頼貞『薈庭樂話』春陽堂 , 1943.3, p. 12.

『音樂』13巻2号（1907.12）表紙（水島爾保布装画）

雑誌『音樂』（1901 年創刊）はこの年、競合誌『音樂新報』（1904 年創刊）との合併話が進行しており、秋の段階で翌年1908（明治41）年2月より新たに『音樂界』としてスタートすることが決定、両誌とも当年 11 月号を以て揃って終刊することになっていた。しかし、《月光》が完結しなかったため、『音樂』だけが急遽 12 月号を刊行した（「本誌發刊につきて読者諸君へ」）。この 12 月号は、雑誌本体は残されているものの表紙に大々的に謳われている「大附錄月光の曲全部［略］完結す」の楽譜の綴込み附録は散逸しており、残念ながら確認することができない。

音楽社版『月光』は、『音樂』掲載譜の版下をそのまま用いて（楽譜頁冒頭のタイトル部分の誤記や写譜上の誤解[2]も含めて）楽友社の後継団体である音楽社より刊行された。音楽社は『音樂界』の発行元（創刊時には「楽界社」として発足した）。

解説の著者は記されていないが、乙骨（おっこつ）三郎（1881 ～ 1934 年。東京音楽学校教授、唱歌の作詞でも知られる。『音楽』の編集陣のひとり）である。

乙骨は、『音樂』11 巻 2 号（明治 39 年 12 月）と 4 号（明治 40 年 2 月）の 2 回にわたって伝記「ベエトオヴェン」を、作品解説「名作月光の曲（ムンライトソナアタ）」を 11 巻 2 号に執筆している。音楽社版『月光』にはその文章がそのまま、理由は不明ながら無記名で掲載された。解説 8 頁は別売だったようで、奥付の定価に「説明附 35 銭　曲譜のみ 30 銭」とある。

解説収録の図版 3 点――「樂聖ベエトホヴエン 青年時代」「壯年時代」「ムンライト . ソナァタ作曲中のベエトホヴエン」――も『音樂』11 巻 2 号の口絵が転用されている。同誌の目次によれば、最初の 2 点は島崎藤村、3 点目は鈴木乃婦子（声楽家。東京音楽学校卒）から寄贈されたものだった。

南葵文庫所蔵本は表紙に頼貞のペン書きのサイン *"Raitei"* があり、南葵文庫蔵書印とともに、頼貞が飯倉本邸に隣接した邸宅で弟・治と起居を共にしていた頃の印「Gazenbocho ／ Tokugawa」（我善坊町／徳川）が捺されている。文庫蔵書本として美しく製本されているが、その際に誤ったとみえ、解説部分に乱丁がある。

音楽社版『月光』はその後、1914（大正 3）年に同社の楽譜定期刊行物「月刊西欧名曲」の増刊本として再版され、1921（大正 10）までに 6 版を重ねた[3]。

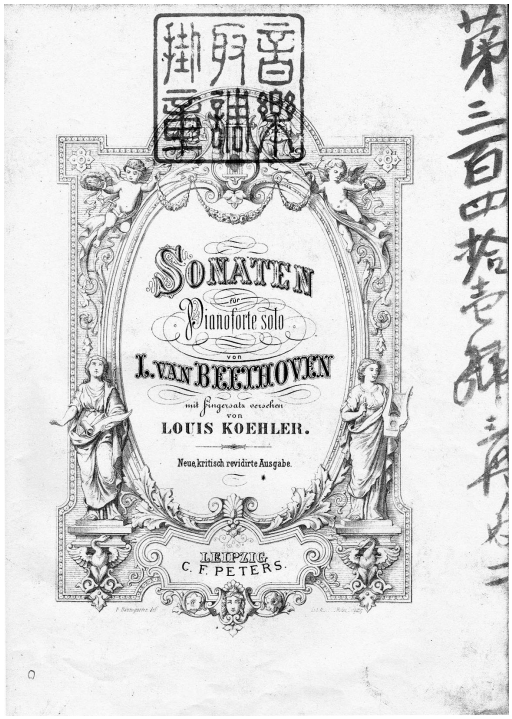
なお明治 42 年版（初版）の所在は、南葵文庫蔵書のほかに国立国会図書館所蔵の 1 部が確認されている。

（2）大城了子氏は、第 3 楽章第 2 小節のスフォルツァンドの位置の解釈に誤解があることを指摘している。大城了子「明治期の楽譜受容――ベートーヴェンのピアノ作品を中心に」『ムーサ　沖縄県立芸術大学音楽学部音楽学専攻紀要』9 号（2008.3）, p. 71-85.

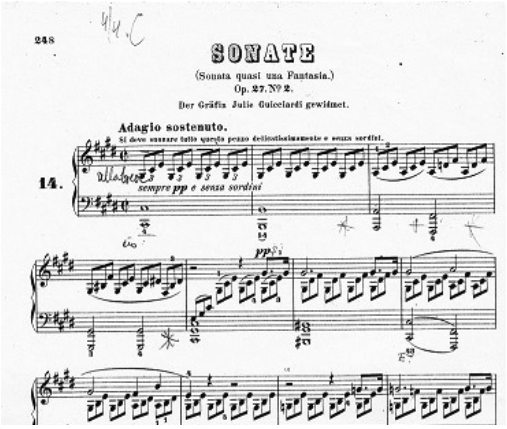
（3）長谷川由美子「日本におけるベートーヴェンの楽譜出版――ベートーヴェン受容史の一側面」国立音楽大学『音楽研究所年報』18 号（2004.3), p. 191-219. 重版の所蔵は、北海道教育大学附属図書館（再版 1914 年）、国立音楽大学附属属図書館（6 版 1921 年）が確認されている。

『月光』の底本

雑誌『音樂』および音楽社版『月光』の底本とされたエディションは、1880 年代にルイス・ケーラー Louis Köhler（1820 ～ 1886 年）校訂によりライプツィヒのペータース社から刊行されたベートーヴェン・ピアノソナタ集第 2 巻収録の楽譜である。



東京藝術大学附属図書館蔵（請求記号 C22/B415-4/E2）
▲表紙　▼楽譜第 1 ページ冒頭



Sonaten für Pianoforte solo / von L. van Beethoven ; mit Fingersatz versehen von Louis Koehler. Leipzig : C.F. Peters, [188_][(4)] Edition Peters 6186. “Neue, kritisch revidirte Ausgabe”

この曲集には、実は同じエディション番号で刊行された異版がある。校訂者にリヒャルト・シュミット Richard Schmidt が加わっているものでほぼ同時期に刊行されている。譜面は同じ（楽譜第 1 ページのタイトル部分も含めて）だが、運指法がより詳細に記され、ベートーヴェンの肖像が口絵に加わっているものだ。

Sonaten für Pianoforte solo / von L. van Beethoven ; herausgegeben von Louis Köhler und Rich. Schmidt. Leipzig : C.F. Peters, [ca.1879][(5)] Edition Peters 6186. “Neu, revidirte Ausgabe”.

双方とも東京藝術大学附属図書館蔵書にあり、前者（図版左）は表紙に捺された蔵書印「音樂取調掛章」から音楽取調掛が東京音楽学校に改組される以前、つまり 1887（明治 20）年以前に購入されたものであることは明らかである。後者（請求記号 C22/B415-4/B1c）は東京音楽学校に改組されたあと、1908（明治 41）年 8 月に受入れられた[(6)]。

この 2 種の楽譜と音楽社版を比較してみると、冒頭のタイトル部分のレイアウトが酷似していること（後述）、強弱記号がまったく同じであること、また音楽社版では運指法が冒頭低音部のみ部分的に記されているが、それがケーラー版と同じであること、が共通点として挙げられる。ケーラー

（4）アメリカ議会図書館 Library of Congress の典拠ファイル (control no. 84221269) の記述による。
（5）フランス国立図書館 Bibliothèque nationale de France 典拠ファイル（BNF/14776102）の記述による。
（6）東京藝術大学「東京音楽学校所蔵楽譜」https://www.geidai.ac.jp/labs/musicology/ongakugakkou.html（参照 2018-7-30）、及び関根和江「音楽取調掛から東京音楽学校へ――2 つの楽譜原簿から見る資料の継承」『東京音楽学校の諸活動を通して見る日本近代音楽文化の成立――東アジアの視点を交えて』東京藝術大学音楽学部 , 2013.3（平成 20 ～ 23 年度科学研究費補助金基礎研究（B）研究成果報告書）.

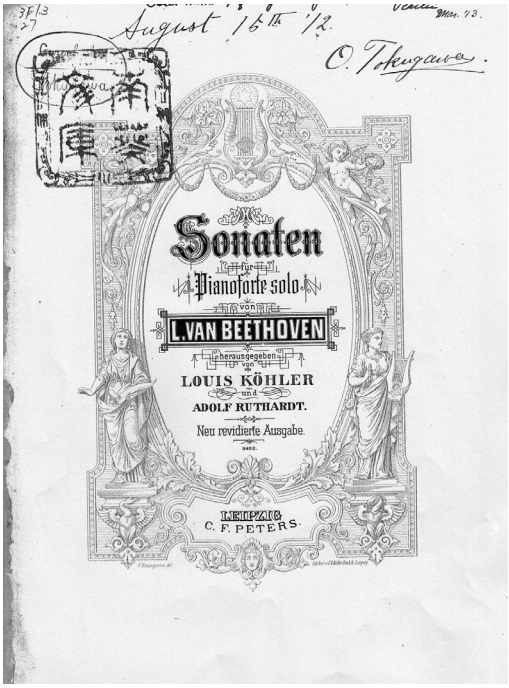
版２種の相違は運指法にあるので、音楽社版に運指の指示がもう少し記載されていればどちらかが判定できる筈なのだが、この限りでは難しい。底本とした楽譜が東京音楽学校蔵書であれば前者だが、必ずしもそうとも言えないし、編集部としては２つの版を調査した上で運指法を採用しなかったかもしれないのだから。残念ながら、エディション番号 6186 のうちのいずれか以上には分らないが、運指以外の譜面は共通しているので、これ以上の追求は断念してもよいだろう。

音楽社版の冒頭頁タイトル部分には標題に日本語を配するなど工夫が見られるが、転記の際に誤って記した箇所もみられる。前述のようにこの誤記は『音樂』時代からのもので、そのまま踏襲されていた。

【ケーラー（ペーター）版】
SONATE /（Sonata quasi una Fantasia.）/ Op. 27, No. 2 / Der Gräfin Julie Guicciardi gewidmet.

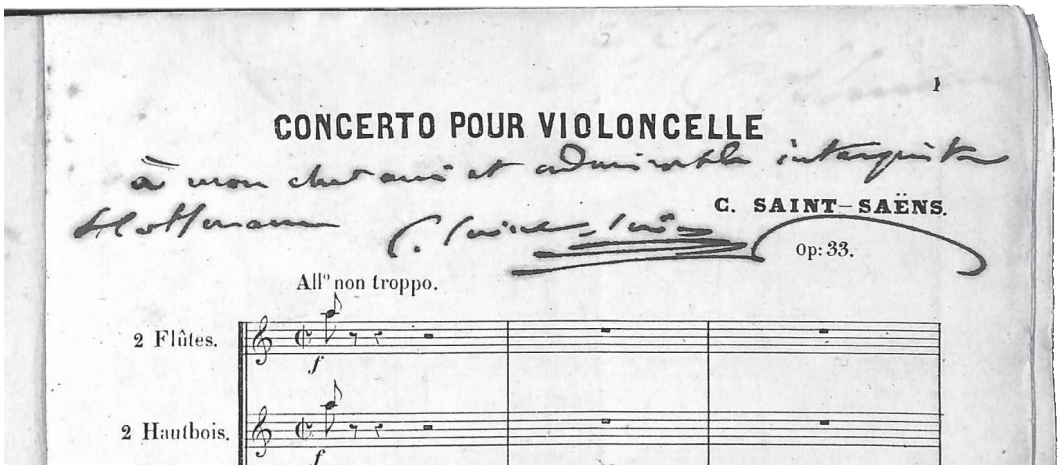
【音楽社版】
月光 / SONATE / MOON LIGHT /（Sonata quasi und[sic] Fantasia）/ Op. 27, No. 2 / Der gräfin Julie Gaicciardi[sic] gewid[sic] met.

なお、南葵文庫時代を含めた南葵音楽図書館蔵書には、音楽社版『月光』のほかに、ケーラー没後、アドルフ・ルートハルト Adolf Ruthardt（1849 ～ 1934 年）が手を加えたペーター版のピアノソナタ集（1910 年刊）が２部ある。ひとつは頼貞が所蔵していたもので自署と入手の日付 *"Raitei / Mar '13"* がある。他の１冊は弟・治の蔵書（図版右）で、表紙に彼のサインと日付 *"August 15th '12 / O. Tokugawa"* および翌年、治が落馬事故で急逝した直後に頼貞が書入れた *"Sweet memory of my dear younger brother / Raitei / mar. '13"* がみられる（製本時に初行上半分断裁）。



Sonaten für Pianoforte solo / von L. van Beethoven; herausgegeben von Louis Köhler und Adolf Ruthardt. Leipzig: C.F. Peters, [1910] Edition Peters 9427. "Neu, revidirte Ausgabe".
(収蔵番号 3E1.3/27)

（林淑姫）



作曲者サン＝サーンスの献辞（初版スコアの最初のページ）

サン＝サーンス　チェロ協奏曲［第１番］作品 33

Saint-Saëns, Camille. *Concerto pour Violoncelle*, op.33. Paris: Durand, 1874. 1score, 72p. 27cm + 32parts. 34cm.（収蔵番号 3K4.1/9）

徳川頼貞は、チェリスト、ジョゼフ・ホルマン（1852 ～ 1926年）のすすめで、パリ滞在中の1921年5月サン＝サーンス宅を訪問した。「それから翁は言葉を續けて、自分は前から一度日本に行つて見たいと思つてゐた。けれど、もう歳が歳だし、身體も弱くなつたので行かれさうもない。――翁はその時大病から漸く癒つたばかりであつた。――然し自分の親友であるこの――と云つてホルマン翁を指さして、『ホルマン君などは是非日本を訪ねるべきである』と言つた。そして今度はホルマン翁に、『是非貴君は僕の代りに行つてくれ給へ』と云つた。後日、ホルマン翁が日本へ來ることになつたのも、この時の話がそもそもの動機なのである。」(1)

オランダ生まれのチェリスト、ホルマンは、世界各地を演奏旅行の後1916年パリに定住した。多くの作曲家から作品の献呈をうけ、親友サン＝サーンスはチェロ協奏曲第２番、《ミューズと詩人》を捧げている。1923年頼貞の招きで来日。1926年12月31日(翌年1月1日とする記載もある)パリで没し、残された楽譜1000点余は頼貞が受け入れ、1928年ごろ到着した。

南葵音楽文庫が所蔵するホルマン文庫は、その資料すべてが楽譜である。1970年頃いったん整理され、堅牢なカヴァーに挟み込まれている。また、パート譜は、スコアがあればそれとともに、袋にいれられ保管されてきた。同時期にタイプ打ちで簡単なリストが作成されてもいる。

ホルマン文庫の内容では、作曲家がホルマンに献呈した作品の自筆楽譜、署名付き印刷楽譜、初演のための試し刷り楽譜がまず注目される。また、ホルマンが自らの演奏のために筆写（一部改訂）した有名なチェロ曲、その自筆スコア、自筆パート譜のセット（例：ブルッフ《コル・ニドライ》）、自身の演奏のために書き込みをした印刷楽譜、伴奏者のために用意し頻用されたピアノ譜、徳川侯爵に献じた作品の印刷楽譜、自作のチェロ作品の自筆楽譜（未出版含む）や印刷楽譜、自作の歌曲、未完成作品の草稿が含まれている。

親しいばかりでなく、共演者としても活動したサン＝サーンスの作品は、ホルマン文庫のなかでも、とりわけ興味深い。なぜなら、作曲者がホルマンに献呈した作品、作曲者がピアニストとしてホルマンとともに演奏した作品が含まれるからである。さらにホルマン来日公演で演奏に供されたサン＝サーンス作品の楽譜も、この文庫のなかに遺されている。

（1）徳川頼貞『薔庭樂話』春陽堂 , 1943（昭和 18）, p. 196.

1872年11月に作曲されたチェロ協奏曲の楽譜は、1873年から翌年にかけて出版された。現在3K4.1/9として収蔵されている内容は以下である。

① オーケストラ·スコア　72ページ（プレート番号1746）1874年10月
② オーケストラ・パート譜　（プレート番号2034）1874年11月

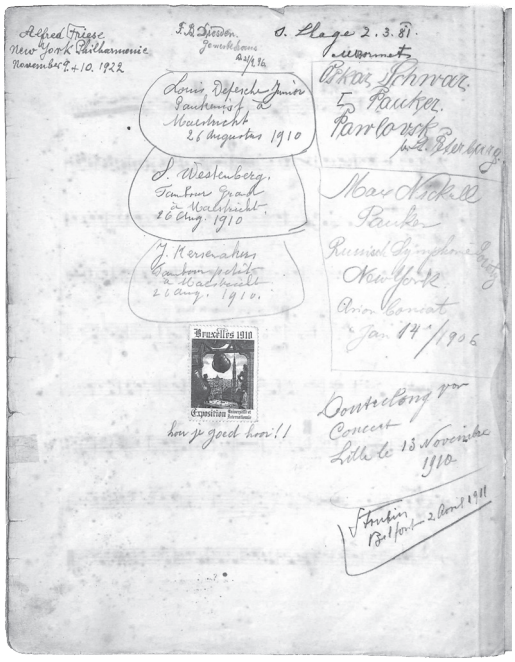
ここには、1873年に出版されたピアノ·スコア（プレート番号2034）は含まれていない。残されている楽譜には頻繁に使用された跡がある。①のタイトル·ページは、このスコアが初版のなかでも初期の刷りであることを示している。同じプレート番号でも、後の版ではタイトル・ページの記載が簡素になっている。このページにはホルマンの署名が残されている。楽譜の最初のページには作曲者サン＝サーンスによる自筆献辞が記されている。

スコア中には、使用した指揮者によると思われる青鉛筆による書き込みが散見される。

『サン＝サーンス：主題作品目録』(2)には、ホルマンが1882年4月21日に作曲者自身のピアノでこの協奏曲を演奏したと記されている。サン＝サーンスは楽譜出版者ジャック·デュランにあてた書簡（1909年12月3日）のなかで、「ホルマンはイギリスで私の第1番の協奏曲を3回演奏、ブリュッセルで第2番を演奏する。外国人が私の作品にとても献身的なのに、フランス音楽の演奏会を企画するフランス人たちは、これらの作品を無視しているかのようだ」と書いている(3)。

サン＝サーンスの発言は、ラムルーやコロンヌといった管弦楽団がパリでこの協奏曲をとりあげている事実からすれば必ずしも正鵠をえているとはいえない。

南葵音楽文庫に残されているスコアとパート譜は、ホルマンと、彼が愛奏した楽器とともに世界を旅した。パート譜にはホルマンとともに演奏したオーケストラ楽員が多数のサインを、しばしば日付つきで残している。いくつかを、楽員名ぬきで拾い読みしてみよう。

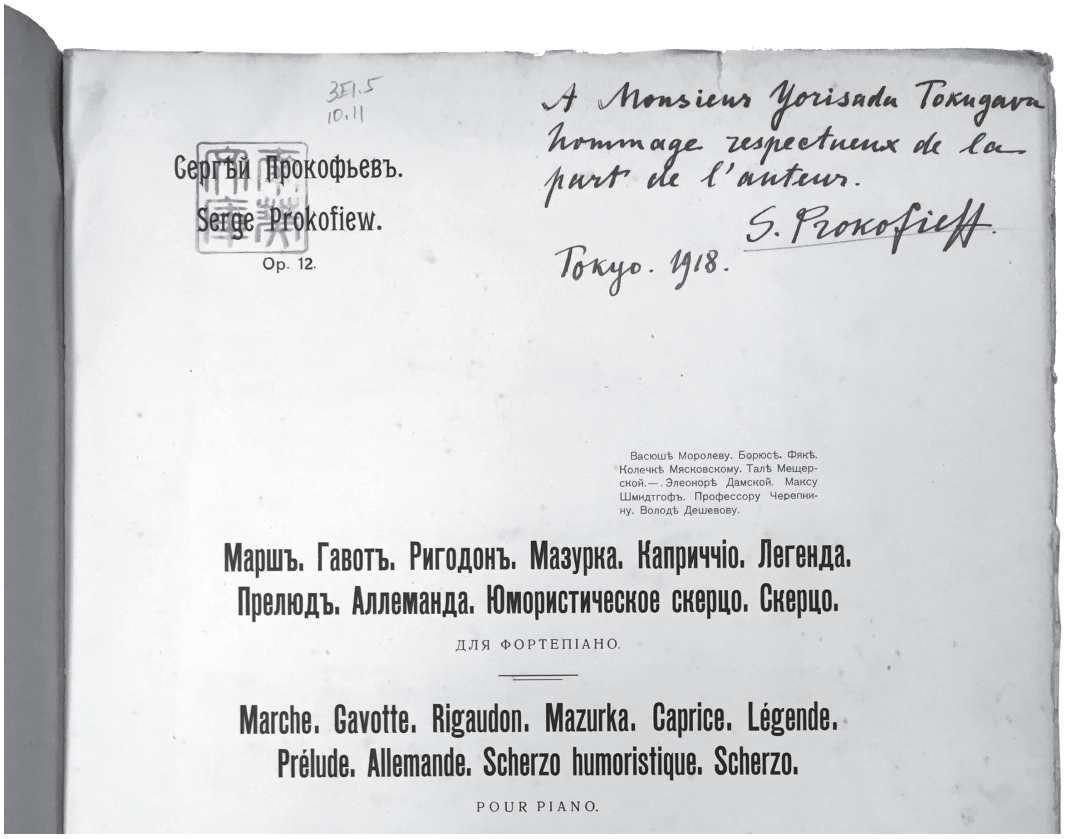


ティンパニのパート譜カヴァー裏に書き込まれたサイン

1881.3.2.　デン・ハーグ
1882.8.26.　スパ（ベルギー）
1883.1.27.　ブリュッセル
1894.6.1-3.　レーワルデン（オランダ）
1899.2.18.　リヨン
1899.6.5.　アーネム（オランダ）
1899.11.　モスクワ
1906.1.14.　ニューヨーク
1909.4.29.　サン・セバスティアン
1911.4.2.　ベルファスト（北アイルランド）
1911.3.3.　ニース
1922.11.9-10.　ニューヨーク・フィル

ニューヨークから日本へと巡る彼の最後の演奏旅行でも、この楽譜はホルマンとともにあった。そして、その最後の演奏の場こそ南葵楽堂であった。その日は1923年4月28日。頼貞がホルマンの案内でパリにサン＝サーンスを訪ねてから、2年を迎えようとしていた。　（美山良夫）

(2) Ratner, Sabina Teller, *Camille Saint-Saëns 1835-1921: A Thematic Catalogue of His Complete Works,* vol. 1, *The Instrumental Works* (Oxford: Oxford University Press, 2002).
(3) 前掲書 , p.364.



プロコフィエフ《スケルツォ》作品 12-10

Prokofiev, Sergei. *Scherzo*, from *Ten Pieces for Piano*, op. 12-10. Moscow: P. Jurgenson, n. d. [1914]. Pl. no. 37331. [8p.]. 35cm.（収蔵番号 3E1.5/10.11）

南葵楽堂が開堂した1918（大正7）年は、第一次世界大戦とロシア革命の動乱を逃れて、多くの外国人音楽家が来日した年だった。なかでもロシア人音楽家は多く、彼らが日本の音楽界に大きな刺激を与えたことは数々指摘されてきた(1)。徳川頼貞も随想集『薈庭樂話』において、「亡命樂人の群」という節を設けてこのことを述べている(2)。私的な音楽体験を綴った『薈庭樂話』において、このような歴史的背景の記述は珍しい。頼貞にとっても印象深い出来事だったに違いない。

この年に来日したロシア人音楽家の一人に、セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953年）がいた。プロコフィエフは革命のさなかも音楽活動を続けていたが、混乱状況のロシアで生活に困難を感じるようになると外国生活を決意。日本経由で南米への渡航を計画して、1918年5月31日に日本の地を踏んだ。ところが彼が日本に着いたとき、彼が目指していた南米行きの船はすでに出港してしまっており、彼は次の船が出るまでの約2か月間を日本で過ごすこととなった。7月6、7、9日には東京と横浜で自作自演を含むピアノ・リサイタルを行い、日本の聴衆にその腕前を披露している。

プロコフィエフの日本滞在については、彼の生前に出版された自伝においては、わずかな記述しかなかったが(3)、2002年

（1）たとえば下記を参照。園部三郎『音樂五十年』時事通信社 , 1950.11, p. 119-120. 野村光一 , 中島健蔵 , 三善清達『日本洋楽外史――日本楽壇長老による体験的洋楽の歴史』ラジオ技術社 , 1978.7, p. 79-80.

（2）徳川頼貞『薈庭樂話』徳川頼貞刊 , 1941（昭和 16）.11, p. 168-170. 併せて p. 107 も参照。

（3）セルゲイ・プロコフィエフ『プロコフィエフ自伝／随想集』田代薫訳 音楽之友社 , 2010.10, p. 81. 原書 Moscow: Sovetskii Kompozitor, 1973.

に遺族の手で公刊されたプロコフィエフの日記により、日本での動静と彼の心の内が克明に分かるようになった(4)。日本滞在中の日記のなかに、彼は日本の音楽関係者の名前を二人書き残している。一人はプロコフィエフの来日直前に刊行した著書『續バッハよりシェーンベルヒ』で日本に初めてプロコフィエフを紹介した音楽評論家、大田黒元雄(5)。もう一人が徳川頼貞である。

1918年7月12日、プロコフィエフはロシア大使館一等書記官ベール男爵と一緒に、東京芝白金三光町にあった徳川頼貞の私邸を訪問して昼食をともにした(6)。現在、南葵音楽文庫に収蔵されているプロコフィエフの《スケルツォ》(《10の小品》作品12第10曲)の楽譜は、このときプロコフィエフから頼貞に贈られたものである。扉の右上には次の献辞がある。

A Monsieur Yorisada Tokugava[sic]
Hommage respectuex de la
part de l'auteur.
S. Prokofieff
Tokyo. 1918.

扉には《10の小品》作品12全曲の題名が記載されているが、中身は第10曲《スケルツォ》のみを収録した抜き刷りである。おそらくプロコフィエフが贈答用に用意していた楽譜であろう。使用感はない。

プロコフィエフはこの《スケルツォ》を、徳川頼貞との面会に先立つ5日前、東京帝国劇場での2日目のリサイタルのなかで演奏していた。またこの年、渡米した後も、11月20日のニューヨーク・デビュー・リサイタルのプログラムに、彼はこの曲を組み込んでいる。当時の彼にとってこの曲は、いわば名刺代わりの作品の1つだったのであろう。プロコフィエフの自伝においては、この時期の創作の傾向が5つの路線――「古典的」「近代的」「トッカータ/モーター」「抒情的」「グロテスク/スケルツォ風」――に分類されているが、そのなかで反復的で機械的なリズムを特色とする「トッカータ/モーター」路線の一例に、この《スケルツォ》は挙がっている。同時に、気まぐれや笑い、からかいの性格をもつ「グロテスク/スケルツォ風」路線との関連も、曲名から明らかである(7)。

徳川頼貞邸でプロコフィエフは、スクリャービン、ストラヴィンスキー、ドビュッシーなどの近代音楽をピアノで弾いて聴かせたという。プロコフィエフの手によるこの《スケルツォ》もこのとき一緒に演奏されたかどうかは、不明である。だが歓談を通して頼貞はプロコフィエフを優れた作曲家と認識し、その後、日本滞在の記念として自分のためにピアノ・ソナタを書いてもらえないかと依頼した(8)。この依頼は結局果たされぬままに、プロコフィエフは日本を発つこととなったが、頼貞は《スケルツォ》の楽譜を手に、プロコフィエフの新作に期待を寄せていたことだろう。1920年に編纂された楽譜目録によれば、この《スケルツォ》は当時の南葵文庫が所蔵する唯一のプロコフィエフ資料であった(9)。

(篠田大基)

(4)プロコフィエフ「プロコフィエフ　日本滞在日記」『プロコフィエフ短編集』サブリナ・エレオノーラ, 豊田菜穂子訳 群像社, 2009.8, p. 165-209. 原書 Paris: sprkfv, 2002.

(5)大田黒元雄(1893～1979年)は日本における音楽評論の草分けとして知られる評論家。『續バッハよりシェーンベルヒ』(音楽と文学社, 1918(大正7).4)において日本に初めてプロコフィエフを紹介し、日本滞在中のプロコフィエフにインタビューを行った。その内容は「プロコフィエフの印象」(『水の上の音樂』所収, 音楽と文学社, 1919(大正8).10), p. 105-159)などにまとめられている。

(6)徳川『薈庭樂話』, p. 120-121. プロコフィエフ「プロコフィエフ　日本滞在日記」, p. 199.

(7)プロコフィエフ『プロコフィエフ自伝/随想集』, p. 51-52.

(8)徳川『薈庭樂話』, p. 120-122.

(9)*Catalogue of the Nanki Music Library (Musical Scores), II*, [Nanki Bunko, 1920 (大正9).8], p. 66.

ジル＝マルシェックス編曲 ラヴェル《ティータイムのフォックストロット》

Ravel, Maurice. *Five o'clock fox trot*, Fantaisie pour piano deux mains par Henri Gil-Marchex Paris: A. Durand & Fils, 1927. 12p. 36cm.（収蔵番号 3B4/118）

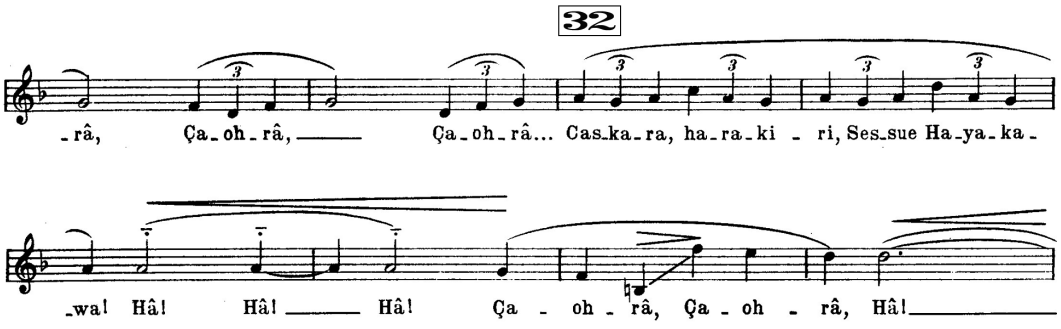
原曲はラヴェルの歌劇《子どもと魔法》第1場でティーポットとティーカップが歌って踊る場面で、これをフランスのピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックス Henri Gil-Marchex（1894 ～ 1970年）がピアノ独奏用にアレンジした。初演は、ジル＝マルシェックスが1925年に初来日したときのリサイタルの1つで行われた（後述）。楽譜は原曲の歌劇と同様、デュラン社から1927年に出版されている。楽譜の表紙を飾るイラストは歌劇の楽譜の表紙と同じもので、アンドレ・エレ André Hellé（1871 ～ 1945年）が描いた。エレはドビュッシーがバレエ音楽を書いた絵本『おもちゃ箱』の作者として知られる。

この楽譜は、上記のようにデュラン社から刊行されたものだが、南葵音楽文庫所蔵のそれは、奇妙なことにスナール室内楽シリーズに収められている（1927年、ピアノ曲編）。スナール社は自社刊行の楽譜のみでシリーズを構成していたが、1927年に方針を転換し、他社の楽譜もシリーズに含めることにしたのである。フランスの音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル』に掲載されたスナール社の広告によれば、この方針転換の目的は「シリーズの予約購読者に、より多くの作品を、バランスよく提供する」ことであるが、シリーズを構成するだけの数の作品を自社のみで調達することが難しくなっていたのではないかとも考えられる(1)。ともあれこの方針転換によって、スナール社は初めて、フランスを代表する作曲家ラヴェルの作品をシリーズに含めることができたのであった(2)。

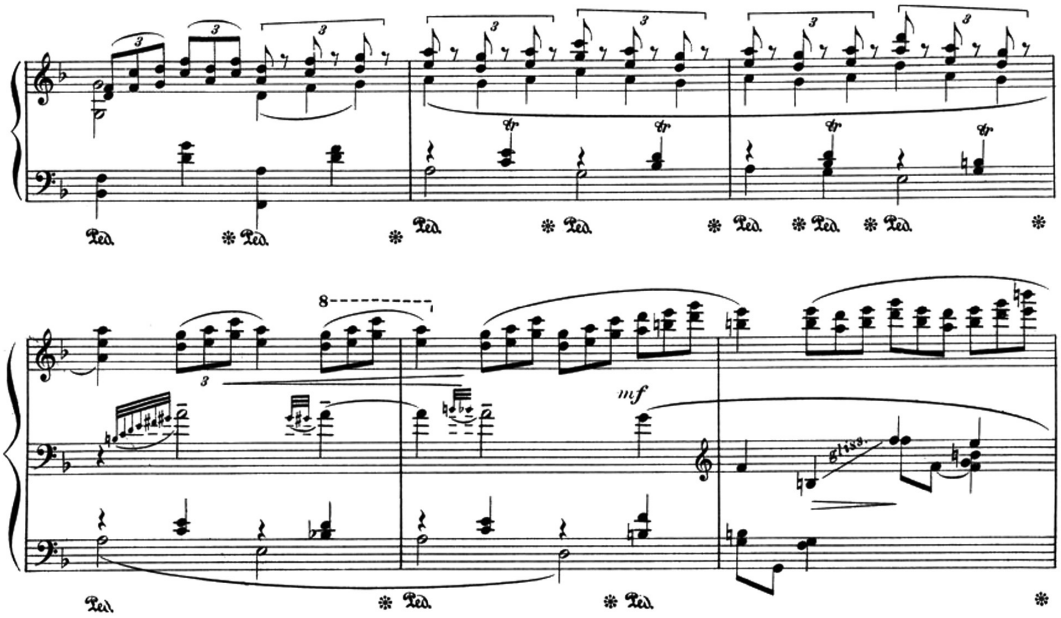
ジル＝マルシェックスが編曲したのは、ラヴェルの歌劇《子どもと魔法》第1場で、「黒いウェッジウッドのティーポットと中国茶碗がうちとけて、フランス語、英語、中国語もどきを組み合わせて歌う」場面。「オペラのレパートリーのなかでもっとも奇妙な会話のひとつ」である(3)。とりわけ、中国茶碗が歌うデタラメな歌詞に「カスカラ、ハラキリ、セッシュウ、ハヤカワ Caskara, hara-kiri, Sessue, Hayakawa!」という言葉が出てくるのが目をひくが、「セッシュウ、ハヤカワ」とは言うまでもなく早川雪州（1886 ～ 1973年）である。早川雪州は俳優として欧米で活躍し、1923年にはフランス映画『ラ・バタイユ *La Bataille*』(4)に主演している。これは日露戦争を舞台にした映画で、早川雪州はエドゥワール＝エミール・ヴィオレと共同でこの映画を監督するとともに、海軍軍人

（1）アルチュール・オネゲル『わたしは作曲家である』吉田秀和訳 音楽之友社 , 1970, p. 50-51.
（2）「スナール社の挑戦――南葵音楽文庫に眠る室内楽シリーズ」『南葵音楽文庫紀要』1号（2018）, p. 49-56 を参照。なお、1927 年の室内楽シリーズにはラヴェル《ヴァイオリン・ソナタ》も含まれているが、これもデュラン刊行である。
（3）アービー・オレンシュタイン『ラヴェル――生涯と作品』井上さつき訳 音楽之友社 , 2006, p.241.
（4）原作はクロード・ファレール Claude Farrère（1876 ～ 1957 年）『戦闘 *La Battaille*』（1909 年）。

サン＝サーンス《ミューズと詩人》ピアノ・トリオ版の表紙



ラヴェル《子どもと魔法》より〈中国茶碗の歌〉



ジル＝マルシェックス編《ティータイムのフォックストロット》

ヨリサカ侯爵を演じた。歌劇の台本と直接の関係があるかどうかは不明であるが(5)、歌劇が初演された時期(1925年3月)を考えると、この奇妙な歌詞から映画『ラ・バタイユ』の早川雪州を連想した観客もいたであろう。

ジル＝マルシェックス編ラヴェル《フォックストロット》には「幻想曲 Fantaisie」という副題が付いているが、これは《ドン・ジョバンニ幻想曲》《カルメン幻想曲》などと同じく、「歌劇等から旋律を借用し、華やかな演奏技巧を用いて即興風に展開した曲」の謂いであろう。実際、ジル＝マルシェックス編ではラヴェルの原曲はかなり自由に扱われている。

①歌劇ではフォックストロットの後に次の〈火のアリア〉への"つなぎ"として演奏される部分(練習番号37 ～ 38)が、逆にフォックストロットの前奏として用いられており、しかも時計の音と思しき不協和音（嬰ハ-本位ロ）が低音域で5回数鳴る。この不協和音自体は原曲に含まれているが(ピアノリュテアルないしハープが担当)、

(5) 歌劇の台本は1918年には書かれていたが、コレットはラヴェルの注文に応じて台本を修正している。ラヴェルは1919年2月にコレットに宛てた手紙で「古くて黒いウェッジウッドのティーポットと茶碗にラグタイムを歌わせるのはどうでしょうか」と提案している（オレンシュタイン『ラヴェル』, p. 102)。また、1924年10月13日付のイダ・ゴデブスカ宛書簡には、次のように記されている。「ぼくはまだ仕事に専心しています……。コレットから送られたばかりの『ウェッジウッドのティーポットと中国のカップ』という節まで来ました」（前掲書, p.104)。したがって、中国茶碗の歌に関して、コレットとラヴェルが映画『ラ・バタイユ』を念頭に置いていた可能性はあると考えられる。

ジル＝マルシェックスはこれを時報に見立て、原曲では9回鳴るところを、タイトル（5 o'clock Fox-Trot）に合わせて5回鳴らすことにしたものであろう。なお、ここでは五音音階風のモティーフが平行4度で奏でられるが、これは中国茶椀の歌の伴奏型に由来する。

②歌劇第2場の〈アメリカ風ワルツ *Valse américaine*〉が、フォックストロットの中間部として挿入されている。これは、主人公の男の子に恋人を奪われたたトンボが、恋人を探して「おまえはどこにいったの？」と歌う場面（練習番号107 ～ 108）と、庭が動物たち、虫たちの友愛の場となる場面（練習番号132 ～ 133）をつなげたもの。

③上記のワルツの挿入に加えて、ティーポットの歌の部分（練習番号29 ～ 32）が中間部のワルツに先立って反復され、また、ワルツの後で中国茶碗の歌の部分（練習番号29 ～ 32）が反復されるため、編曲版は249小節、原曲（練習番号28 ～ 38, 102小節）の2倍半近い長さになっている。

④原曲では、ティーポットが歌う箇所は変ハ長調 、中国茶碗が歌う箇所はヘ長調で記譜されている。5度圏の表で対極に位置する2つの調がティーポットと中国茶碗に割り当てられているわけだが、管弦楽が両者の歌を組み合わせて奏するところ（練習番号33）では、この2つの調号が同時に用いられている。すなわち、中国茶碗のテーマを受け持つ楽器（第1トロンボーン他）はヘ長調、ティーポットのテーマを受け持つ楽器（第2、第3トロンボーン、ファゴット他）は変ハ長調で記譜されているのである。ヴォーカル･スコアでも、ピアノ･パートの上段はヘ長調、下段は変ハ長調で書かれている。これは、ティーポットと中国茶碗の、噛み合わない二重唱のナンセンスさを際立たせるための工夫であろうが、このように五度圏の表で対極に位置する2つの調を組み合わせるのは、ラヴェルが好んだ手法であった(6)。一方、ジル＝マルシェックスによる編曲版では、この部分は一貫してヘ長調で記譜されており、ティーポットの歌に由来する部分も、ヘ長調の枠内で臨時記号により処理されている。

⑤ピアノ独奏用編曲版は、多くの部分が3段譜で書かれており、テクスチュアには厚みがある。また、ティーポットのアリアに対応する部分においては半音階的な装飾が多用されており、これは原曲におけるスライド・トロンボーン等の効果をピアノで出すことを狙ったものであろう。さらに遡れば、これは原曲自体が「ティン･パン･アレーのパスティーシュ」(7)であることに行き着くが、この効果をピアノ独奏版に持ち込んだことが、ジル＝マルシェックス編の演奏を技術的に困難なものにしている。

ジル＝マルシェックスは薩摩治郎八（1901 ～ 76年）の肝煎りで1925年に初来日し、10月～ 11月にかけて6回の連続リサイタルを開催した。これは、3つのテーマ(主観的音楽、追想的音楽、舞踊音楽)を設け、各テーマについて2回のリサイタルを行い、バロック時代の作品から、古典派、ロマン派を経て、同時代(1920年代)の作品までを、テーマごとに網羅するというものであった(8)。

ラヴェル《ティータイムのフォックストロット》は「舞踊音楽」(9)の第2回の最後に置かれている。これは6回のリサイタ

（6）ピアノ曲《水の戯れ》第72小節（ハ長調／嬰ヘ長調）はその典型。幻想序曲《シェヘラザード》（練習番号②）も参照。
（7）オレンシュタイン『ラヴェル』, p.241.
（8）ジル＝マルシェックスの連続リサイタルの詳細については、以下を参照。白石朝子「アンリ・ジル＝マルシェックスによる日仏文化交流の試み――4度の来日（1925-1937）における音楽活動と日本音楽研究をもとに」愛知県立芸術大学音楽研究科博士後期課程学位論文, 平成25年度. なお、梶井基次郎「器楽的幻覚」（1928年）は、この連続リサイタルをきっかけの1つとして書かれた。この短編の最後には、徳川頼貞をモデルにしたとおぼしき人物（「音楽好きで名高い侯爵」）が登場する。

ルの最後の回であり、ラヴェル《ティータイムのフォックストロット》は連続リサイタル全体を締めくくる曲でもあった。

連続リサイタルのプログラムにおいては、丸々1ページ（p. 45）を用いて、1925年11月1日のリサイタルがこの曲の世界初演であることが謳われており、ラヴェルのこの作品が6回のリサイタルの目玉商品であったことがうかがわれる。歌劇の初演は同年3月21日(モンテカルロ)であるが、パリ初演は翌年2月1日であるから、日本の聴衆はパリの聴衆が原曲に接するよりも先に、ピアノ独奏用編曲によって《フォックストロット》を聴いたことになる。さらに、演奏者のジル=マルシェックスはラヴェル本人と親交のある人物であり、このことを強調するかのように、プログラム巻末には、ジル=マルシェックスがラヴェルのピアノ曲の演奏解釈を論じた論文（フランスの音楽雑誌『ルヴュ・ミュジカル』誌1925年第6号に掲載、小松耕輔訳）が付録として収められている。

だが、それだけが理由ではあるまい。「舞踊音楽」第2回 の曲目を見ると、リサイタル終盤の曲目は、ドビュッシー《ゴリウォーグのケークウォーク》、ミヨー《ブラジルの郷愁》、ストラヴィンスキー《ピアノ・ラグ・ミュージック》、そしてラヴェル《ティータイムのフォックストロット》という順番になっている。ピアニスト本人によるプログラム解説（p. 44）でもこの4曲はセットで扱われ、「最近代的作曲家によつて、フオツクストロツト、タンゴー、ケイク ウオークの形式化は宛かも十八世紀においてブーレ、パツスピエ、ギグーいやまた十九世紀に於けるハンガリーや波蘭土の舞踊の形式化と同様の意味でもつてされたものである」と書かれている。したがってラヴェル《フォックストロット》は、単に世界初演という理由でコンサートの最後に置かれたのではなく、舞踊音楽の歴史をたどるという全体の流れの中に然るべき位置を占めていると見るべきであろう。

もちろん、ヴィルトゥオーソ的な演奏技巧の華やかさ――幻想曲の副題に似つかわしい――も、この編曲版を連続リサイタルの掉尾にふさわしいものとしたであろう。ただ、まさにそのゆえに、ストラヴィンスキーの《ピアノ・ラグ・ミュージック》(1919年)などと並べたとき、この「ラヴェルの歌劇《子どもと魔法》による幻想曲」は、いくぶん時代がかって聞こえたかもしれない。

なお、ジル＝マルシェックスは日本滞在をきっかけに、ピアノ曲《古き日本の4つの映像 *Quatre Images du vieux Japon*》(1935年?)、歌曲集《7つの芸者の歌 *Sept Chansons des geichas*》(1935年)なども作曲しており、これらには作曲者自身による放送用録音[10]がある。

最後に、スナール室内楽シリーズに収められた、《ティータイムのフォックストロット》以外のジル=マルシェックスの作品および編曲の一覧を掲げる(いずれも南葵音楽文庫所蔵)。

・リュリ／ジル=マルシェックス《パサカイユ *Passacaille*》(抒情悲劇《ペルセウス》より)(1922年出版)
・ジル=マルシェックス《2つの歌曲 *Deux Mélodies*》(1927年出版)
1.〈果てもなく広がる平原の倦怠のなかに … *Dans l'interminable ennui de la plaine*…〉(ヴェルレーヌ詩)
2.〈隣の女の家のカーテンが … *Le Rideau de ma voisine*…〉(ミュッセ詩)

(近藤秀樹)

(9)「舞踊音楽」第1回の最初に置かれているのは、ジル＝マルシェックスがピアノ独奏用に編曲したリュリ《パサカイユ》(抒情悲劇《ペルセウス》より)であるが、これはスナール室内楽シリーズの一環として1922年に出版されたもので、南葵音楽文庫に所蔵されている。

(10) *Henri Gil-Marchex : Columbia 78rpms & Broadcast Recordings*, Sakuraphon, SKRP78002, 2015.

オペレッタの楽譜

南葵音楽文庫にオペレッタ、ミュージカルの楽譜がある。オペラと共存しつつ展開されてきたオペレッタは、20世紀初頭アメリカ型娯楽演劇としてのミュージカルにとって代られる。オペレッタからミュージカルへ。文庫蔵書は丁度その時期に刊行された楽譜が多く、当時のオペレッタ、ミュージカルの傾向を反映した興味深い資料群となっている。

明治40年代の東京に登場した純西洋式劇場の有楽座（1908年）や帝国劇場（1911年）は日本の舞台芸術に新たな場を提供したが、この2つの劇場の開場以降、東京でもバンドマン喜歌劇団 The Bandmann Opera Company（1906年初来日）や横浜在住の外国人たちによるオペレッタ（当時オペラと呼ばれていた）公演がしばしば行なわれるようになった。徳川頼貞が観劇を許されるようになったのもその頃からで、学習院の学友たちや4歳違いの弟・治と連れだってよく出掛けていったようである。著書『薈庭樂話』にはその時のエピソードが幾つか記されている。最初に観たのは有楽座のバンドマン公演「バルカンの王女」というから、1911（明治44）年6月のことで頼貞18歳、英語の勉強になるからと父を説得したという。

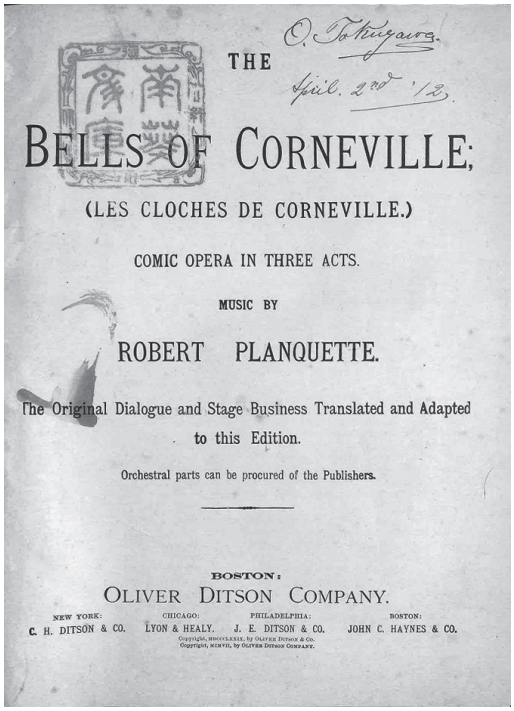
南葵音楽文庫のオペレッタ、ミュージカルの楽譜には頼貞、治兄弟がせっせと外国から取り寄せたものも含まれている。それらを中心として、おもな楽譜を紹介する。エディションや当時の楽譜の作られ方に注目して書誌記述を含め、注記として日本初演に関する事項を記した。また、オペラ好きの頼貞の初期体験としても興味深い資料でもあることから、彼の感想なども著書『薈庭樂話』によって確認し得た限りにおいて付記した。

☆は頼貞が観た曲目。排列は和訳タイトルの50音順。末尾に請求記号を付した。なお、書き入れ "Osamu Tokugawa" "O. Tokugawa" は頼貞の弟・治の署名。

《クエーカー教徒の娘》

The Quaker girl : a new musical play in three acts / By James T. Tanner ; lyrics by Adrian Ross and Percy Greenbank ; music by Lionel Monckton.
London : Chappell & Co., c1910, 1911.
vocal score (225 p.) ; 28 cm.
Pl. no. 24514.
作曲者印（t. p.）
南葵文庫印
製本（775.4/MO）
* 日本初演　1911（明治44）年6月26日　バンドマン喜歌劇団　帝国劇場

《コルヌヴィユの鐘》☆

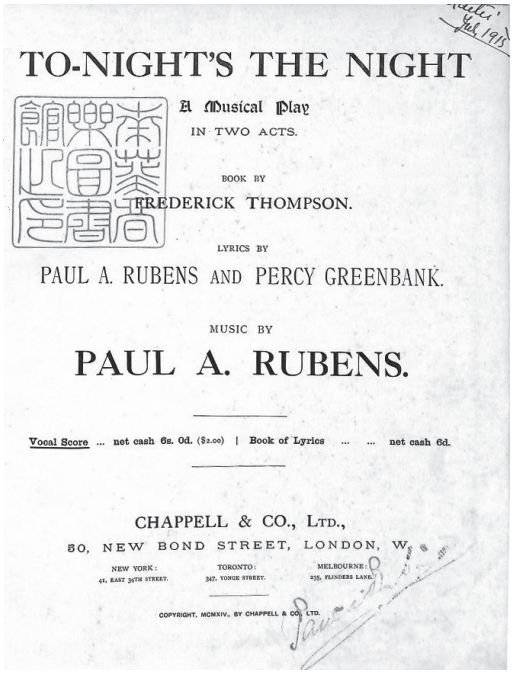

THE
BELLS OF CORNEVILLE;
(LES CLOCHES DE CORNEVILLE.)
COMIC OPERA IN THREE ACTS.
MUSIC BY
ROBERT PLANQUETTE.
The Original Dialogue and Stage Business Translated and Adapted to this Edition.
Orchestral parts can be procured of the Publishers.
BOSTON:
OLIVER DITSON COMPANY.
NEW YORK: C. H. DITSON & CO. CHICAGO: LYON & HEALY. PHILADELPHIA: J. E. DITSON & CO. BOSTON: JOHN C. HAYNES & CO.

The bells of Corneville (Les cloches de Corneville) : comic opera in three acts / music by Robert Planquette ; the original dialogue and stage business translated and adapted to this edition.
Boston : Oliver Ditson , c1879, c1907.
vocal score (230 p.) ; 30 cm.
英語版
書入れ「O. Tokugawa / April, 2nd '12」（t. p. ペン書）
南葵文庫印

製本（766.1/ PL）
* 日本初演　1895（明治18）年9月10日　マスコット歌劇団 Mascotte Opera Company　横浜パブリックホール
* 頼貞が観た公演は、1912（明治45）年1月3日、横浜ドラマチック倶楽部（横浜在住の外国人たちによるアマチュア劇団）、帝国劇場

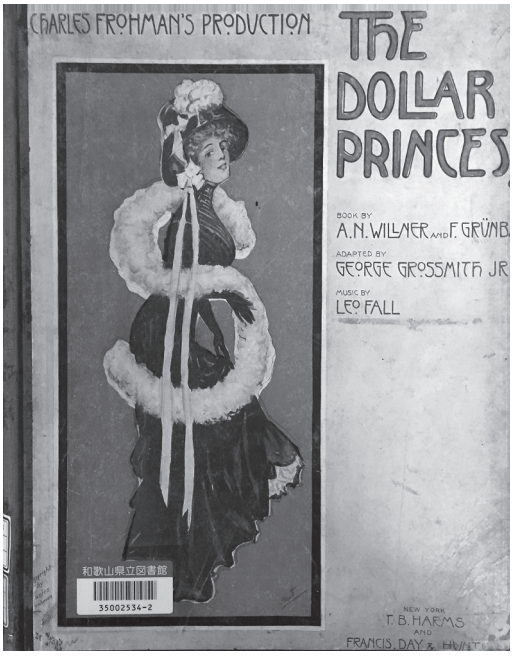
「喜歌劇として自分の印象に一番強く残つているのは、丸ノ内に建てられた帝國劇場で、京濱在住の西洋人達が組織した素人劇團によって上演されたブランケットの喜歌劇『コルネヴィーユの鐘』である。浪漫的な物語りと甘美な音樂は少年の私の心を深く動かした。それからずつと経つて二十五年の後、南佛を旅行した時に、私は少年時代の夢を忘れ兼ねてノルマンディの片田舎にコルネヴィーユの舊蹟を訪れた。現實にみる鐘樓はつまらないものであつたが、それでも少年の頃の思い出を懐しんだ。」（『薔庭樂話』, p. 13-14）

《今夜だ今夜だ》



To-night's the night : a musical play in two acts / book by Frederick Thompson ; lyrics by Paul A. Rubens and Percy Greenbank ; music by Paul A. Rubens.
London : Chappell & Co., c1914.
vocal score (99 p.) ; 28 cm.
"Produced by Mr. George Grossmith and Mr. Edward Laurillard".
Pl. no. 26001.
作曲者署名印
書入れ「[R]aitei ／ Jul, 1915」(t. p. ペン書)
南葵音楽図書館印
製本（775.4/ RU）
* 日本初演　1916（大正5）年6月26日　バンドマン喜歌劇団　帝国劇場
* 留学中ロンドンで購入

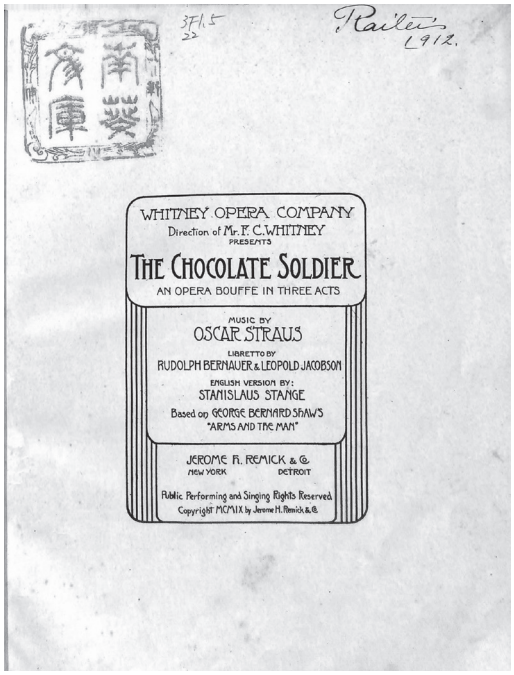
《ダラー・プリンセス》☆



"The Dollar Princess" : a musical play in three acts / by A.M. Willner and F. Grünbaum ; American version by George Grossith Jr. ; music by Leo Fall.
New York : T.B. Harms & Francis, Day & Hunter, c1909.
vocal score (202 p) ; 31 cm.
"Charles Frohman's Production".
書入れ「O. Tokugawa / April 2nd '12」(t. p. ペン書)
南葵文庫印（775.4/ FA）
* 日本初演　1912（明治45）年6月30日　バンドマン喜歌劇団　帝国劇場

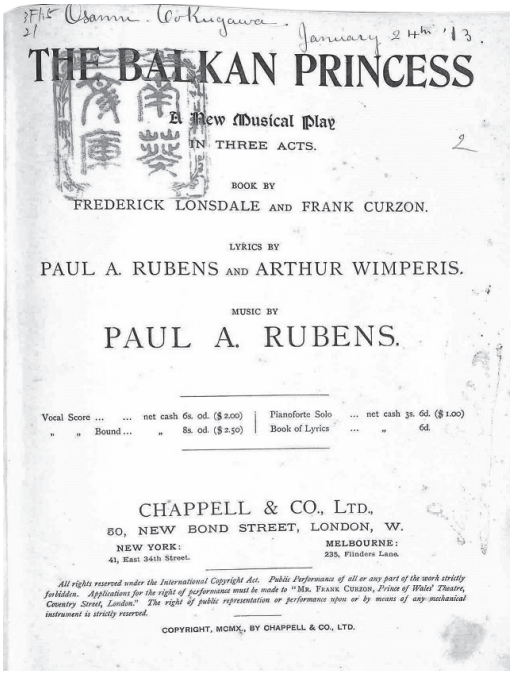
「私は再度来演したこのバンドマン一座を見に行つた。その時の演し物は『ダラー・プリンセス』であつた。この音楽は一時大変流行したやうである。」(『薔庭樂話』, p.13)

《チョコレートの兵隊》



The chocolate soldier : an opera buffa in three acts / music by Oscar Straus ; libretto by Rudolph Bernauer & Leopold Jacobson ; English version by Stanislaus Stange based on George Bernard Shaw's "Arms and the Man".
New York : Jerome H. Remick, c1910.
vocal score (197 p.) ; 31 cm.
"Whitney Opera Company direction of Mr. F. C. Whiney presents"
英語版
書入れ「Raitei / 1912」(t. p. ペン書)
南葵文庫印
製本（766.2/ST)
* 日本初演　1912（明治45）年6月27日　バンドマン喜歌劇団　帝国劇場

《バルカンの王女》☆

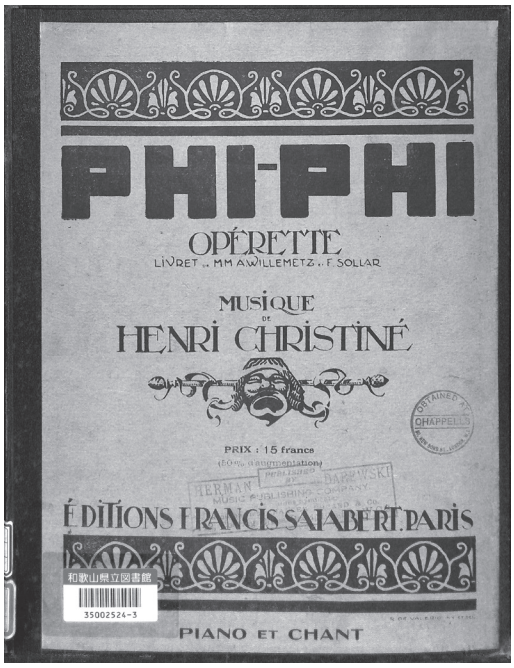


The Balkan Princess : a new musical play in three acts / book by Frederick Lonsdale and Frank Curzon ; lyrics by Paul A. Rubens and Arthur Wimperis ; music by Paul A. Rubens.
London : Chappell & Co., c1910.
vocal score (132 p.) ; 28 cm.
Pl. no. 24268.
書入れ「Osamu Tokugawa / January 24th '13」(t. p. ペン書)
南葵文庫印
製本（775.4/ RU)
* 日本初演　1911（明治44）年6月11日　バンドマン喜歌劇団　有楽座
* 頼貞が最初に観たオペレッタ。

「新聞に広告されたプログラムを見た時、私達はヨハン・シュトラウス*の『夢のワルツ』といふ劇を見度いと思つたが、学校の都合か何かで『バルカンの皇女(プリンセス)』といふのを見に行つた。それは公演の第一夜であつた。演出と云ひ背景と云ひ、またオーケストラにしても十数人といふ貧弱なもので、今日想へば問題にならない粗末なものであつたが、それでも聴衆には非常に珍しがられたやうで大入満員であつた。」(『薔庭樂話』, p.13)
* 頼貞たちはヨハン・シュトラウスのオペ

レッタと思い込んでいたようだが、実はオスカー・シュトラウスの作品。（後掲《ワルツの夢》参照）

《フィフィ》



Phi-Phi: opérette en trois actes / livret de MM. Albert Willemetz & F. Sollar ; musique de Henri Chiristiné ; partition piano et chant.
Paris : Éditions Francis Salabert, c1919.
vocal score (144 p.) ; 32 cm.
"Représentée pour la première fois au Théâtre des Bouffes-Parisiens, à Paris. Direction: G. Quinson. Le 12 Novembre 1918."
Pl. no. E.A.S.1224.
南葵音楽図書館印
製本（766.2 /CH）

《メリーウィドウ》

The merry widow : new musical play / adapted from the German of Victor Leon and Leo Stein ; lyrics by Adrian Ross ; music by Franz Lehar ; arranged for the piano by H. M. Higgs.
New York : Chappell & Co., c1907.
vocal score (192 p.) ; 28 cm.
Pl. no. C.6140.
書入れ「Yorisada / Dec 1912」(t. p. ペン書)
南葵文庫印
製本（766.2/ LE）
* ミュージカル仕立ての《メリーウィドウ》
* 日本初演　1908（明治41）年4月29日　バンドマン喜歌劇団　神戸（会場不詳）、横浜パブリックホール

《ワルツの夢》

"A waltz dream" : operetta in three acts / by Felix Doermann and Leopold Jacobson ; music by Oscar Straus ; English book and lyrics by Jeseph Herbert ; music arranged by A. Carroll Ely.
New York : Jos. W. Stern & Co., c1908.
vocal score (152 p.) ; 29 cm.
英語版
書入れ「Raitei.」(t. p. ペン書)
南葵文庫印
製本（766.2/ ST）
* 日本初演　1911（明治44）年6月13日　バンドマン喜歌劇団　有楽座

頼貞と友人たちは当初、この曲目をヨハン・シュトラウスのオペレッタと誤解していた（「バルカンの王女」参照）。

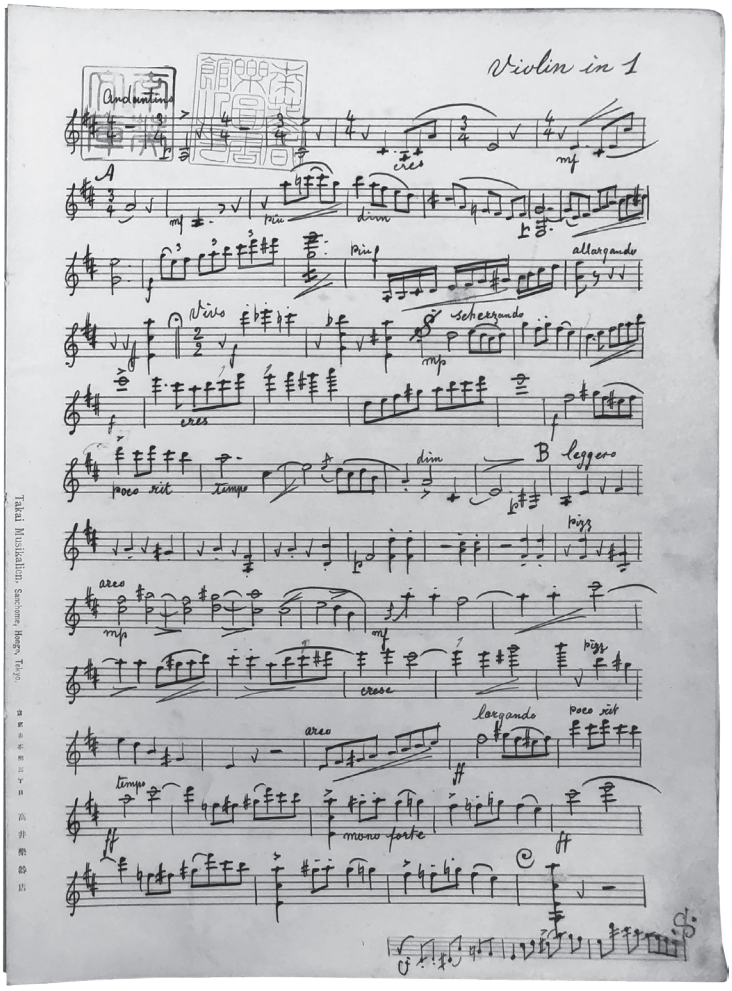
参考文献

◎徳川頼貞『薈庭樂話』春陽堂書店, 1943.3.
◎増井敬二『日本のオペラ　明治から大正へ』民音音楽資料館, 1984.11.
◎永竹由幸『オペレッタ名曲百科』音楽之友社, 1999.6.

（林淑姫）

ネイラー　序曲《徳川頼貞》

Naylor, Edward Woodall. *Overture to Raitei Tokugawa: Tokyo*. 39 parts. 35cm.（収蔵番号 3K4.2/15）



第１ヴァイオリン・パート譜

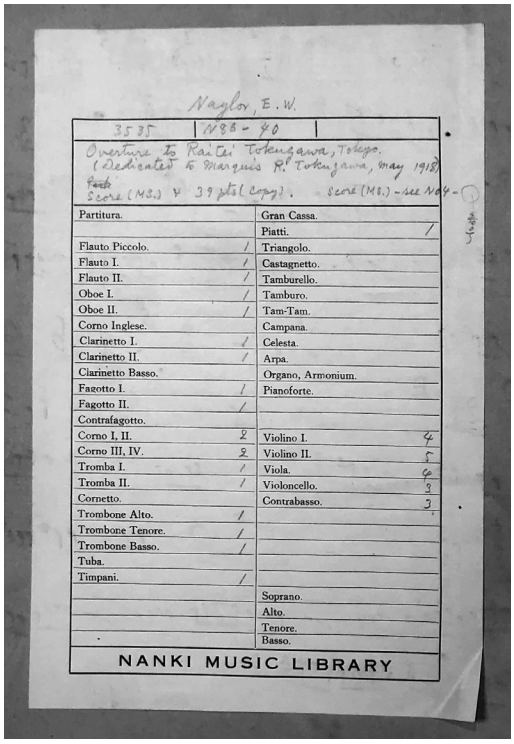
1918（大正７）年の南葵楽堂開堂に際し、徳川頼貞は、その最初の音楽会で演奏されるべき記念の音楽作品の委嘱をおこなっていた。エドワード・ウッドル・ネイラー（1867 ～ 1934年）作曲の序曲《徳川頼貞》（1918年。曲名を「徳川序曲」と略記する資料もある）が、それである。南葵楽堂が本格的なコンサートホールとして本邦初であるなら、このような施設の開館を記念する作品を委嘱――しかも海外の作曲家に――した例もまた、本邦初と言える。

楽器編成は、フルート２、ピッコロ１、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、トライアングル、弦五部。アンダンティーノ（ニ長調　４分の４拍子＋４分の３拍子）の前奏部とヴィーヴォ（ニ長調　２分の２拍子　ロンドソナタ形式）の主部からなる全211小節、演奏時間約６分半の作品である。現時点で楽譜の出版はなされていない。

現在、南葵音楽文庫には、「高井楽器店」（東京市本郷３丁目）の五線紙に手書きされたこの曲のパート譜一式が現存しており(1)、これは初演時に使用された楽譜と考えられる。どのパート譜もページのめくりに使用感があるものの、演奏者による書き入れはほとんどなく、あっても写譜の誤りを訂正している程度である。

これらのパート譜とは別に、ネイラーから送られたはずの作曲者自筆のスコアも収蔵されていたはずであるが、残念ながら現在は失われてしまっている。しかし南葵音楽文庫所蔵の楽譜とは別に、ネイラーが保存用に手許に残していたスコアが作曲者の息子によってケンブリッジ大学エマニュエル・カレッジ図書館に寄贈されており、その複写は東京藝術大学附属図書館で見るこ

（1）現存する弦楽器の各パート譜冊数は、第１ヴァイオリン４、第２ヴァイオリン５、ヴィオラ４、チェロ３、コントラバス３。管・打楽器は各パート１冊ずつ揃っている。


Naylor, E. W.

3535 | N85-90

Overture to Raitei Tokugawa, Tokyo.
(Dedicated to Marquis R. Tokugawa, May 1918)
Score (MS.) & 39 pts (copy). Score (MS.) - see No 4 -

Partitura.		Gran Cassa.	
		Piatti.	1
Flauto Piccolo.	1	Triangolo.	
Flauto I.	1	Castagnetto.	
Flauto II.	1	Tamburello.	
Oboe I.	1	Tamburo.	
Oboe II.	1	Tam-Tam.	
Corno Inglese.		Campana.	
Clarinetto I.	1	Celesta.	
Clarinetto II.	1	Arpa.	
Clarinetto Basso.		Organo, Armonium.	
Fagotto I.	1	Pianoforte.	
Fagotto II.	1		
Contrafagotto.			
Corno I, II.	2	Violino I.	4
Corno III, IV.	2	Violino II.	5
Tromba I.	1	Viola.	6
Tromba II.	1	Violoncello.	3
Cornetto.		Contrabasso.	3
Trombone Alto.	1		
Trombone Tenore.	1		
Trombone Basso.	1		
Tuba.			
Timpani.	1		
		Soprano.	
		Alto.	
		Tenore.	
		Basso.	

NANKI MUSIC LIBRARY

ピッコロ・パート譜に貼付されたパート表

とができる[2]。

自筆スコア記載の題名は“Overture to Raitei Tokugawa: Tokyo”（序曲　東京の徳川頼貞へ）[3]。初演時のプログラムにおいては原題の“to”以下を省き、「序樂」とのみ記された[4]。

作曲者のネイラーは、徳川頼貞がケンブリッジ大学留学中（1913 ～ 15年）に指導を受けた恩師であり、作曲家、オルガニスト、音楽学者として活躍した人物である。ケンブリッジ大学エマニュエル・カレッジを卒業して、ロンドンの王立音楽大学に籍を置きながらロンドン市内で教会オルガニストとして活動、1902年からは母校ケンブリッジ大学エマニュエル・カレッジのオルガニストおよび講師となり、亡くなるまでの30年以上にわたりその職を全うした[5]。ネイラーは音楽分野では同カレッジで最初の講師であり、就任当初は唯一の音楽教員でもあった。彼は文学を学ぶ学生たちが音楽により親しめるよう腐心し、彼の主著『シェイクスピアと音楽 *Shakespeare and Music*』(1896年初版、1931年改訂）や『詩人と音楽 *The Poets and Music*』（1928年）なども、そうした教育経験から編まれた著作であったという。頼貞がケンブリッジ留学の初年度に聴講したネイラーの講義も、「如何に古来の文学者が音楽を取り扱って居たか」であった[6]。

留学中の頼貞は、ネイラーから大学での講義に加えて、ピアノと和声の個人レッスンも受けた。彼が指揮する演奏会も毎日のように見、ときには頼貞自身がネイラーのオーケストラに参加させられたことさえあったようである[7]。またネイラーは、頼貞に献呈された本居長世の合唱曲《涙の幣》（1913年。頼貞の弟・徳川治への追悼歌）を高く評価し、自身が率いる合唱団に日本語で歌わせたこともあった[8]。

頼貞の帰国後も師弟の交流は続いた。ネイラーは南葵楽堂に備え付けるパイプオルガンの選定[9]、カミングス文庫の購入の

（2）Cambridge: Emmanuel College Library, MS 328. 東京藝術大学附属図書館 , A7/N333/T。本書巻頭の遊び紙には、図書館員のものと思われる鉛筆書きで「オルガン科秋元道雄教授が作曲者の息子より贈られた 2 部のコピー譜のうちの 1 部」と説明されている。しかし秋元自身は著作において「カナダのヒュー・マクリーン教授から送られて来た」と記している（秋元「奏楽堂オルガンについて」『東京藝術大学音楽部年誌』11 集（1985）, p. 5)。ヒュー･マクリーン Hugh Mclean（1930 ～ 2017 年）はカナダのオルガニスト、音楽学者。1960 年代に南葵音楽文庫のカミングス文庫の調査を行った。

（3）“Raitei” は頼貞の有職読み。下線は原文のまま。原文中のコロン（:）は、南葵音楽文庫が 1970 年代に作成したパート表（ピッコロのパート譜に貼付）ではカンマ（,）で記されている。

（4）二見孝平編『大正九年拾一月臨時音樂會　演奏樂曲に就て』南葵文庫 , 1920（大正 9）.11, p. 1.

（5）ネイラーの生涯と業績に関しては次を参照。Raymond Hockley, “Edward Woodall Naylor”, *Emmanuel College Magazine*, vol. 57 (1974-75), p. 8-16; reprint as notes for *Vox Dicentis: Choral Music by E. W. Naylor*, Regent REGCD426, 2014, CD, p. 13-21. “Obituary”, *The Musical Times*, vol. 75, no. 1096 (June, 1934), p. 563.

（6）徳川頼貞「英國だより (私信)」『音樂』東京音楽学校学友会 , 6 巻 4 号 (1915 (大正 4) .4) , p. 79. 本紀要 p. 86-87 に転載。

（7）徳川頼貞『薔庭樂話』徳川頼貞刊 , 1941（昭和 16）.11, p. 74 および前掲「英國だより（私信)」参照。

（8）「海内樂壇」『音樂』東京音楽学校学友会 , 7 巻 3 号（1916（大正 5）.3）, p. 83.

仲介などで、南葵楽堂と南葵音楽図書館の創設に重要な役割を果たしている。南葵楽堂についてはイギリスにおいても、*The Musical Times* 誌上で「東洋初の演奏会用 空 間 The first concert-room in the Orient」として写真入りで紹介され、開堂式と最初の演奏会の様子が伝えられたが(10)、この記事を書いた人物――筆名は「N.」とのみ記されている――もまた、ネイラーであったはずである。イギリスにおいて南葵楽堂についてこれほど詳細かつ正確な情報を得ることができた人物は、彼を除いて考えられない。

その記事に次のような記述がある。

> E. W. ネイラー博士はこの［南葵楽堂の］初めての演奏会のために新作の序曲を委嘱されたが、その電報が届いたのは去る［1918年］5月のことであった。しかし手稿総譜が日本に届くまでには15週間を要するとされ、したがって、作曲の時間はわずかしか残されていなかった。(11)

エマニュエル・カレッジ図書館所蔵のネイラー自筆のスコアに記された作曲者本人による以下の解説も、彼が演奏会に間に合わせるべく、急いで曲を書き上げようとしたことを窺わせる。

> アンダンティーノの部分は1918年3月に新たに作曲。ヴィーヴォの部分は、中間部の終わりの数小節を省略した以外は、1904年2月に書いたヴァイオリンとチェロとピアノのための三重奏曲 ニ長調の終楽章と同じである。(12)

この記述によれば、この序曲の前奏部（アンダンティーノ）は、頼貞からの作曲依頼（1918年5月）よりも前に書かれていたことになる。おそらくは別に書いていた作品を転用したのであろう。主部（ヴィーヴォ）も新たに作曲されたわけではなく、旧作の管弦楽編曲であった。

序曲は5月23日に完成され、28日に日本へ発送された(13)。それでも日本での演奏準備は間に合わなかったらしく、急いで作曲を進めたネイラーにとっては残念なことであったが、南葵楽堂の第1回演奏会での演奏は見送られることとなった。初演は2年後の1920（大正9）年11月23日、南葵楽堂のパイプオルガン竣成を記念する「臨時音楽会」においてである。そのためか、当日のプログラムの楽曲解説においては、この曲は南葵楽堂の竣工とともに、オルガンの設置を祝して贈られたことになっている(14)。初演は海軍軍楽隊の演奏、指揮は当時の軍楽隊長、横枕文四郎であった。

序曲《徳川頼貞》は、南葵音楽文庫の和歌山県への寄託を記念して2017年12月6日、和歌山県民文化会館大ホールで開催された「読売日本交響楽団和歌山特別公演」において、川瀬賢太郎の指揮により約1世紀ぶりに再演された。2018年には和歌山県の委嘱により大橋晃一編曲の吹奏楽版も作られ、その楽譜は県内中学校・高等学校吹奏楽部、県吹奏楽連盟加盟吹奏楽団に配布される。（篠田大基）

---

(9) 東京藝術大学附属図書館所蔵スコア（注2参照）の巻末には、南葵楽堂のパイプオルガン（後に東京音楽学校奏楽堂に移設）の「尺八」のパイプの選定に関する資料の複写が綴じ込まれている。

(10) N.[anonymous] "A Concert-Hall at Tokyo", *The Musical Times*, vol. 60, no. 912 (Feb. 1, 1919), p. 82.

(11) 前掲書。

(12) 作曲者自筆スコア（注2参照）, 前付 .

(13) 作曲者自筆スコア（注2参照）, p. 35 に曲を書き終えた日と日本に送られた日が記載されている。

(14) 注4参照。ただし『南葵文庫報告』第13 には正しく楽堂竣工の記念とのみ書かれており（p. 13）、プログラムを編集した二見孝平の誤解であった可能性も考えられる。

関連歴史資料

徳川頼貞「英國だより」（1915 年）

徳川頼貞の留学中の通信を紹介する。1915（大正4）年の東京音楽学校学友会誌『音樂』に掲載された。本文は縦組み。転記を原則としたが、横組みに変換するにあたって、かな2字以上を繰返す踊り字記号「くの字点」は文字に代えた。また当時の印刷上の慣例として省略される行末の句読点は必要に応じて加えた。文中の「（註）」「（中略）」「（下略）」等は原文記載の通り。誤記、誤植、脱字、及び人名の省略については必要に応じて角括弧で補記した。

■英國戰時の流行歌(1)

在劍橋　薔庭

流行歌などは極く些細な事ですが、それで以て其時其國の情況がよく表はれて居るものです。今戰爭になつてから英國中到る處に聞かれる流行歌を一ツ挙げてみましよう。嘗て日露戰爭當時に日本で口ずさんだ流行歌と比較して見て非常に面白味を感じます。

原文
It's a long way to Tepperary（ママ）
It's a long way to go.
It's a long way to Tepperary
To the sweetest girl I know.
Goodbye, Piccadilly!
Farewell Lecester Square!
It's a long long way to Tepperary
But my heart is right there!
Right there!

邦譯（但し拙譯です）
遙かに見ゆる島影は
　　我がイギリスかなつかしや
空水遠く隔たりて
　　テパレーの野は見えねども
心は通ふふるさとの
　　我をばまてる乙女子に
豪雨おそれぬ身なれども
　　なれが情の言葉に
戎衣の袖をしぼるなりしぼるなり
　　さらばさらば　いざさらば
　懐しのピカディリヤ　レスタスクエヤ

（註）Tepperary はアイルランドの地名
此歌はアイルランドの民謠でアイルランドを去るを歌ふたものだそうです。

（『音樂』6巻1号 (1915.1)）

■英國だより（私信）

徳川頼貞

［1915（大正4）年2月19日付］

一月八日の御葉書を嬉しく拝見しました、御元氣で結構です。此大戰爭の御蔭ですべてのものにくるひが來ました、英國等では此來るべきシーゾンにオペラが有るか無いか分らないのです、私は幸に戰爭以前に來て居たので少々見ることが出來ました。ワグナーのもので「タンホイザー」、「トリスタとンイゾルデ」［トリスタンとイゾルデ］、「ラインゴルド」、「パルジファル」（二回）とです。其外「ラ　ボヘーム」「オテロ」「ボリス　ゴドゥノフ」、「フィガロ」、「ツァウベルフレーテ」、「アルセスト」、「ジュエル　オブ　マドンナ」とをロンドン及びパリーで見ました。其外第一流の artist としてメルバ、パッティ、クライスラー、エルマンを聽きました。パッティは殘念ながら pass'e [passé] ですね、先日の音樂會の時に唱つたモッアルトのフィガロのアリア（Voi che Sapete）の初の三四小節半音とり違て歌つて不愉快でした。

私はケンブリチに居ります、而して分りもしないのに音樂の講義に行つて居ります。全體に於て Oxford の音樂科とは異つたものがケンブリチにはあります。私の参って居るのはネラー博士(2)

（1）紹介されている歌は "It's a Long Way to Tipperary" のリフレインの部分。原文の Tepperary は発音に近いが誤記。
（2）エドワード・ネイラー Edward Woodall Naylor（1867 ～ 1934 年）

の「如何に古來の文學者が音樂を取扱つて居たか」、キアプステイク博士[3]の "Accoustics [Acoustics] on Music"、ルーサム博士[4]の "Analysis of Music" とで御座います。其外私は前記ネラー博士について privately にピアノと Harmony, Counterpoint, Fugues, Canon, Orchestration 及び音樂美學を習つて居ります。前記の講義が一週間に八時間、其上に私自身のネラー博士のが殆毎日ある爲に可成多忙です。時にネラー博士は自分のオーケストラに私を入れてギューギューせめられて居る事もあります。

私は父の命令で止むなく英國に來もし居もして居りますが私は英國をすきません、實際英國はビヂネスの國です、つくづくいやになつてしまひました。私の歸るのは未だよく定めて居ませんが、或事情の爲め今年の暮に一寸歸るかも知れません。そして來年の春頃に又歸るつもりです、そこで君に一寸伺つて見たいことがあるのですがね私はオルガンを持つて歸るつもりです、オルガンと云つてもハーモニュームの事ではないのです、勿論パイプオルガンは高いものですがせいぜい一萬五六千圓位ふんばつて買つていつて日本で之に合ふ樣な小さい音樂堂を作つて見ようかとも思つて居ます、勿論個人の仕事ですからろくなものは出來ませんがね、どんなものでしようかしら。

戰爭の御蔭で何處にも旅行が出來なくなつたので閉口して居ます。郡［虎彦］君にはロンドンで數度逢ひました。此頃はパリーに居るさうです、英國はスコットランド迄行つてきました、アイルランドには行つて見ません。圖師［尚武］君の病氣は其後はどうですか私も非常に心配して居ます、二條［厚基］君や青山［幸泰］君に逢つたら宜しく云つてください。それでは又御體御大切に。

千九百十五年二月十九日朝

ケンブリチの里にて　德川頼貞拜

田村寛貞樣

（『音樂』6巻4号 (1915.4)）

［1915（大正4）年4月28日付］

只今君の御葉書を受取つて嬉しく讀んだ、御變り無くて結構だ。僕はつくづく英國と英人が嫌になつたから多分九月頃には一度歸る。君の教へてくれたヘルムホルツの Theory of Tone Sensation を丁度先學期求めたのですがむづかしくて困つて居る。英語で云ふ Acoustics of Music と云ふ講座が此大學に有るので先學期中出た。大變有益だつた。キャプスティク博士が其の受持であつたが今は之れ又カーキー服を着こんで戰地に行つた。僕は今ギクターの蓄音機の箱のやつを二百五十圓ふんばつて買った。案外に結果がいゝが生憎ギクターの板[5]が英國で求められないので困つて居る。英國の板はどうもいけない。君の云つたやつを求め樣と思つて居る。今現にニキッシュのベートーヴ［ェ］ンのシンフォニー第一を全部持つて居る。ワーグナーを君の言に從つて集め樣かと思つて居る。先日ロンドンの有名なピヤノ屋をあさつて見た、曰くブルートナー、スタインウェイ、ブロードウード、ベッヒシュタイン、だが少しよいと思ふと其れは東洋向でないからいけないと云ふ。其理由はと云へば氣候に適する樣にすると云ふ、而して所謂東洋向なるものを見れば實に丈夫一方で見ばが惡い其の上價が倍高い、いろいろ見た末ステック會社の平面臺のピヤノを求めた。實はいゝピヤノをとも思つたが自分では到底彈けさうも無いのでピヤノラの附いたやつでピヤノの一番いゝやつをと思つて其れにした。千七百五十圓だが二千二百五十圓のをまけさしたので割合に安いと思つて居る。（中略）　一昨日イオリアンホールに行つてみたら又面白いものを見た。其れはオーケストラル　オルガンと云ふてつまり

（3）ジョン・キャプスティック John Walton Capstick（1858 ～ 1937 年）

（4）シリル・ルーサム Cyril Rootham（1875 ～ 1938 年）

（5）レコード盤の隠語。

平常のパイプ　オルガンにピヤノーラの仕掛をしたものだ。（中略）今年はオペラが無いのでがつかりだ。然しロシヤにオペラが二週間程あると云ふ評判だ。

四月廿八日午前一時半　　徳川頼貞拝

田村寛貞様

（『音樂』6巻7号 (1915.7)）

［1915（大正4）年5月30日付］

昨夜私は今度ロンドン　オペラハウスで開かれたロシヤ　フレンチ　オペラ　シーゾンの第一夜のチャイコフスキーのピコバヤダーマを見て來ました、「ピコバヤダーマ」（佛名Pique Dame）[6]は未だ英國では一度も上場されなかつたものださうです。非常にいゝ。私は今まであんないゝものを見た事がないといつても過言でないと思ひます。何れ細かい事は手紙で申しませう。明夜は「マダム　バッタフライ」で三浦［環］夫人がプリンシパル　パートを取られる筈です、水曜日には「ラクメ」が有りますから又行きたいと思つて居ります、昨夜は殆んど満員のすがたでした。唯面白い事は休みの間に四方から聞へる言葉は英語でなくて、佛語が多く時々ロシヤ語も聞へました、之から推して見ても英國人のすくない事がわかります。

五月卅日　　ロンドンにて　　徳川頼貞

田村兄へ

（『音樂』6巻8号 (1915.8)）

［1915（大正4）年7月5日付］

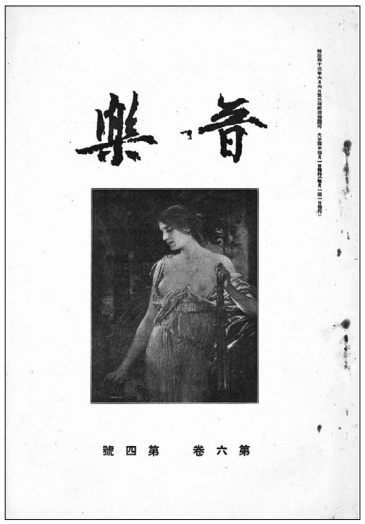
其後大變御無沙汰した。御變りもありませんか？　ケムブリッヂの方も亦長い長い夏休になつたので上京して來ました。ロンドンは此大戰爭の爲にシーズンが無くなつたので大して之と申す樣なものも、あゝ折角樂みにして居たロシヤのオペラも亦フィナンシアル　ディフィカルティーズの爲に、おぢやんになつて終いました。先日アルバートホールでイザエのコンサートが二度ありましたので二度とも行つて見ました。二度目の時は有名なパッハマンのピアノ　ソーロもありました。何でもパドロフスキエー[7]がロンドンに居ると云ふ噂でしたが、二三日前ハイバー　スクエーヤ[8]のレストーラントで會ひました。私は愈々パイプオルガンを購入しました。三個のマヌエルと五十一個のストップスとあります。全部私の先生であるネーラー博士に御頼みしました。なんでも全部出來るまでに六ヶ月かゝるさうです。（下略）

七月五日

ロンドン　徳川頼貞

田村兄へ

（『音樂』6巻9号 (1915.9)）



東京音楽学校学友会誌
『音樂』6巻4号（1915.4）

（6）「ピコバヤダーマ」は「ПиковаяДама」、チャイコフスキーのオペラ《スペードの女王》。
（7）ピアニストのパデレフスキ（Ignacy Jan Paderewski）のことか？
（8）ハイドパーク・スクエア Hyde Park Square？

資料解題

徳川頼貞がケンブリッジに留学していた頃の日々は著書『薔庭樂話』で回想されているが、書簡、日記の類は残されておらず詳細の追跡を難しくしている。東京音楽学校学友会誌『音樂』（牛山充主幹）に掲載された1915（大正4）年の通信「英國だより」は頼貞のリアルタイムの声を伝えるドキュメントとして大変興味深い。留学最後の年、頼貞は学業のきびしさに音をあげながらロンドンの音楽会にもしばしば出掛け、留学生活を満喫しているようにみえる。第一次世界大戦下の英国では徴兵制度が敷かれ音楽家たちも次々に出征していた。書簡は当時の緊迫した状況を伝えているが、そうした中で頼貞は楽堂とパイプオルガン設置の構想に基づいて準備を進め、帰国目前の夏にはオルガンの発注を済ませている。

頼貞がパイプオルガンを備えた楽堂の構想を抱いたのは、ケンブリッジで学業を開始した1914年のおそらく後半のことであったろうと思われる。ここで紹介した書簡、および当時上田貞次郎に代って教育係を務めていた小泉信三の上田宛の報告書簡にこの件が現われるのも15年初めのことで、頼貞から父頼倫への提言と希望の書簡が送られたのもほぼ同時期ではないだろうか。頼貞の留学土産となったこの構想の実現は小泉信三の理解と全面的支持によるところが大きい。小泉は上田宛の書簡（1915年2月28日付）でその意義を長文にわたり熱く述べており、頼貞の援護射撃の感がある(9)。

最初の書簡2月19日付に記された「或事情の爲め今年の暮に一寸歸るかもしれません」の「或事情」は東京で進められていた縁談であろう。

冒頭の戦時歌謡 "It's a Long Way to Tipperary" の紹介（日本でも同年9月、セノオ楽譜が全曲を原詞のまま、訳題「チッペラリーの歌」として刊行している）を除けば、すべて友人田村寛貞に宛てた私信の掲載で、田村はこの年1月に初めて頼貞に書簡を送ったようである。

田村寛貞（1883 ～ 1934年）は、陸軍中将田村怡与造（いよぞう）の長男。学習院、東京帝大（美学専攻）卒。当時東京音楽学校教授。学習院の先輩で「音楽奨励会」の創設を通じて親しい。白樺派の同人で、トルストイとの文通でも知られ、ハンスリックの「音楽美学」の紹介者でもある。1925（大正14）年の南葵音楽事業部創設時より評議員を務め、ドイツ留学時（1927年）にマックス・フリートレンダー Max Friedlaender（1852 ～ 1934年）の蔵書の一部を南葵音楽図書館に受入れるべく尽力している。（林淑姫）

ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・カレッジ
徳川頼貞著『薔庭樂話』（1943）より

（9）小泉信三は書簡のなかで、「若し日本に将来西洋音楽が興り得るものとすれば、やりやうに依っては頼貞様の事業は其方面の歴史に残る事――少なくも泰西戯曲の輸入、演劇革新の方面に於ける自由劇場位の功績を挙げる事――が出来ると思はれます。世間には知られないでも其方面の人丈けには永く記憶される丈けの価値ある事業だと思ひます。」以下その意義について縷々述べ、上田貞次郎に周囲の理解を促すよう懇請している（『小泉信三全集 25 上』文藝春秋 , 昭和 47）。

収蔵資料　目録と紹介

南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定

調査研究・教育普及・閲覧支援業務の一環として、標記の調査と検討がおこなわれている。

背　景

1.『蔵書目録（貴重資料）』（1970年）と現在

現在、南葵音楽文庫にあって「貴重資料」とされている資料群は、1970年までに、当時の南葵音楽文庫に対する価値観、とりわけ西洋音楽史の研究に資する資料としての視点が強く意識されたなかで選択された。1967年に開催された「南葵音楽文庫　特別公開」展覧会の、西洋音楽史の視点からなされた構成、関与した研究者たち、実際に整理を担当した若手の研究者たちにとって、この視点は自明のことであり、他の視座はほとんど考慮されてなかったように思われる。

とはいえ、その選択は大変優れており、音楽史的にみて貴重な資料は、1970年に出版された『蔵書目録（貴重資料）』にほとんど収載されている。また、音楽書、楽譜以外の貴重な資料についても、同目録の音楽外資料として収録されている。

この目録刊行から半世紀を経た現在、依然として本文庫は、西洋音楽史の研究に関わる重要な資料を多数所蔵していることに変わりはない。一方で、以下にあげる状況も生まれてきている。

(1) 音楽史研究の進展から、所蔵している研究書が、いわば古典的な文献になった。
(2) デジタル化による知の共有化がすすみ、資料を所蔵している意味や意義が変質した。
(3) 音楽史研究の幅が広がり、作品研究、作家研究中心から、受容史、演奏史、社会史等に拡大し、方法論においてもニュー・ミュジコロジーはじめ、新しい方法や手法が拓かれている。
(4) 日本における洋楽とその歴史への関心、資料の整備（遠山音楽財団付属図書室1966年～）および山田耕筰をはじめとする多くの音楽家についての研究公刊。

このような環境の変化にあって、南葵音楽文庫についても、ただ西洋音楽史資料の宝庫といった視点からだけではなく、複眼的な視座から所蔵している資料の価値を見いだす必要がうまれている。

2. 音楽図書館として

南葵音楽文庫を、所蔵している資料（図書、楽譜）にとどめることはできない。南葵音楽文庫がたどってきた歴史、とりわけ音楽図書館としてのわが国における草分け的な位置は大きい。従来、この点については論じられたり、評価されたりすることは、ほとんどなかった。

所蔵資料のなかには、1世紀前に、理想の音楽図書館をもとめ、探索し、探究し、思考し、選択し、そして実践したときに、参照した、生成された資料が含まれている。この点への視座を加える必要がある。

3. 日本近代音楽史の一証言として

日本近代音楽は、これまでおもに作曲家とその作品、また演奏家ないし演奏団体の活動を軸に語られてきた。そこに、わずかな数の音楽評論家を加えられよう。それに対し、徳川頼貞が拓いた活動は、音楽資料の蒐集や公開、音楽堂の建設とその活用といった、他に類例がない先駆的なものであった。また世界の音楽家と交流をもった点でも、その時代において稀有な存在であった。また、その蒐集や公開には、当時の音楽研究者が参加、参画していた。

この一連の活動は、日本の近代音楽史について、ひとつの証言でもある。作曲や演奏を軸とした日本近代音楽史に対し、補完性、対照化、複眼化などにおいて意味があろう。この種の事例は類例がないだけに、また目録や記録が相当数残されているだけに、今後この面からの評価の可能性がある。

選定の目的

『蔵書目録（貴重資料）』（1970年）に記載されてはいない資料のうちから、前項をふまえ、音楽史学のみならず、音楽をめぐる社会史、演奏史、受容史、加えて南葵音楽文庫の形成につながる資料、また広く文化学術的な価値や、書誌学的に重要な資料等を選定することにより、南葵音楽文庫がもつ価値の評価、意義の理解、今日的な魅力を捉え直し、その発信に資する。

選定の方法

当面は、委託事業のなかで、研究員の推薦と合議で選定。必要に応じて各分野の専門家に意見を伺う。選定の数は、調査研究に左右されるため、あらかじめ点数をさだめることは困難である。また、背景の項で指摘したように、複眼的な視座による選定となるため、選定にあたっては、あらかじめおおまかな「ガイドライン」（文末に掲載）を設定し、簡明な「選定理由」を付記する。

選定結果の発表

「貴重資料」は、主に音楽史研究の視点から選定されている。一方、新規に選定する〈重要資料〉は、上記ガイドラインに示したように、多様な視座から選ばれる。そのため、多様で興味深いが、選定の理由については、資料ごとに適切な説明が必要であろう。そのため、発表については、わかりやすい理由説明とその公開がもとめられよう。

1. 選定理由
   簡明な選定理由を、個々の資料ごとに用意する。
2. 発表機会
   年間に2回程度、発表機会を設ける。ミニレクチャーなどの機会に紹介。ホームページでも紹介するなど、南葵音楽文庫資料のもつ多様性や魅力を伝える素材として活用する。
3. 「紀要」への掲載
   選定リストと理由を掲載する。

南葵音楽文庫〈重要資料〉選定結果
平成29年度

1. シャルル・ルルー 《ピアノのための日本行進曲「扶桑歌」》、《日本と中国の歌 第1集》

【選定理由】稀少性　来歴　手沢本　日本近代音楽

日本吹奏楽の師で陸軍軍楽隊の演奏水準を飛躍的に発展させたシャルル・ルルーが、徳川頼倫のリヨン訪問時に贈呈した楽譜。前者は、現在国内で所在が確認されているのはこの1点のみである。詳細は『南葵音楽文庫紀要』第1号, p. 82-83参照。

2. リヒャルト・シュトラウス 《アルプス交響曲》

【選定理由】来歴　手沢本　日本近代音楽

南葵音楽文庫が所蔵する大型スコアおとびパート譜のセットは、フィラデルフィアにおけるアメリカ初演、ニューヨークにおける初演、さらに1934年のプリングスハイム指揮による日本初演でも用いられた。また世界に3点しかない演奏権付きの楽譜でもある。詳細は『南葵音楽文庫紀要』第1号, p. 78-79参照。

3. 松山芳野里 《5つの日本的な歌》

【選定理由】稀少性　日本近代音楽

フランスの音楽出版社スナール社が刊行した室内楽シリーズのなかで、唯一の日本人による作品。凝ったデザインの楽譜で、地の絵もまたテノール歌手であった松山芳野里の作である。詳細は『南葵音楽文庫紀要』第1号, p. 80-81参照。

4. エドワード・ネイラー　序曲《徳川頼貞》（日本で作成された筆写パート譜）

【選定理由】稀少性　来歴　日本近代音楽

徳川頼貞が南葵楽堂の開堂のために委嘱、ケンブリッジ時代の師ネイラーが作曲し、オルガン披露の演奏会で初演された作品。失われたスコアをもとに作成。読売日本交響楽団和歌山公演（2017年12月6日）で再演。詳細は本紀要, p. 82-84を参照願いたい。

5. セルゲイ・プロコフィエフ 《スケルツォ》作品12-10

【選定理由】来歴　手沢本　日本近代音楽

プロコフィエフが亡命途中日本に立ち寄ったときに、徳川頼貞に贈呈した署名入り楽譜である。本資料については本紀要, p. 72-73を参照願いたい。

6. ガブリエル・フォーレ 《シシリエンヌ》

【選定理由】来歴　手沢本

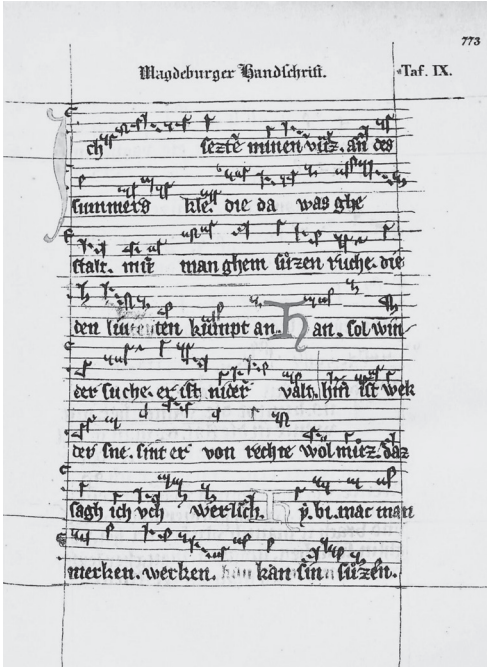
アメル社から出版されたフォーレ《シシリエンヌ》（1898年頃）のチェロとピアノ用の版。ホルマン文庫。ホルマンの蔵書票、サインのほかに、フォーレの署名が表紙とチェロ・パートの右上に残されている。既存の署名に上書きされているが、その理由は不明。ホルマンとサン＝サーンスは、きわめて親しい間柄であり、ホルマンは徳川頼貞をサン＝サーンスに引き合わせている。サン＝サーンスとフォーレも長い間友情で結ばれていた。その交友を証す往復書簡は、一冊の本として上梓され、邦訳もされている。

7. フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン 『ミンネジンガー』（1838年）

【選定理由】稀少性　来歴　音楽史研究

本書はドイツ中世文学研究史の金字塔。リヒャルト・ヴァーグナーのドレスデン時代の書斎には、彼の重要な創作に根源的な影響を与えた書物が所蔵されていた。そのなかでニーベルンク伝説やミンネジンガーに関するフリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン（1780～1856年）の著作群はとくに重要で、

とりわけ『ミンネジンガー』（全４巻）と《タンホイザー》の関連は何度も指摘されてきた。本書の初版所蔵は国内の大学図書館に５セットあるのみである。マックス・フリートレンダー旧蔵。（右は写本の復刻ページ例）



記譜写本の複製ページ例
（フォン・デア・ハーゲン『ミンネジンガー』より）

〈重要資料〉選定ガイドライン

希少性	世界的に残存例が少ない資料である。 日本においては唯一ないしそれに近い資料である。
来　歴	徳川頼貞ないし紀州徳川家との繋がりが明らかな来歴がある。 当該資料にふさわしい重要な個人や団体に由来している。
手沢本	当該資料にふさわしい重要な個人による書き込みがある。 作者等による献辞などが明記され愛蔵されていた資料である。
音楽図書館	南葵音楽図書館の活動から生成された資料である。 日本の（音楽）図書館史を証す資料である。
日本近代音楽	日本近代の音楽活動を伝える一次かそれに準じる資料である。 西洋音楽の受容や普及を伝える資料である。
音楽史研究	西洋音楽史研究のうえでの古典的ないし重要な業績である。 一次資料のファクシミリ版で、今日では入手困難である。

その他、保管保全上の理由を勘案する場合もある。
『蔵書目録（貴重資料）』（1970 年）に記載されている資料は〈重要資料〉の対象とはしない。
上表のガイドラインは、今後追記、変更する場合がある。

ホルマン文庫所蔵　　ジョセフ・ホルマン作品　解題と資料一覧

徳川頼貞とホルマン文庫　解題

不世出のチェリストとの交友を語る部分は、『薔庭樂話』のなかでも最も心温まる一節である。遺志により、チェリストの躰は故郷マースリヒトに埋葬された。だが彼の魂ともいうべき楽譜と楽器は、日本に遺された。1世紀ちかくにわたり、ほとんど人の目に触れることなく伝えられてきた、一千点をこえる楽譜には、自筆はもとより、夥しい加筆や彼への献辞が含まれ、譜面からはいまも彼の演奏が、声そのものが、聞こえてくるかのようである。半世紀をこえる彼の演奏の時空が凝縮された資料群を、僅かな紙幅をもって紹介するのは所詮無理だが、まずは彼自身が書き残した作品から始めたい。むろん、世界のどこよりも南葵音楽文庫に遺っているからである。

徳川頼貞とホルマン
ジョセフ（ヨーゼフ）・ホルマン　Joseph Hollman　（Hollmannと記す場合もある）
1852年10月16日　マースリヒト（オランダ）で生まれる（10月26日とする文献もある）
1926年12月31日　パリで死去（1927年1月1日とする場合もある）

チェリストの略歴

ジョセフ・コルネイユ・フーベルート・ホルマン Joseph Corneille Hubert Hollmanは、1852年10月16ないし26日マーストリヒトの中心部にあるスピル街4番地で、商人のシャルル・ルイ・ユベール・ホルマンとマリア・エリザベト・ユーベルティナ・テオドラ・ルッテンの息子として生まれた。 彼はマーストリヒトで活動していた音楽教師アンドレ・ケラー André Keller（1805～70年）から、はじめてチェロのレッスンを受けている。1866年から1870年までブリュッセル音楽院に学び、チェロをアドリアン＝フランソワ・セルヴェ Adrien-François Servais (1807～66年) に師事するが、すぐに師が亡くなる。一方、フランソワ＝ジョセフ・フェティス François- Joseph Fétis（1784～1871年）およびシャルル・ボスレ Charles Bosselet（1812～73年）に作曲を学んでいる。ホルマンは1870年、17歳で一等賞を獲得しブリュッセル音楽院を卒業した。

その後、彼はパリでレオン＝ジャン・ジャカール Léon-Jean Jacquard（1826～86年）に師事した。ジャカールは、室内楽奏者として活動、アンリ・ヴュータンやアントン・ルビンシテインと親交をもち、1877年以降はパリ音楽院の教授となった。その後ホルマンはサンクトペテルブルクに移り、チャイコフスキーをして「チェロの皇帝」と言わしめたカルル・ダヴィドフ Karl Davidov（1838～89年）にもチェロ奏法を学んでいる。

ホルマンの演奏活動がいつ、どこで始まったかについて詳細を記した文献は見当たらない。しかし、20歳台になった1875年にはパリでソロ・コンサートをおこなったという。

1880年10月、近代指揮法の確立者ハンス・フォン・ビューローがマイニンゲン宮廷楽団の指揮者になる。ホルマンはその楽団のソロ･チェリストを務めた。並行して、ソリストとしての活動もひろ

がり、サン＝サーンスのチェロ協奏曲などにより各地のオーケストラと共演が始まった。

1885年、ロンドンにデビューしたとき、彼はデュオのパートナーとしてサン＝サーンスと共演した。1887年にパリに戻り、ソリストとしてロシア、北欧を含むヨーロッパ各地に演奏旅行を繰りかえしている。その間に、多数の作品が彼に献呈された。

50年に及ぶソリストとしての活動の締めくくりとなる最後の大きな演奏旅行は、70歳をすぎた1922年から23年にかけてのアメリカ、日本を巡る旅であった。彼は愛用していた楽器を日本に残して帰国する。２年半後パリで世を去り、2017年1月6日、市議会、フランス国領事、市の音楽家やオーケストラが参列、演奏するなかで故郷マースリヒトの墓地に埋葬された。

彼の世界各地への演奏旅行とともにあった楽譜一式は、はじめて主のいない最後の長い旅を経て、南葵音楽図書館に収められた。

ホルマン文庫の収蔵と内容

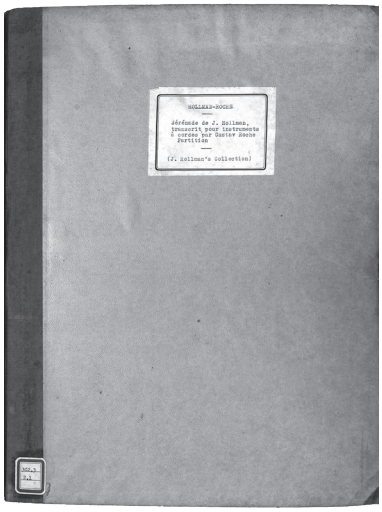
南葵音楽文庫が所蔵するジョセフ・ホルマン旧蔵の楽譜は、前述のように約1000点にのぼる。旧収蔵、すなわち徳川頼貞が館長をつとめていた南葵音楽図書館の所蔵資料で今日まで伝えられている資料群のなかで、点数からみれば１割をこえる。すべて楽譜である。

徳川頼貞との親交からもたらされた資料群である点に疑いをはさむ余地はないものの、その経緯を証す資料は、現時点においては見いだされていない。1929年４月発行の『南葵音樂事業部摘要』第１には、「徳川頼貞公の有に歸し更に本館に保管することになったものである」とのみ記されている。1928年には徳川頼貞のもとに届いていたのであろう。

同書は、ホルマンが遺した楽譜全部であるとし、1030点であると記している。この数は現在「ホルマン文庫」として承継している点数と、数えかたの異同があろうが、ほとんど一致している。90年余、欠けることなく保管されてきたとみて良いであろう。

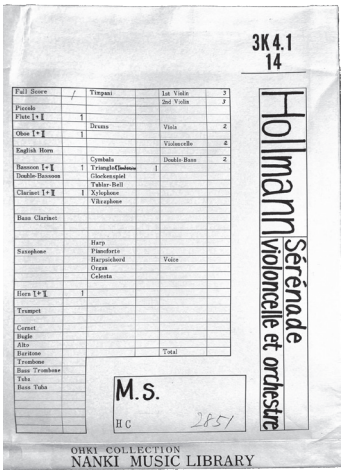
到着後整理が進められたが、南葵音楽図書館閉鎖までに、どのように、またどこまで進捗したかは詳らかではない。少なくとも、カミングス文庫のような印刷された目録は出版されなかった。

戦火をくぐり抜け、度重なる移動に耐えたホルマン所縁の楽譜は、日本到着から40年余となる1970年前後に、ふたたび整理する機会に恵まれた。東京駒場で南葵音楽文庫が仮公開された時期、ホルマン文庫の整理もおこなわれている。このとき、ホルマン文庫に含まれる多数のピース楽譜、つまり１ページから十数ページの、大抵の場合１ピース（曲）のみの楽譜は、特注と思われる堅牢な厚紙バインダーに収められた。曲名をタイプ打ちした紙片が貼られたのもこの時である。



堅牢な厚紙バインダー

ホルマンは、オーケストラと共演する際にはパート譜と総譜の一式を携行した。そのセットは、この機会に、やはり特注した丈夫な紙袋に入れられて保存されるようになった。この紙袋は、ホルマン由来の資料に限らず、他の資料と共用



楽譜用の紙袋

である。

ホルマンが遺した楽譜は多岐にわたる。作曲家がホルマンに献呈した作品の自筆楽譜、作曲家が署名そえてホルマンに贈呈した印刷楽譜、初演に間に合わせるために渡された印刷楽譜の試し刷り（epreuve）、ホルマンが自らの演奏のために筆写（ときには一部改訂）した有名なチェロ曲の独奏パート、その作品のホルマン自筆による総譜、パート譜のセット、自身の演奏のために書き込みをした印刷楽譜、演奏旅行の先々でオーケストラ奏者が書き込みをし、署名をしたパート譜、伴奏者のために用意し頻用されたピアノ譜、徳川侯爵に献じた作品の印刷楽譜、自作のチェロ作品の自筆楽譜（未出版含む）や印刷楽譜、自作の歌曲、未完成作品の草稿が含まれている。そのほぼ全てに、彼の蔵書票が貼り付けてある。

ホルマン自作の資料をめぐって

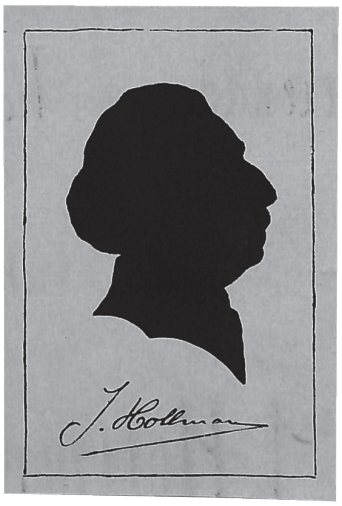
楽器演奏や指揮における活動と同等の重要な作曲活動をおこなった音楽家たちに較べれば、ホルマンによる作曲の活動は控えめであった。むろんそのほとんどがチェロのための作品である。彼のテクニックや演奏の美質について語られた言葉はいくつも残されているが、自身の手による作品は、彼の演奏にも通じる特質をそなえているとも思われる。

しかし、彼の作品を網羅するリストは今まで作成されたことがない。故郷マースリヒトの作曲家財団Stichting Maastrichtse Componisten のウェブサイト（オランダ語）にあるホルマンのページに、その経歴とともに主要な印刷楽譜の一覧が掲載されている。

また、フランス国立図書館音楽部は、印刷楽譜および自筆書簡を、あわせて50点ほど保管している。

いずれも、網羅性からはほど遠い。南葵音楽文庫が所蔵するホルマンの楽譜もまた、今回の調査で、すべてを網羅してはいない事実があきらかになった。他方、他にみられない自筆の作品や未完とおぼしき作品や、印刷されていない編曲譜もある。

この種の情報の統合が、ホルマンの自作を調査するうえで、またホルマンの全体像や、19世紀から20世紀にいたる演奏芸術を考察するうえでも重要であるとの観点から、この礎となることを願って、あえて南葵音楽文庫が所蔵していない資料のリサーチも加味して、一覧を作成した。もとより短期間で完遂できる作業ではなく、関係者による補完や修正により、より精度のたかいリストに育つことを願っている。　（美山良夫）



ホルマンの蔵書票

ジョセフ・ホルマン作品資料一覧

この一覧は、南葵音楽文庫に含まれるジョセフ・ホルマン由来の楽譜（「ホルマン文庫」）から、ホルマン自作および自作に関連する資料を抽出するとともに、他の図書館等において所蔵が確認できる資料を加え、ホルマンのこの分野における活動を総覧できるように作成した。なおホルマン文庫は目下整理中であり、作業等の関係で表示できない項目は確認中と記した。文献上は存在が推定できても未確認の場合は含めていない。未確認の項目は省略した。参照は、楽譜を閲覧できるサイトを示している。今後も調査をつづけ網羅性を高めたい。

1.《アダージェット Adagiette》

チェロとピアノ伴奏のための pour violoncelle, avec acc^{t} de piano
献呈：Ferdinand de Liliencron
出版譜：Paris : A. Durand et fils
出版年：n. d. [1902]
プレート番号：D. & F. 6035
Score (3p.) + Part (1p.) ; 36cm
参照：IMSLP
【南葵：所蔵なし】

作品を献呈されたリリーエンクロン（1820 ～ 1912年）は、ドイツの文献学者。1900年以後没年まで、『ドイツ音楽遺産集成 *Denkmäler deutscher Tonkunst*』出版の主幹を務めた。

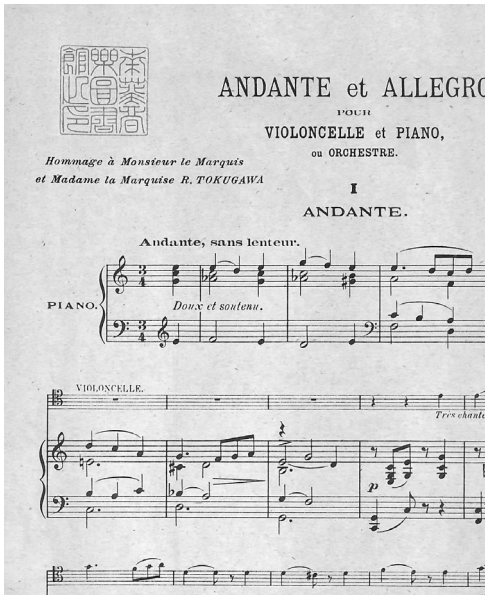
2.《アレグロ・ド・ブラヴール Allegro de bravoure》

チェロとピアノ伴奏のための pour violoncelle, avec accompagnement de piano
献呈：Paul Landowski
出版譜：Paris : L. Grus et Cie
出版年：n. d.
プレート番号：L. G. & Cie. 6301
Score (11p.) + Part ;
【南葵：確認中】

作品を献呈されたポール・ランドウスキ（1875 ～ 1961年）は、ポーランド系フランス人の彫刻家。記念碑的作品を多数残した。ヴァイオリン奏者で作曲家アンリ・ヴュータンの孫であり、作曲家マルセル・ランドウスキの父でもある。タイトルにある「ブラヴール」とは、技巧的に達者な、華やかの意。

3.《アンダンテとアレグロ Andante et Allegro》

チェロと管弦楽あるいはピアノ伴奏のための pour violoncelle, avec accompagnement d'orchestre ou de piano / Reduction avec piano
献呈：Hommage à Monsieur le Marquis et Madame la Marquise R. Tokugawa
出版譜：Paris : Heugel
出版年：[1912]
プレート番号：H. & Cie. 25,689
Score (16p.) + Part (6p.) ; 36cm
【南葵：3G1.3/5.1 ; 3G1.1/1.4 ; 3G1.1/1.5】
〖演奏〗2008年1月20日　JTアートホール アフィニス　渡部玄一（チェロ）、丹千尋（ピアノ）
〖録音〗同年1月17、18日　Hakuju



徳川夫妻への献辞

Hall　演奏者同じ　ⓒ慶應義塾大学DMC研究センター

「R[aitei] Tokugawa 侯爵夫妻に献ずる」と楽譜の冒頭に刻まれた作品。楽譜にはコピーライトの年号1912年が記載されているが、プレート番号から印刷は1912年末であったと判明（参照：Anik Devried, François Lesure, *Dictionnaire des éditeurs de musique français*, Vol.3 “De 1820 à 1914” (Genève: Minkoff, 1979-88).）。

当時徳川頼貞は留学前であり、献辞は結婚後、おそらくはホルマンと親交を重ねた1921年の渡欧時かそれ以後に追記されたのであろう。

なおこの献辞は、南葵音楽文庫が所蔵している3点すべてに見られる。

ホルマンが徳川頼貞に献呈した《アンダンテ・カンタービレ *Andante Cantabile*》(1923年5月26日南葵楽堂でホルマン自身が演奏)との関係は不明。本紀要, p. 33参照。

4.《アンダンテ・レリジオーゾ Andante Religioso》

チェロとピアノあるいはオルガン伴奏のための pour violoncelle, avec accompagnement de piano ou d’orgue
献呈：Hommage à Lady Farqhuar
出版譜：Paris : A. Durand et fils
出版年：[1902]
プレート番号：D. & F. 6034
Score (2p.) + Part (1p.) ; 36cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.4/11.2】

5.《アリア：ローベルト・シューマンのソナタ 作品11より Aria de la Sonate Op. 11 de Robert Schumann》

J. ホルマンによるチェロとピアノのためのトランスクリプション transcript pour Violoncelle et Piano par J. Hollman
献呈：Madame de la Comtesse A. de Bylandt
出版譜：Bruxelles : Schott Frères
出版年：n. d.
プレート番号：3722
Score (3p.) + Part (1p.) ; 36cm

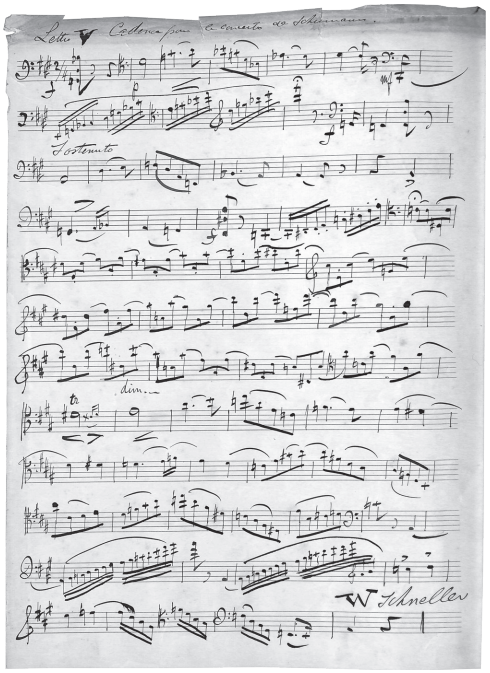
6.《ヴァン・ヘルデンのベネディクトゥス Benedictus de Van Helden》

チェロとピアノのためJ.ホルマン編曲 arrangé pour violoncelle avec accompagnement de piano
献呈：Guillaume III Roi des Pays-Bas
出版譜：Paris : A. O'Kelly
出版年：[1878]
【南葵：所蔵なし】

作品を献呈されたのはオランダ国王ウィレム3世（1817～90年）。徳川家定の江戸幕府長崎港に外輪蒸気船を寄贈した。

7.《カデンツァ：ローベルト・シューマンの協奏曲（イ短調 作品129）のための Cadence pour le Concerto (la mineur op. 129) de R. Schuman》

自筆譜 Autograph



カデンツァ自筆楽譜

成立年：n. d.
Part (1p.) ; 34cm
【南葵：3G2.2/3.5】

8.《カヴァティーヌ Cavatine》
チェロとピアノ伴奏のための pour violoncelle, avec accompagnement de piano
献呈：Léo Schuster
出版譜：London : Augener
出版年：188-, 1934
プレート番号：no. 7694; 8432
Score (2p.) + Part (1p.) ; 36cm
【南葵：確認中】

9.《愛の歌 Chanson d'amour》
① チェロあるいはヴァイオリン（フルート）とピアノ伴奏のための歌曲 Melodie avec accompagnement de Violoncelle ou Violon (ou Flute) et Piano
No.1 en sol pour Soprano ou Tenor
No.2 en fa pour Mezzo-sop ou Baryton
No.3 en sol pour Chant et Piano
献呈：Hommage à Madame Christine Nilsson
出版譜：Bruxelles : Schott Frères
出版年：n. d. [1888]
プレート番号：S.F. 3697 (1), (2), (3)
Score (6p.) + Part (1p.) ; 36cm
参照：(No.2) IMSLP
【南葵：確認中】
　作品を献呈されたのはスウェーデンのオペラ歌手クリスティーナ・ニルソン（1843～1921年）。彼女はアデリーナ・パティと人気を二分するほどの名声を博した。この作品には、ホルマンによるチェロとピアノのための版（プレート番号 S. F. 3698）も用意され、同時期に出版されている。1909年にはボストンで、さらにニューヨークでも出版された。
② F. サラベール編曲 ヴァイオリンとチェロ独奏つき管弦楽のための Arrangée par Francis Salabert, pour violon et violoncelle solo et orchestre, avec piano conducteur
出版譜：Paris : Francis Salabert
出版年：1929
【南葵：所蔵なし】
③ V. ハリス編曲チェロ独奏付き女声3部合唱のための Love song (chanson d'amour) 3 part song for woman's voice
出版譜：Boston : Oliver Diston
出版年：c. 1923
Score (10p.) ; 27cm
プレート番号：74619
【南葵：3H1.6/2.4】
　編曲者ヴィクター・ハリス（1869～1943年）はニューヨークで活動した作曲家、声楽教師、指揮者で、メトロポリタン歌劇場の声楽コーチとしても活躍した。この編曲は、彼が設立したシシーリア・クラブ合唱団のために用意された。チェロにかえてアルト独唱で演奏も可能とされている。年代からホルマンがニューヨーク滞在時に成立し、共演した可能性も考えられよう。同合唱団はニューヨーク・シシーリア合唱団と改称。

10.《協奏曲第2番 作品12 2me Concerto Op. 12》
チェロと管弦楽のための Pour Violoncelle et Orchestre
献呈：Charles Davidoff
出版譜：Bruxelles : Schott Frères
出版年：1886
プレート番号：S. F. 3600
① 管弦楽パート譜 Parties d' Orchestre
Solo (8p.) + 16 Parts ; 34cm
【南葵：3K4.5/20】
② ピアノ版 Reduction avec piano
Score (27p.) + Solo (8p.) ; 34cm
【南葵：3G1.3/13.9】
　②がさらに1部ホルマン文庫に含まれている【3G1.3/13.8】。
　作品を献呈されたカール・ダヴィド

フ（1838 ～ 89年）は、ホルマンがペテルブルクで師事したロシアのチェロ奏者。彼が用いていたチェロは、ジャクリーヌ・デュプレを経て、現在はヨーヨー・マが使用している。

パート譜への書き込みから、演奏機会のいくつかが明らかである。1886年11月31日（アンジェ？）、1887年ブリュッセル、1892年アムステルダム、1898年ドレスデン、1902年8月16日（不明）、1912年1月31日オランダ（都市不明）。

11.《ジョルジュ・ローゼンルケルの炬火の踊り Danses aux flambeaux par Georges Rosenlecker》

ヴァイオリン/チェロとピアノのためのトランスクリプション transcription pour violon et piano ; transcription pour violoncelle et piano
No. 1 Abbazia, rapsodie
No. 2 Place de l'Eglise
No. 3 Intermèdes sous les platanes
出版譜：Paris : E. Costel
出版年：[1905]
Score (12p.) + Solo (3p.) ; 35cm
【南葵：所蔵なし】

原曲の作曲者ジョルジュ・ローゼンルケル（1849 ～ 1928年）はル・アーヴル生まれの作曲家。セザール・フランクに学ぶ。歌曲のほか1886年にリエージュで初演されたオペラ《オンディーヌ伝説 *La légende d'Ondine*》がわずかに知られている。「炬火の踊り」とは、かがり火を手に持っての踊りを広く指す。16世紀後半、マルグリット・ド・ヴァロワが炬火をもちながらブランルを踊り、宮廷の貴紳たちを魅了したという故事が想起されよう（ブラントーム『ダーム・ギャラント艶婦傳』）。

12.《悲歌 Elégie》

チェロとピアノ伴奏のための Pour Violoncelle, avec accompagnement de Piano
献呈：Madame Albéric Lunden, née Valentine van Hal
出版譜：London : Stanley Lucas, Weber
出版年：n. d.
プレート番号：s. l. w. 2187
Score (3p.) ; 32cm
【南葵：3G1.2/15.2】

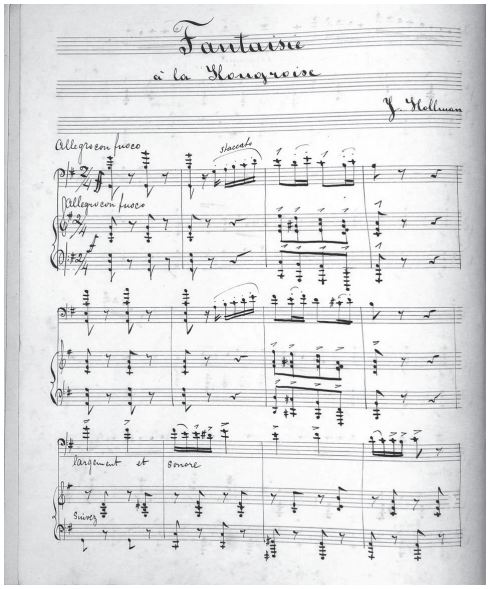
作品を献呈されたのはアルベリク・ルンデン（1840 ～ 99年）夫人のヴァランティーヌ・ヴァン・ハル（1857 ～ 1914年）。ワイマールで美術学校の校長でありアントウェルペンの王立芸術アカデミーの教授になっていたシャルル・ヴェルラは、1881年にフランツ・リストを同地に招聘するために彼に宛てた手紙のなかで、「ヴァランティーヌ・ヴァン・ハル嬢はアントウェルペンきってのピアニストで、美しく大柄なフランドルの女性」と紹介している（1881年1月29日付け。ブダペスト国立図書館写本部蔵）。

13.《恍惚 Extase》

チェロとピアノ伴奏のためのメロディ Mélodie pour violoncelle, avec accompagnement de Piano
献呈：Hommage à Elvira Henderson
出版譜：Mainz : Schott
出版年：n. d. [c.1893]
プレート番号：25123
Score (2p.) + Part (1p.) ; 34cm
参照：IMSLP
【南葵：所蔵なし】

14.《ハンガリー幻想曲 Fantasie à la Hongroise》

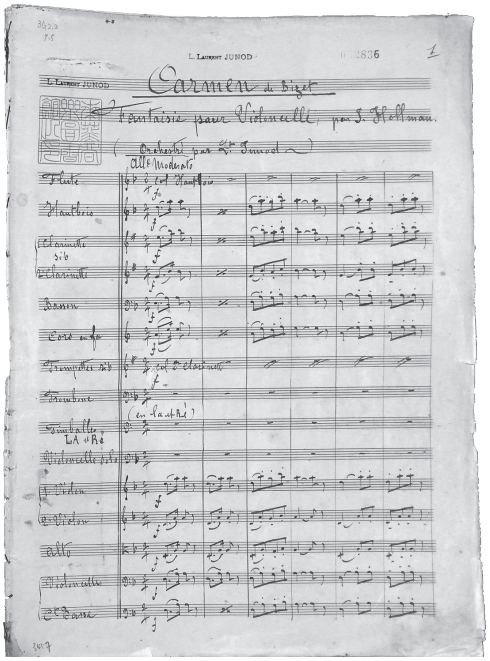
チェロとピアノのための pour violoncelle et piano
① 自筆譜 Autograph
成立年：n. d.
Score (19p.) ; 34cm
【南葵：3G2.2/6.6】
② 出版譜：Paris : H. Lemoine



《ハンガリー幻想曲》の自筆譜

出版年：[1902]
プレート番号：
Score (11p.)
【南葵：所蔵なし】

15.《カルメン 幻想曲 Carmen Fantasie》
① チェロとピアノ伴奏のための pour Violoncelle avec accompagnement de Piano
献呈：Hommage à Madame De Jean
出版譜：Paris : Choudens père et fils
出版年：n. d. [c. 1885]
プレート番号：A.C.6491
Score (12p.) + Part (5p.) ; 36cm
参照：IMSLP
【南葵：3K2.3/11】
〖演奏〗2018年10月2日　兵庫芸術文化センター　林 裕（チェロ）、佐竹裕介（ピアノ）
②a ホルマン編曲によるチェロと管弦楽のための pour Violoncello et Orchestre sur Carmen de Bizet orchestré par Joseph Hollman
自筆譜？ Manuscript (Autograph?)
成立年：n. d.
Score (39p.) ; 36cm
【南葵：3G2.2/10.5】
②b 同上 ibid.



《カルメン幻想曲》②管弦楽版

手稿譜 Manuscript (unknown hand)
成立年：n. d.
12 parts ; 36cm
【南葵：3K2.3/11】
③ ジュノー編曲によるチェロと管弦楽のための pour Violoncello par J. Hollman orchestré par Laurent Junod
手稿譜 Manuscript (autograph de Laurent Junod)
成立年：1889年7月28日
Score (41p.) ; 36cm
【南葵：3G2.2/7.5】
　管弦楽版編曲者ローラン・ジュノーはジュネーヴで活動した音楽家。詳細は不明。

16.《小曲集 Pieces》
チェロとピアノのための pour Violoncelle et Piano
No. 1 Romance
No. 2 Mazurka
No. 3 Rêverie
No. 4 Gavotte
出版譜：Paris : Henri Heugel
出版年：1884
プレート番号：H.7900 (1)-(4)

No. 1 ロマンス Romance
献呈：Melle Elisabeth Scharwenka
Score (4p.) + Part (1p.) ; 35cm
【南葵：3G8.4/5.10】
　作品を献呈されたエリーザベト・シャルヴェンカは1880年代前半に活動したメゾ・ソプラノ歌手。ポーランド系ドイツ人のピアニスト・作曲家フランツ・クサヴァー・シャルヴェンカの従妹。
No. 2 マズルカ Mazurka
献呈：Adèle de Bylandt
Score (5p.) + Part (2p.) ; 35cm
【南葵：3G8.4/5.11】ソロ・パート欠
【南葵：3G8.4/5.12】
No. 3 夢想 Rêverie
献呈：Don Louis Roi de Portugal
Score (4p.) + Part (1p.) ; 35cm
【南葵：3G1.4/9.1】
作品を献呈されたのはポルトガル国王ルイス1世（1838 ～ 89年）。
No. 4 ガヴォット Gavotte
献呈：Jules Delsart
Score (6p.) + Part (2p.) ; 35cm
【南葵：3G1.2/4.2】
手稿譜Manuscript (unknown hand)
成立年：n. d.
Score (8p.) ; 37cm
【南葵：3G2.2/5.2】
　作品を献呈されたのは北フランス出身のチェロ奏者ジュール・デルサール(1844 ～ 1900年)。パリ音楽院に学んだデルサールは各地を演奏旅行、この作品が出版献呈された1884年に母校の教授に迎えられた。その後ヴィオラ・ダ・ガンバに関心をもち、ルイ・ディエメらと古楽器協会を設立し、活動した。

17.《ハッピー・デイズ Happy Days》
Violoncello ad libitum
Strelezki,Anton., Happy days. song. [Text: Henly Thompson] for voice and piano with Violin,Flute ad libitum by Guido Papini. or Violincello ad libitum by J.Hollman
出版譜：London : Joseph William
出版年：1890 / 1905
プレート番号：8599 / 9171
Score (8p.) ; 34cm
【南葵：所蔵なし】
　SP時代にはしばしば聴かれたこのシート・ミュージックに、ホルマンは任意に加えられるチェロ・パートを提供していた。

18.《即興 Improvisation》
チェロのための for Violoncello
自筆譜 Autograph
成立年：n. d.
Score (5p.) + Part (2p.) ; 35cm
【南葵：3G2.3/1.3】
　マースリヒト作曲家財団のウェブサイトには、同名の手稿譜があると記されているが、同じ作品を指しているかは未詳。ただし"30 august 98"との記載があり、成立は1898年8月30日を下ることはないと註記されている。

19.《間奏曲 Intermezzo》
① チェロとピアノのための pour Violoncelle et Piano
献呈：Mon Ami Dumont St.Priest
出版譜：Paris : A. Durand et fils
出版年：[1903]
プレート番号：D. & F. 6206
Score (8p.) + Part (2p.) ; 35cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.2/1.3】
② チェロと弦楽のための pour Violoncelle et Orchestre à cordes
手稿譜 Manuscript (unknown hands, partly autograph?)
成立年：n. d.
Score (10p.) ; 37cm
【南葵：3G2.2/5.5】

20.《マズルカ第2番 Deuxième Mazurka》
チェロとピアノ伴奏のための pour le

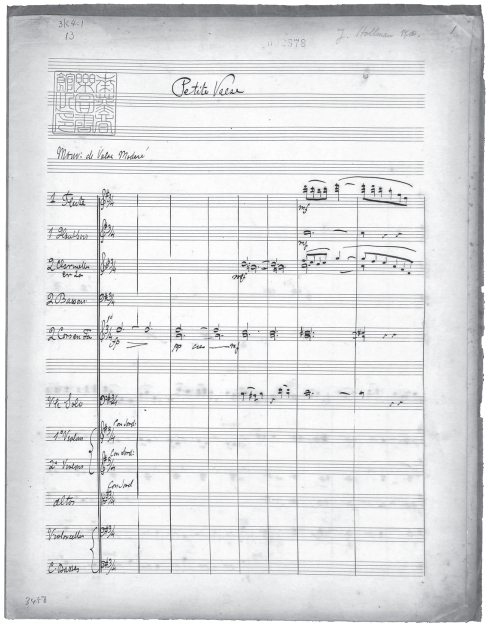
violoncelle avec accompagnement de Piano
献呈：Wilhelmine, Reine de Pays-Bas
出版譜：London : Novello, Ewer & Co.
出版年：1894
プレート番号：9950
Score (5p.) + Part (2p.) ; 34cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.1/15.2】

21.《パデレフスキのメヌエット 作品14 Menuet pour Piano par J.-J. Paderewsky op.14》
チェロとピアノ伴奏のためのJ. ホルマン編曲 pour violoncelle, avec accompagnement de piano, Arrangé par J. Hollman
献呈：Madame Annette Essipoff-Leschetizky
出版譜：Berlin : Bote und Bock
出版年：1908
プレート番号：B. & B. 13461
Score (5p.) ; 34cm
【南葵：3G1.5/1.3；3G1.5/1.4】
　作品を献呈されたのは帝政ロシアのピアニスト、アンナ・ニコライェヴナ・エシポヴァ＝レシェティツキー（1851～1914年）。1893年から1908年までペテルブルク音楽院教授として、レオニード･クロイツァーやセルゲイ･プロコフィエフらの師となった。原曲は《6つの演奏会用ユモレスク》作品14に含まれ、クライスラーによるヴァイオリンとピアノのための編曲でも有名。

22.《4つの易しい小品 Quatre Morceaux faciles》
チェロとピアノ伴奏のための pour Violoncelle, avec accompagnement de Piano
No. 1 Berceuse
No. 2 Air de Ballet
No. 3 Pourquoi? (Warum?)
No. 4 Tempo di Mazurka
献呈：Dom Luiz 1er Roi de Portugal et des Algarves
出版譜：Bruxelles : Schott Frères
出版年：1887
プレート番号：S.F. 3710(1) - (4)
Score (2p.), (4p.), (1p.), (2p.) ; 35cm
参照：IMSLP
【南葵：所蔵なし】

23.《6つ小品 Six Morceaux》
① チェロとピアノ伴奏のための pour Violoncelle, avec accompagnement de Piano
出版譜：London : Novello, Ewer & Co.
出版年：c. 1892
参照：IMSLP
No. 1 伝説 Légende
献呈：à mon ami Eugène Zilcken
Score (4p.) + Part (2p.) ; 34cm
No. 2 ピッツィカート Pizzicati
献呈：à mon ami Ernest Ludewig
Score (6p.) + Part (2p.) ; 34cm
No. 3 暁の歌 Aubade
献呈：Hommage respectueux à Lady Brassey
Score (5p.) + Part (2p.) ; 34cm
No. 4 アンダンテ Andante
献呈：à mon ami Léo Stern
Score (6p.) + Part (1p.) ; 34cm
No. 5 小さなワルツ Petite valse
献呈：à mon ami le Dr. Robson-Roose
Score (5p.) + Part (2p.) ; 34cm
No. 6 タランテラ Tarantelle
献呈：a mon ami J. Mossel
Score (9p.) + Part (3p.) ; 34cm
【南葵：全曲：3K4.1 / 13 ; No. 6：3G1.2 / 15.5 ; 他の曲は単独では所蔵なし】
〖演奏〗No. 5：1923年　ホルマン来日公演 ; No. 1, 5, 6：2008年1月20日 JTアートホール アフィニス　渡部玄一（チェロ）、丹千尋（ピアノ）
〖録音〗全曲：2008年1月17、18日 Hakuju Hall　渡部玄一（チェロ）、丹千尋（ピアノ）　ⓒ慶應義塾大学DMC

研究センター
② チェロと管弦楽のための
pour Violoncelle et Orchestre.
No. 5 小さなワルツ Petite valse
手稿譜 Manuscript (unknown hand)
成立年：1904
Score (14p.) ; 36cm
【南葵：3K4.1/13】



《小さなワルツ》②管弦楽版の冒頭ページ

24.《E. マテの夜想曲
Nocturne Édouard Mathé》
自筆譜 Autograph
成立年：n. d.
Part (2p.) ; 35cm
【南葵：3G2.2/5.3；3G2.2/5.4】

無声映画に精通しているなら、俳優エドゥアール・マテや、彼が主演した「夜想 *Le Nocturne*」（1919年）を思い出す人がいるかもしれない。ホルマンの自筆譜は、この映画とは関係がなく、同姓同名の作曲家（1863 ～ 1936年）の作品に関わるものである。

ヴェルサイユ生まれのマテは、独学でピアノを演奏して周囲を驚かせ、パリ音楽院に入学してからの成績も飛び抜けていたという。彼が書いたピアノ曲はコスタラ社からおもに出版された。そのピアノ曲が【3G2.2/5.4】である。この作品から旋律部分を抜き出し、チェロの独奏用に準備したのが【3G2.2/5.3】にあたる。

25.《J. マスネのスペインの夜
Nuit d'Espagne 》
出版譜：Paris : Heugel & Cie
出版年：n.d. [1893-94]
プレート番号：H. et Cie. 7990
Part (6p.) ; 35cm
【南葵：所蔵なし】

マスネの著名な管弦楽曲《絵のような風景 *Scènes Pittoresques*》の第2曲である〈舞踊曲 *Air de Ballet*〉の音楽は作曲者により歌曲に編まれ、管弦楽版初演のすぐ後に出版された。その再版がウージェル社から出版されるに際して、ホルマンは任意に加えられるチェロ・パートを提供した。

26.《ウィレム・ヴァン・ナッソウの旋律による演奏会用パラフレーズ Paraphrase de concert sur l'air Wilhelmus van Nassouwen》
チェロとピアノのための pour Violoncelle et Piano
献呈：Sa Majesté Guillaume III
【南葵：所蔵なし】

オランダ国王ウィレム3世（1817 ～ 90年）の70歳を祝賀して1887年に作曲した。ウィレム・ヴァン・ナッソウの旋律とは、オランダの国歌の旋律のことで、幼いモーツァルトも同じ旋律による変奏曲を書いている。この作品情報は、前出のマースリヒト作曲家財団が提供するホルマン作品リストに因るが、出版楽譜についてはその有無もふくめ未詳。

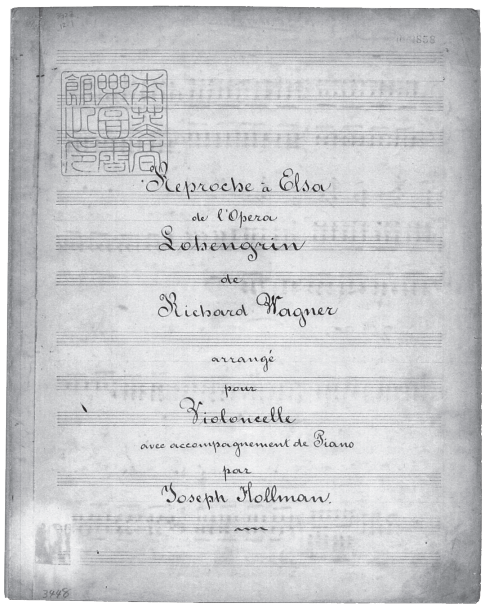
27.《あなたが薔薇を見せてくれるのに
Quand vous me montrez une rose》
歌とピアノのためのロマンス、チェロのオブリガート伴奏つき
romance pour chant et piano, avec

accompagnement de violoncelle obligato
献呈：Mme J. Piedallu
出版譜：Paris : A. Durand et fils
出版年：1910
プレート番号：D. & F. 7904
Score (4p.) + Part (2p.) ; 35cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.2/7.4】
　フランスの多くの作曲家によって付曲された詩の作者フランソワ･コペ（1842～1908年）は、高踏派の詩人で、多くの詩集や戯曲を発表、マラルメと同じ女性を熱愛し、関連した詩を多数残した。
〖演奏〗2008年1月20日　JTアートホール アフィニス　西けい子（ソプラノ）、丹千尋（ピアノ）、渡部玄一（チェロ）
〖録音〗同年1月17、18日　Hakuju Hall　演奏者同じ　ⓒ慶應義塾大学DMC研究センター

28.《ピッツィカート、レオ・ドリーブのバレエ〈シルヴィア〉より Pizzicati. Sylvia, ballet de Léo Delibes》
チェロとピアノ伴奏のためのトランスクリプション
出版譜：Paris : H. Heugel
出版年：[1887]
【南葵：所蔵なし】

29.《前奏曲とレチタティーヴォ Preludio con recitativo》
チェロとピアノのための pour Violoncelle et Piano
献呈：未詳
自筆譜 Autograph
成立年：1903
Score (6p.)
【南葵：3G2.2/14.3】
　最後に走り書きされた「1903」を成立年とした。また献呈が記されている。未出版作品と考えられる。

30.《R. ワーグナーの歌劇ローエングリンよりエルザへの宥め Reproche à Elsa de l'Opera Lohegrin de Richard Wagner》
チェロとピアノ伴奏のための編曲 arrangé pour Violoncelle avec accompagnement de Piano
自筆譜 Autograph
成立年：n. d.
Score (6p.) ; 34cm
【南葵：3G2.2/12.1】
　南葵音楽図書館で楽譜の出版が計画されたが、実現せず。
〖録音〗2008年1月17、18日　Hakuju Hall　渡部玄一（チェロ）、丹千尋（ピアノ）ⓒ慶應義塾大学DMC研究センター



J.ホルマン自筆のタイトル・ページ

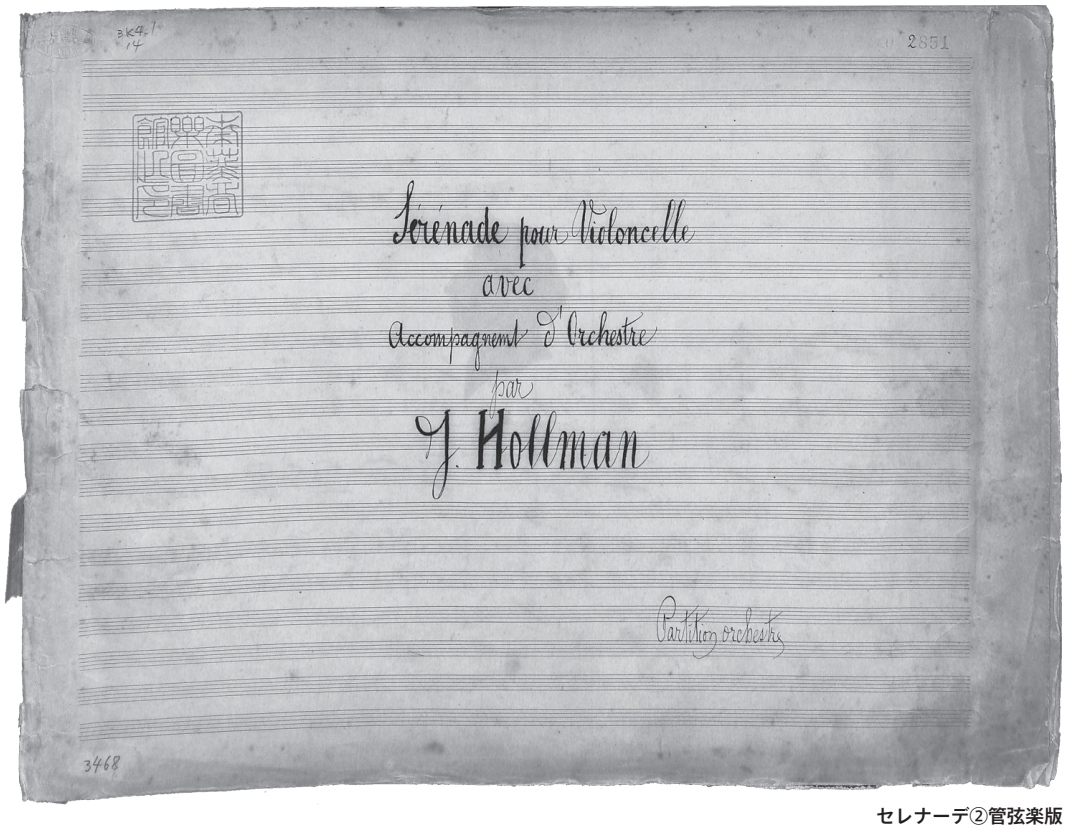
31.《A. ルーボーのロマンス ホ長調 Romance en Mi de André Roubaud》
チェロとピアノのためのトランスクリプション Transcrit pour Violoncelle et Piano
自筆譜 Autograph
成立年：n. d.［1919年以降］
Part (2p.) ; 35cm
【南葵：3G2.2/15.3】
　アンドレ・ルーボーがヴァイオリンとピアノないし管弦楽のための作曲、パリ

のリコルディ社から1919年頃出版されたピアノ伴奏版の楽譜とともに残された自筆譜。エドゥアール・マテに献呈された原曲の、ヴァイオリンのパートをチェロ用に移している。

32.《無言歌 Romance sans Paroles》
チェロとヴァイオリン伴奏のための
pour violoncelle,avec accompagnement de violon
献呈：Madame la baronne de Foelckersahm
出版譜：Paris : H. Le Boulch
出版年：[1882]
プレート番号：H. L. B. 7
Score (-p.) ; 36cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.1/1.1】

33.《紡ぎ車 Le Rouet》
チェロとピアノのための練習曲 étude pour violoncelle et piano
献呈：Madame Elise Roger
出版譜：Paris : A. Durand et fils
出版年：[1903]
プレート番号：D. & F. 6207
Score (8p.) ; Part (3p.) ; 36cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.5/4.13】
〖演奏〗1923年　ホルマン来日公演

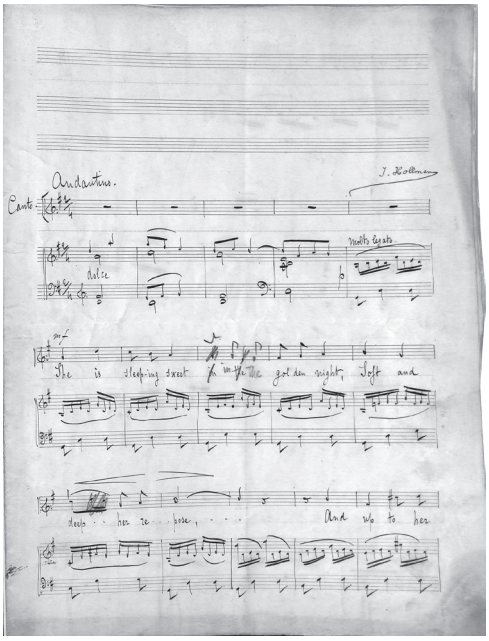
34.《セレナーデ Sérénade》
① チェロとピアノのための pour violoncelle et piano
献呈：Monsieur le Comte André Mniszech
出版譜：Paris : L. Grus et C.ie
出版年：[1890]
プレート番号：L. G. 4514
Score (7p.) + Part(2p.) ; 34cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.2/10.2】
　献呈をうけたアンドレ・ミセクは絵を趣味とし、ホルマンの肖像を描いた。
〖演奏〗1923年　ホルマン来日公演；2018年9月2日　紀南文化会館　渡部玄一（チェロ）、桑名美千佳（ピアノ）；同年9月15日　和歌山県立図書館　渡



セレナーデ②管弦楽版

部玄一（チェロ）、江上菜々子（ピアノ）
② チェロと管弦楽伴奏のための pour violoncelle avec accompagnement d'orchestre
自筆譜？ Manuscript (Autograph?)
成立年：n. d.
Score (6p.) ; 11 Parts
【南葵：3K1.4/14】
③ 弦楽合奏版ギュスターヴ・ロシュ編 transcript pour instruments à cordes par Gustave Roche
出版譜：Paris : Léon Grus Place St. Augustin
Score (4p.) ; 27cm
【南葵：3G2.3/2.1】
④ チェロと管弦楽版、ピアノ指揮つき J. クレマン編 pour violoncelle solo et orchestre,avec piano conducteur. orchestré par J. Clémand
出版譜：Paris : L. Grus et Cie, éditeurs, 65 bis, rue de Miromesnil
出版年：1926
【南葵：所蔵なし】

35.《彼女は眠っている She is sleeping》
歌とピアノのための pour chant et piano
自筆譜 Autograph



自筆楽譜の冒頭ページ

成立年：n. d.
Score (6p.) ; 35cm
【南葵：3H2.6/10.18】
　南葵音楽図書館で楽譜の出版が計画されたが、実現せず。

36.《眠りと目醒め Sleeping and waking》
声とオブリガートのヴァイオリンないしチェロのための for voice and violin/violoncello obligato
出版譜：London, Chappell
出版年：1891
歌　詞：F. F. Weatherly
【南葵：所蔵なし】

37.《E. ネリーニのヴァイオリンソナタホ短調 Sonate en Mi mineur pour piano et violon de Emile Nerini》
チェロのためのトランスクリプション transcrite pour violoncelle
出版譜：Paris : C. Hayet
出版年：[1917]
【南葵：所蔵なし】

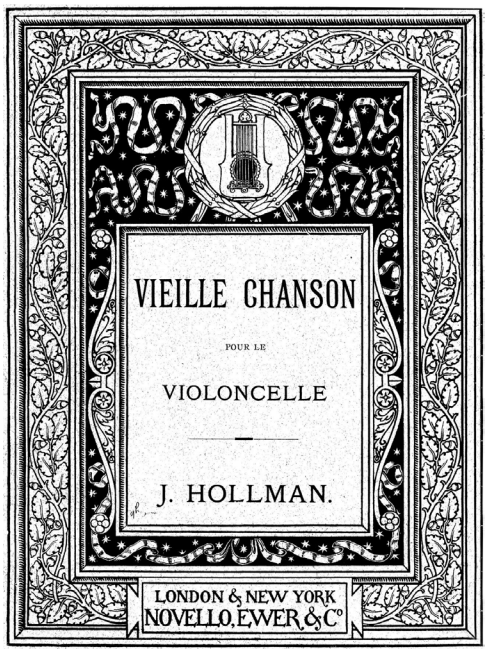
38.《ベルクの思い出 Souvenir de Berck》
チェロとピアノのためのワルツ valse pour violoncelle et piano
献呈：Ch. Dequeker
出版譜：Paris : A. Durand et fils
出版年：1919
プレート番号：D. & F. 7911
Score (4p.) + Part (1p.) ; 35cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.2/7.3】
　南葵所蔵は訂正済み試し刷り版(epreuve corrigée)。ベルクは北フランスのドーヴァー海峡に面した町。

39.《悲しみ Tristesse》
チェロとピアノのための pour violoncelle et piano
出版譜：London : Novello
出版年：1902

プレート番号：11367
Score (4p.) + Part (1p.) ; 31cm
【南葵：3G1.2/11.4】
　南葵所蔵は試し刷り版(epreuve)。

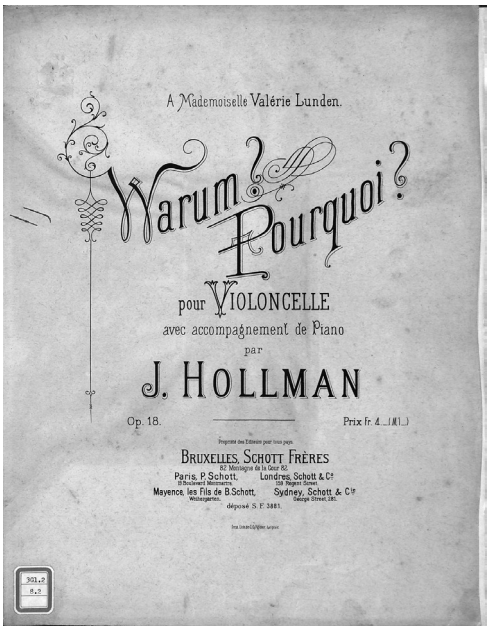
40.《ワルツ Valse》
チェロとピアノのための
pour violoncelle et piano
献呈：à son altesse royale
monseigneur le Prince de Galles
出版譜：Bruxelles : Schott Frères
出版年：188-
プレート番号：S. F. 3951
Score (6p.) + Part (2p.) ; 34cm
【南葵：3G1.1/13.1】

41.《古謡 Vielle Chanson》
チェロとピアノのための pour
violoncelle et piano
献呈：Ch. Pochet de Tinan
出版譜：London : Novello, Ewer & Co.
出版年：1894
プレート番号：9949
Score (4p.) + Part (1p.) ; 35cm
参照：IMSLP
【南葵：3G1.1/14.2】



出版譜のタイトル・ページ

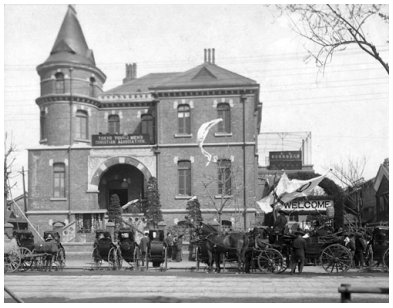
42.《何故？ Warum? Pourqois?》
チェロとピアノ伴奏のための pour
Violoncelle avec accompagnement
de Piano
出版譜：Bruxelles : Schott Frères
出版年：188-
プレート番号：S.F. 3881
Score (4p.) ; 35cm
【南葵：3G1.2/8.2】
　楽譜の冒頭ページには、既出の同名作品と区別するため“Warum? (No. 2)”と記されている。

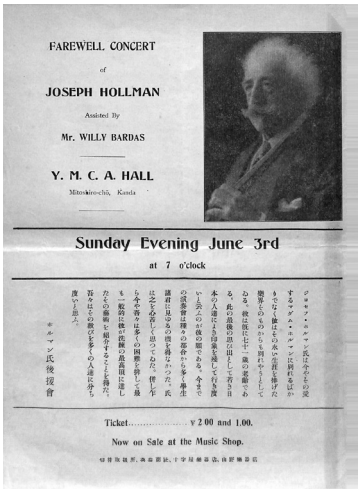


出版譜のタイトル・ページ

ホルマン　日本への告別

愛奏してきた楽器を日本に残し帰国するホルマンは、日本の若い人に向けた告別演奏会を東京神田のキリスト教青年会（Y.M.C.A.）会館で開催、徳川頼貞は帰国の数日前に自邸で歓送会を開催した。




FAREWELL CONCERT
of
JOSEPH HOLLMAN
Assisted By
Mr. WILLY BARDAS
Y. M. C. A. HALL
Mitsukoshi-chō, Kanda

Sunday Evening June 3rd
at 7 o'clock

Ticket.....¥ 2.00 and 1.00.
Now on Sale at the Music Shop.

▶**告別演奏会の告知**
◀**当時のY.M.C.A.会館**（神田美土代町）
▼**ホルマンの告別の辞**（原文は旧字旧仮名、縦書き）

席上、在京外交団の主席パッソンピエール ベルギー大使は立って、ホルマン翁の今度の破格の叙勲は翁の光栄は申す迄もないことながら、在留外国人の等しく名誉とするところであると述べて、盃を挙げて我が、天皇皇后両陛下の万歳を祝した。この時庭に控えていた戸山学校の軍楽隊は嘲喨と「君が代」を奏した。「君が代」が終ると私は立って、ホルマン翁の如き大芸術家を生んだオランダのウィルエルミナ女王陛下のために乾盃したいと述べて盃を挙げた。一同これに和すと、同時に軍楽隊はオランダの国歌を奏した。

儀礼上のことが終ると、ホルマン翁は目に一杯泪を浮べながら立って次のような挨拶をした。その姿を今も私は忘れることが出来ない。

「皆さん、私のこの度の日本訪問は、私にとって一生涯忘れられない思い出となりました。数年前パリで、ヨーロッパ巡遊中の徳川侯爵御夫妻にお目に掛りました時、侯爵は日本に来ないかとお勧めになりました。東洋の風物に接したいということは私の多年の宿望でありましたので、私は侯爵のお言葉に従って日本に参りました。この日出ずる国で私の見たものは、第一に殷賑を極めた都会、蜂の巣のように密集した建物、轟々たる鉄道でありました。泰西の文物の取り入れは急進活躍する日本を導く燦然たる炬火でありました。

しかし、日本は絶大なる工業国であるということを知ると共に、また古風な純粋な芸術、洗練された趣味、態度を持っているということも私は知ったのであります。私はお伽噺の都のような京都、それから日光、また箱根などを巡りました。箱根では神聖な富士山に敬意を表しました。徳川侯爵は都踊りとか、歌舞伎とか、その他あらゆる日本固有の芸術を私に味わせて下さいました。その上、教えて下さったことは、日本人の親切さであります。この美しい伝統こそ日本文化の総てを第一列に持って来たところのものだと思います。

私は日本で私の一生を通じて最も大きな歓迎と賞賛とを受けました。確かに多くの日本の人々は泰西の芸術に動かされております。我々芸術家はその役目が音楽の鑑賞のためという以上に更に意義あるものであると思います。それは芸術という綱によって国際間の友誼を固めるものとなるからであります。私が音楽会で演奏することは、私には故国からの使命を伝えるように感じます。また日本とオランダとの特別な友好関係は、私をしてその使命を果す事を容易にさせたと信じます。私は近く日本を去ることとなりました。特別の思召によって、未だ楽人が受けたことのない高い名誉の勲章を戴き、懐かしい思い出を胸に収めて私は第二の故郷パリに帰ります。皆さん御機嫌よう。」　　徳川頼貞『薔庭樂話』より

南葵音楽文庫　紀要　第２号

平成31年3月31日発行
令和3年8月10日改訂

発　　行　和歌山県立図書館
〒641-0051　和歌山県和歌山市西高松一丁目7番38号
電話　073-436-9500
http://www.lib.wakayama-c.ed.jp/

編集協力　有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒531-0071　大阪市北区中津七丁目３番２号１階
http://www.ttdesign.co.jp/

印刷製本　株式会社 協和
〒642-0017　和歌山県海南市南赤坂五丁目３番
http://www.kk-kyowa.jp/

©2019-2021 Wakayama Prefectural Library

本紀要には、地球環境を考慮した
植物油インキを使用しています。